

復興まちづくり

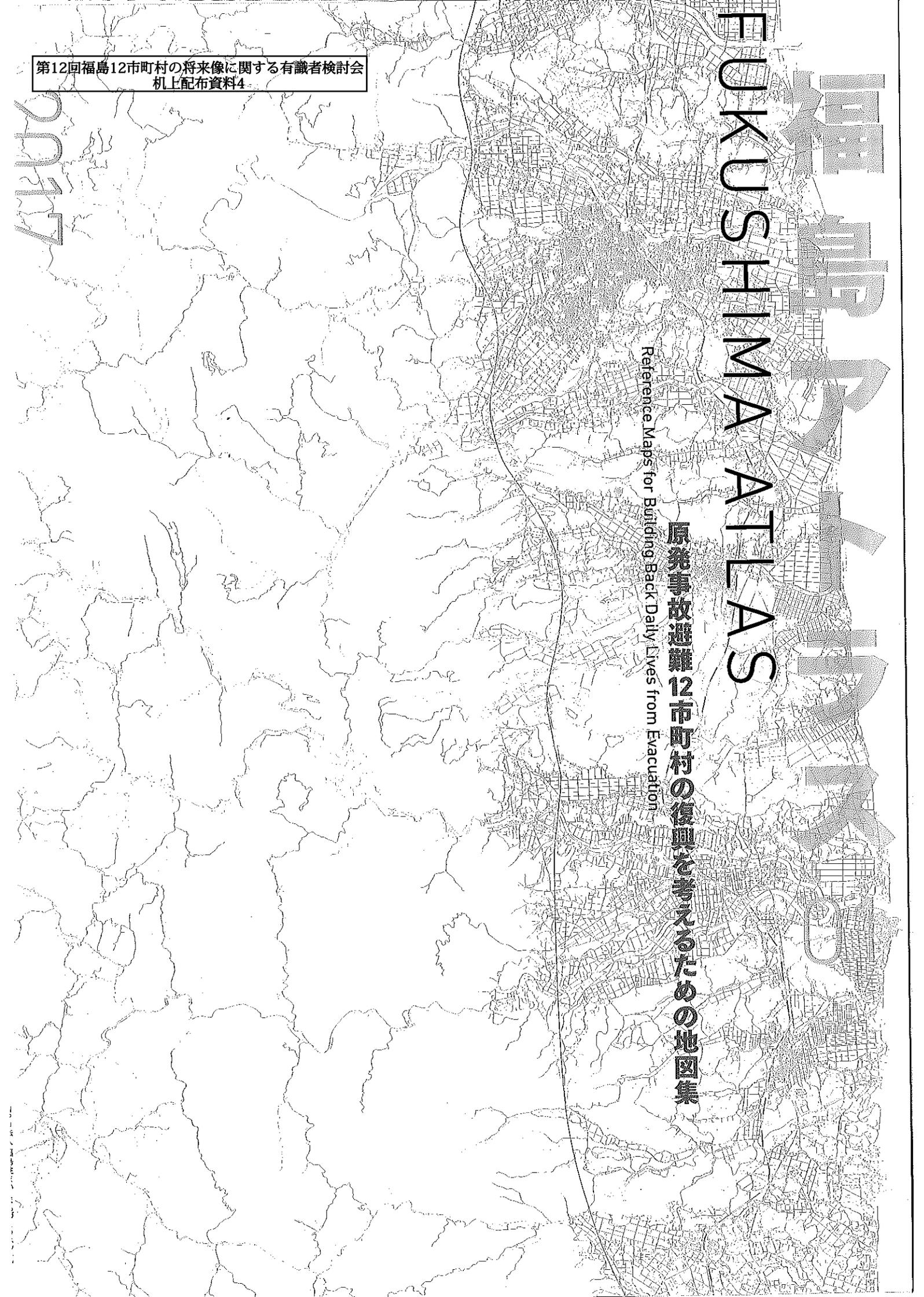
FUUKUSHIMA ATLAS

原発事故避難12市町村の復興をまねるための地図集

Reference Maps for Building Back Daily Lives from Evacuation

第12回福島12市町村の将来像に関する有識者検討会
机上配布資料4

2017



発刊にあたって

2011年3月11日に発生した東北地方太平洋沖地震は、地震・津波などの自然災害だけでなく、多様な側面をもつ複合災害を引き起こしました(東日本大震災)。

なかでも福島県下では、福島第一原子力発電所の事故のため、とくに12の市町村で大規模かつ広範な避難を強いられてきました。今日にいたるまでに、避難区域の解除は段階的に進められていますが、一方では今なおその見通しの立たない地域もあり、また解除がたたちに復興につながるわけでもありません。さまざまななかから避難をされてきた皆さんの一人ひとりが異なる事情を抱え、場合によっては非常に広い地域的なひろがり視野に入れ、たくさんの条件を比べながら、生活再建の可能性を考えていらっしゃると思います。

ところが、これまでの避難の推移や復興状況に関する情報は、市町村別に住民が伝えられてはいるものの、同じ県下でも他の市町村の情報を集めることは意外に簡単ではありませんし、それらを組み合わせる全体像をつかむことはもっと難しいでしょう。そこで、被災12市町村の復興にかかわる情報を一冊にまとめ、生活再建の参考にしていただく資料とすることを企画し、編集を進めてきました。本誌が12市町村の復興と一人ひとりの生活再建の一助になればと願っています。

2017年3月31日

INPO法人福島住まい・まちづくりネットワーク

全域アトラス

原発事故後の避難と復興の状況について、市町村をこえる全体像をつかむための地図集です。避難区域の推移、役場機能、医療・福祉施設など、注目することがらによって、見わたす地域の広がりも、そのなかでの施設等の分布の様子も違います。7つの地図をそれぞれ違う描き方にしたのはそのためです。

- 02 1 避難区域の変遷
- 03 2 役場機能の立地変遷
- 04 3 医療・福祉施設の開業状況
- 05 4 幹線交通網と商業施設の稼働状況
- 06 5 地域公共サービス施設
- 07 6 小学校・中学校の校区と再開状況
- 08 7 大規模復興事業の分布

市町村アトラス——ランドスケープ・データスケープ・ヒストリカルスケープ

各市町村について、色々な角度から、じっくり見つめ直すための地図集です。自治体別に、下記の3種類のページを用意しました。

- **ランドスケープ(景観)**
普段とちがう、高さ50~100メートルくらいのところから、町や村の風景を見直してみます。
- **データスケープ(資料)**
2011年3月11日から今日までの避難や復興の歩みを、事実と数字でまとめています。
- **ヒストリカルスケープ(歴史)**
先人たちは町や村をどのようにつくってきたのでしょうか。明治末から100年くらいを振り返ります。

- 09 南相馬市 MINAMI-SŌMA CITY
- 15 浪江町 NAMIE TOWN
- 19 双葉町 FUTABA TOWN
- 23 大熊町 ŌKUMA TOWN
- 29 富岡町 TOMIOKA TOWN
- 33 楢葉町 NARAHARA TOWN
- 37 広野町 HIRONO TOWN
- 41 飯館村 IITATE VILLAGE
- 47 川俣町 KAWAMATA TOWN
- 51 葛尾村 KATSURAO VILLAGE
- 55 田村市 TAMURA CITY
- 59 川内村 KAWAUCHI VILLAGE

- 63 緊急時に役立つ電話帳
いざというときに役立つ連絡先をまとめました。

Topics

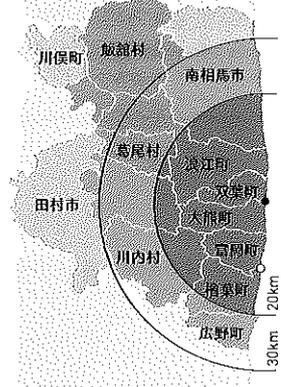
地図は町や村を鳥の目で見下ろすものですが、ここでは人の目線から2017年1~2月の地域と人々の活動を伝えます。

- 27 1 集まって、食べる | 地域を盛り上げるこだわりの一杯
- 28 2 届けて、見守る | 地域を駆け回る小型バス
- 45 3 使って、生かす | よみがえる家と地域
- 46 4 手を入れ、伝える | 地域のなかの神社

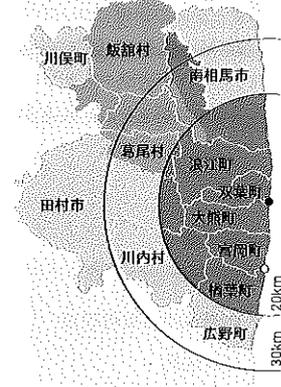
1. 避難区域の変遷

●福島第一原発 ○福島第二原発 警戒区域 計画的避難区域 緊急時避難準備区域
 帰還困難区域 居住制限区域 避難指示解除準備区域 避難指示解除

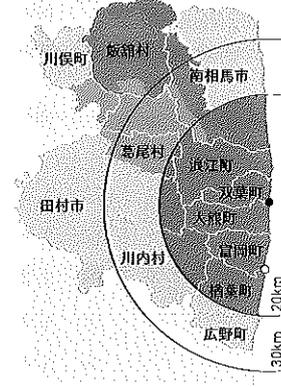
2011/4/22



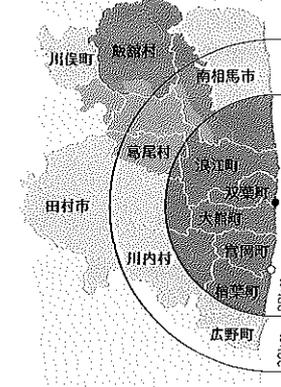
2012/4/16



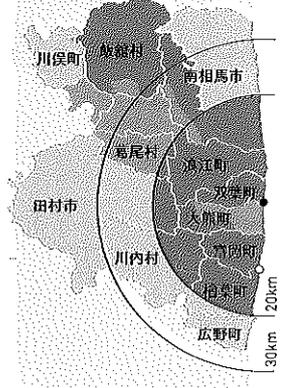
2012/7/17



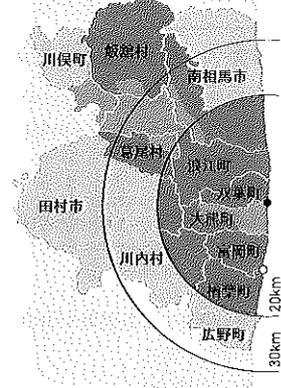
2012/8/10



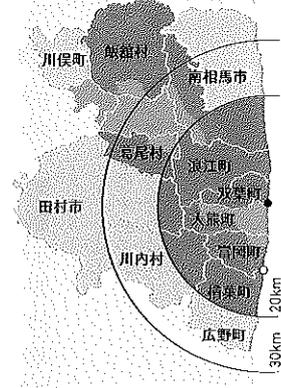
2012/12/10



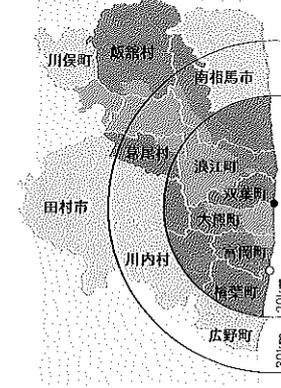
2013/3/22



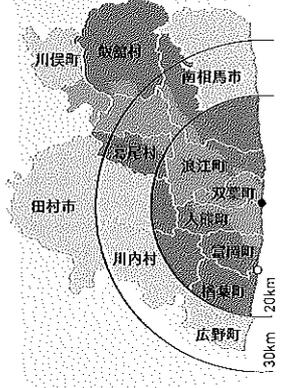
2013/3/25



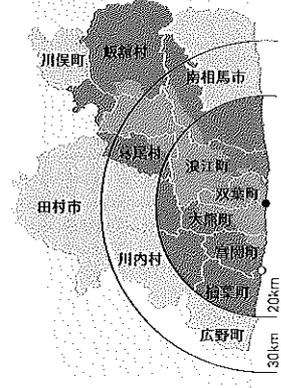
2013/4/1



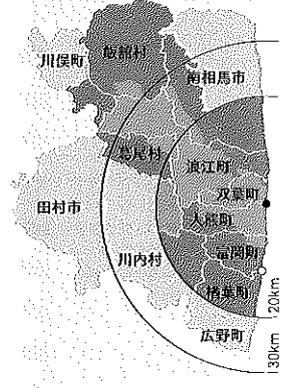
2013/5/28



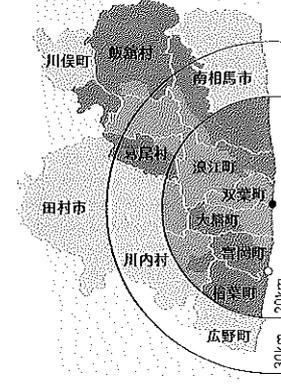
2013/8/8



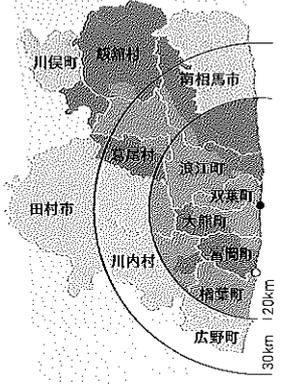
2014/4/1



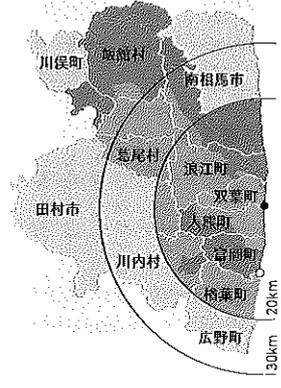
2014/10/1



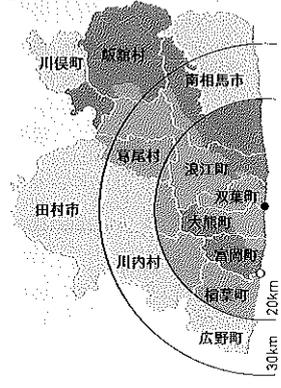
2015/9/5



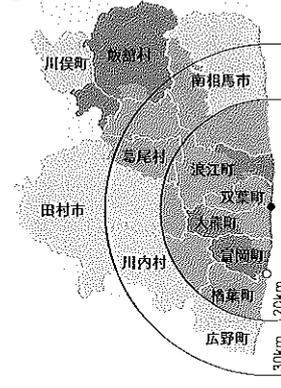
2016/6/12



2016/6/14



2016/7/12

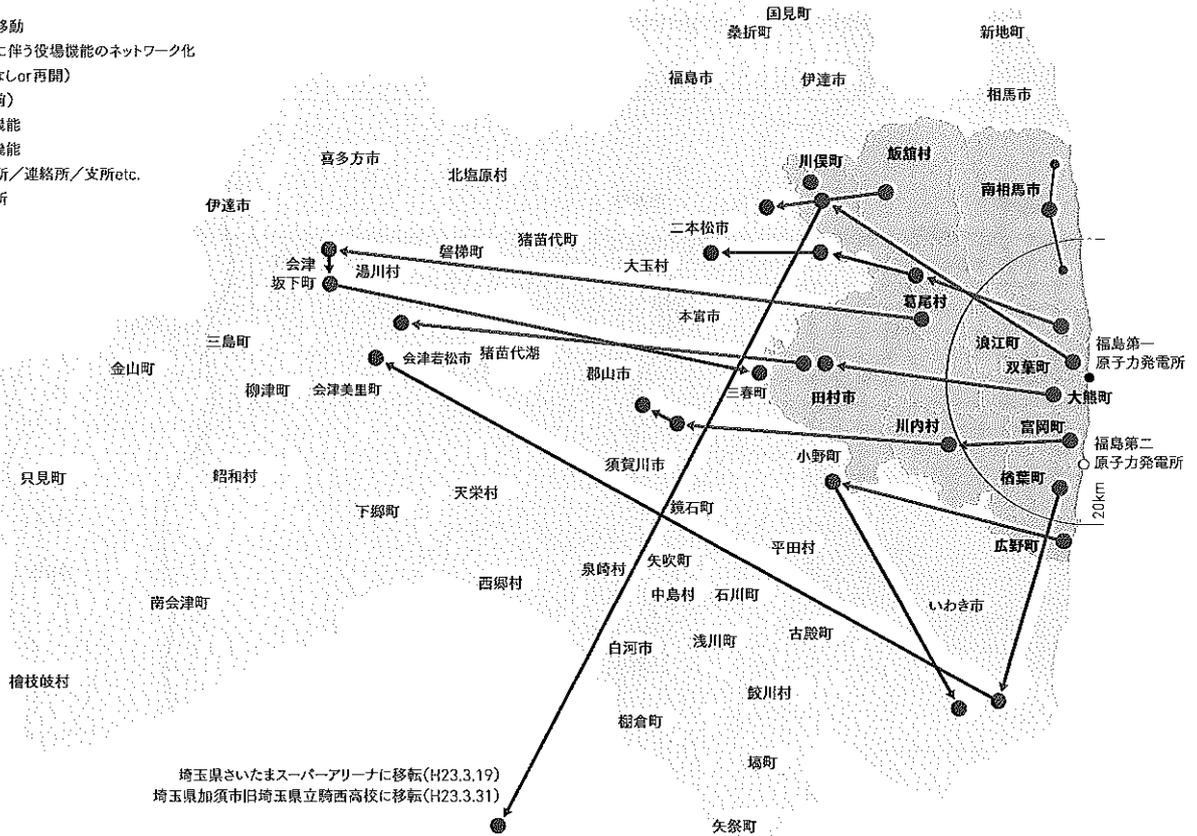


2011年3月11日の原発事故発生当日に「原子力緊急事態宣言」が発令され、以後、避難指示が刻々と打ち出されるが、2011年4月22日には被害拡大を防ぐ目的での[警戒区域/計画的避難区域/緊急時避難準備区域]の3種に整理された。このページでは、以降の区域設定の変更をすべて図化している。1年後の2012年4月16日には、[緊急時避難準備区域]がなくなり、同時に、住民の帰還に向けた準備の指針となる[帰還困難区域/居住制限区域/避難指示解除準備区域]という新しい3種の区域が導入されている。以後はこの3種への移行が進み、これらについても段階的に解除に向けて移行している。

2. 役場機能の立地変遷

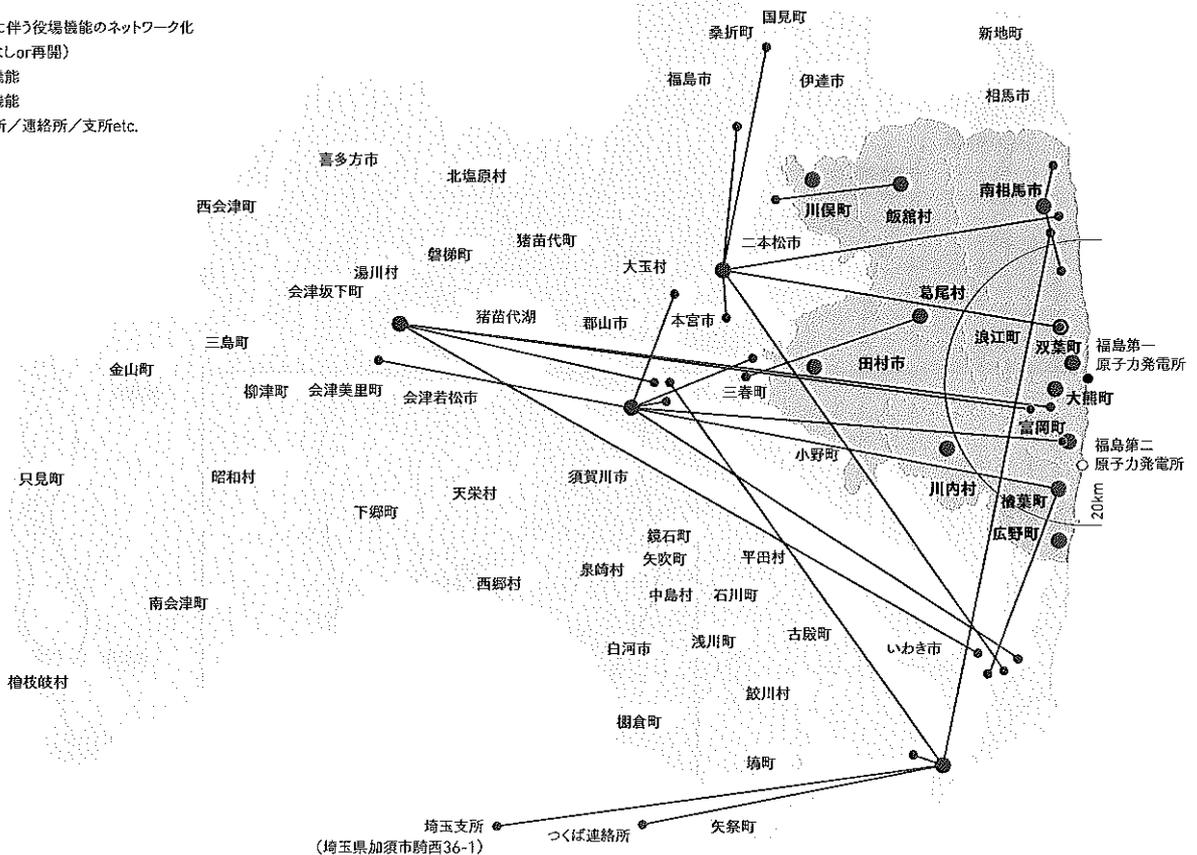
2011発災直後

- 役場機能の移動
- 住民の分散に伴う役場機能のネットワーク化
- 本庁舎（移転なしor再開）
- 本庁舎（震災前）
- 閉鎖した役場機能
- 移転した役場機能
- 区役所/出張所/連絡所/支所etc.
- 休業中の区役所



現在

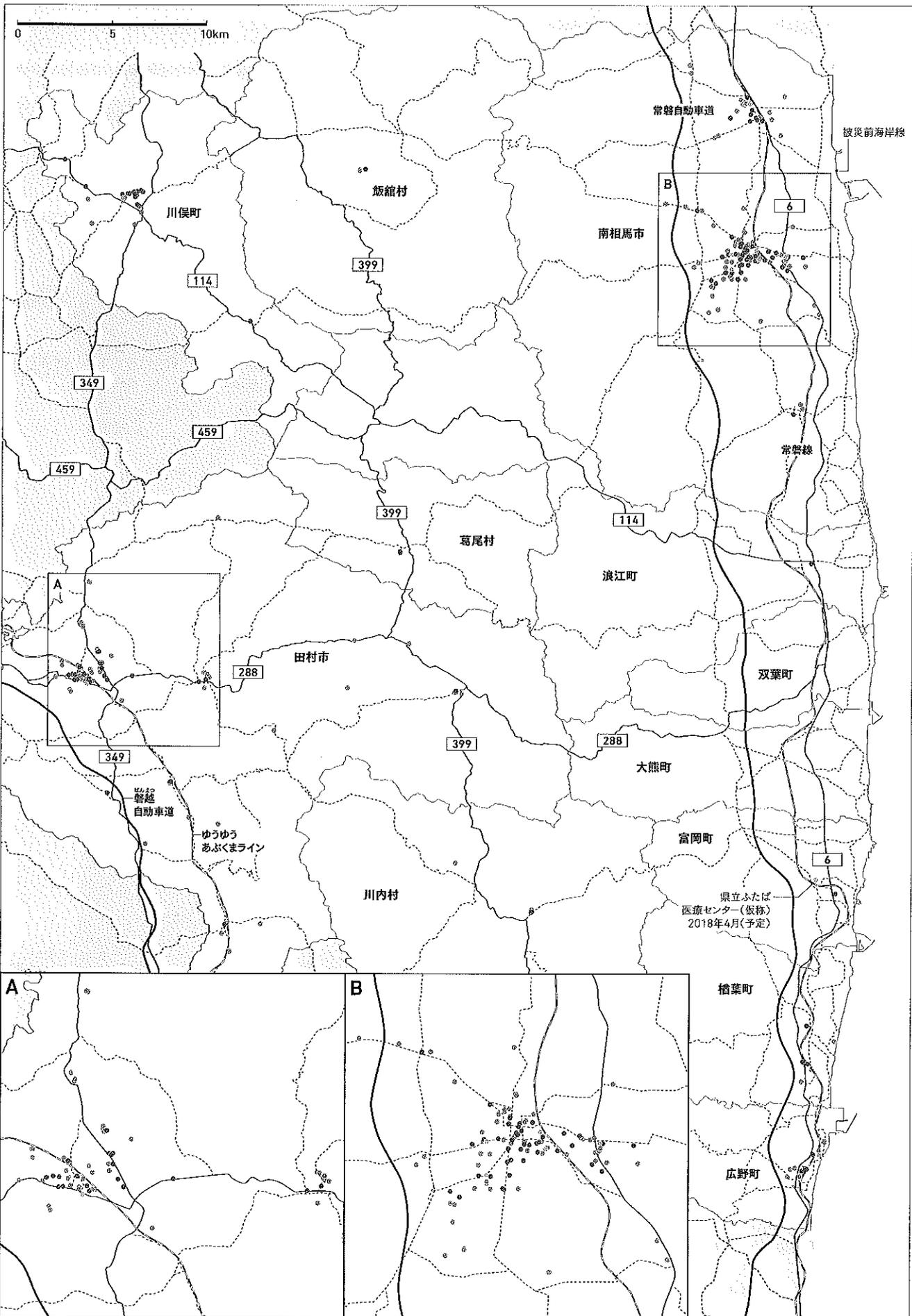
- 住民の分散に伴う役場機能のネットワーク化
- 本庁舎（移転なしor再開）
- 閉鎖した役場機能
- 移転した役場機能
- 区役所/出張所/連絡所/支所etc.



原発事故発生後の住民の避難先は、さまざまな背景・方針・経緯によって選ばれ、結果としてきわめて広域に分散した。市町村別アトラス(→p.09~62)に示したように、その範囲は全国にわたっているが、仮設住宅団地や借上げ住宅(みなし仮設)の集中する県内の避難先には、役場やその出張所・連絡所・支所などが設置されていた。このページの上段では、その初期的な動きが出揃った2011年末段階での役場機能の立地をまとめた。下段は2017年3月現在の状況を示している。

3. 医療・福祉施設の開業状況

— 高速道路 — 主要道路（国道） ---- 副道路（県道）
 ● 病院 ● クリニック・診療所 ● 福祉施設

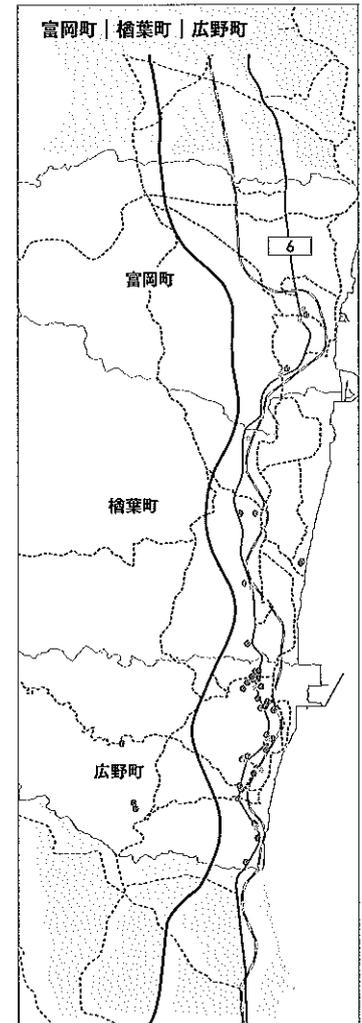
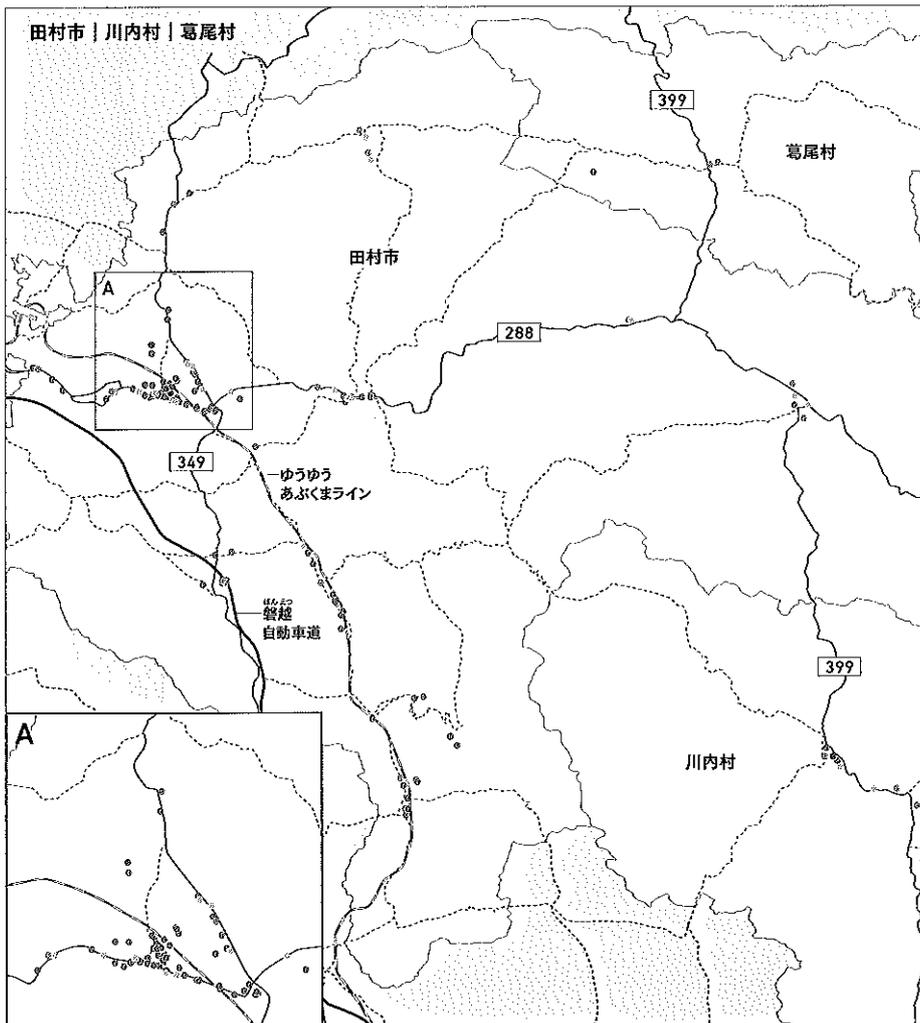
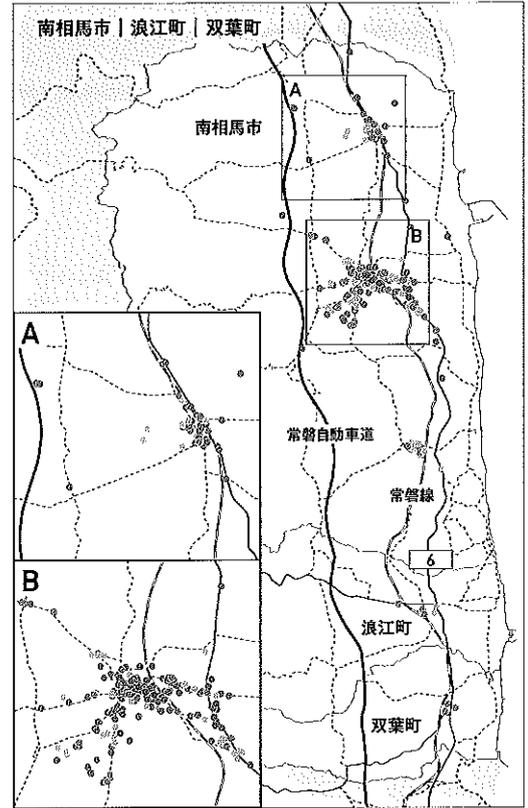
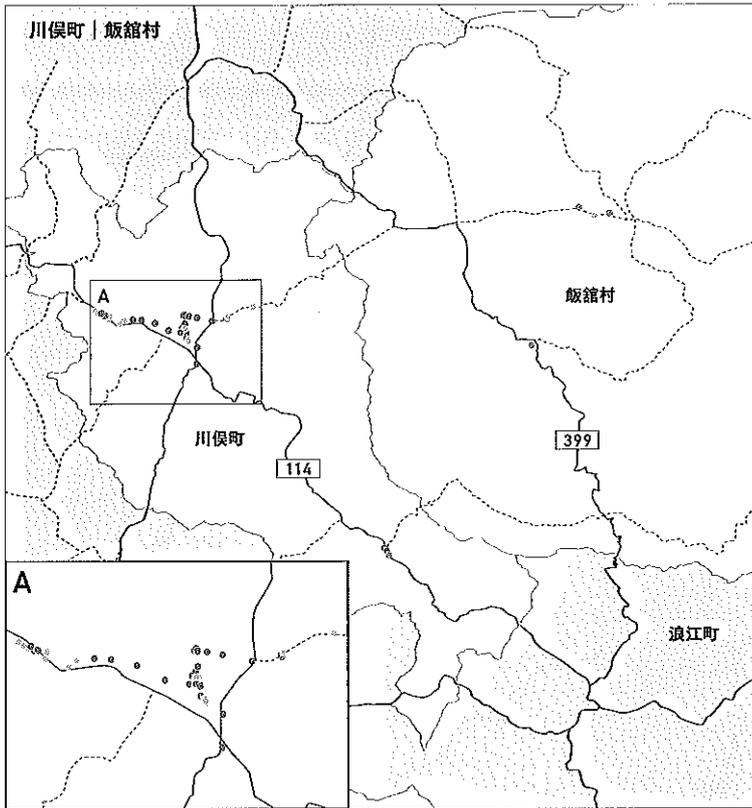


2017年3月現在の医療・福祉施設の立地を示しているが、現在開設準備中のものも含めた。[病院][クリニック・診療所]に加えて、老人ホーム・グループホーム・デイサービスあるいは学童保育・託児所などの[福祉施設]の立地状況を示している。このうち救急病院など緊急時の必要性が高いと思われる施設の連絡先は、巻末の「緊急時に役立つ電話帳」（→p.63-64）を参照されたい。

4. 幹線交通網と商業施設の稼働状況

— 高速道路 — 主要道路（国道） - - - 副道路（県道） ● 飲食店 ● 商店 ● ガソリンスタンド ● 宿泊施設

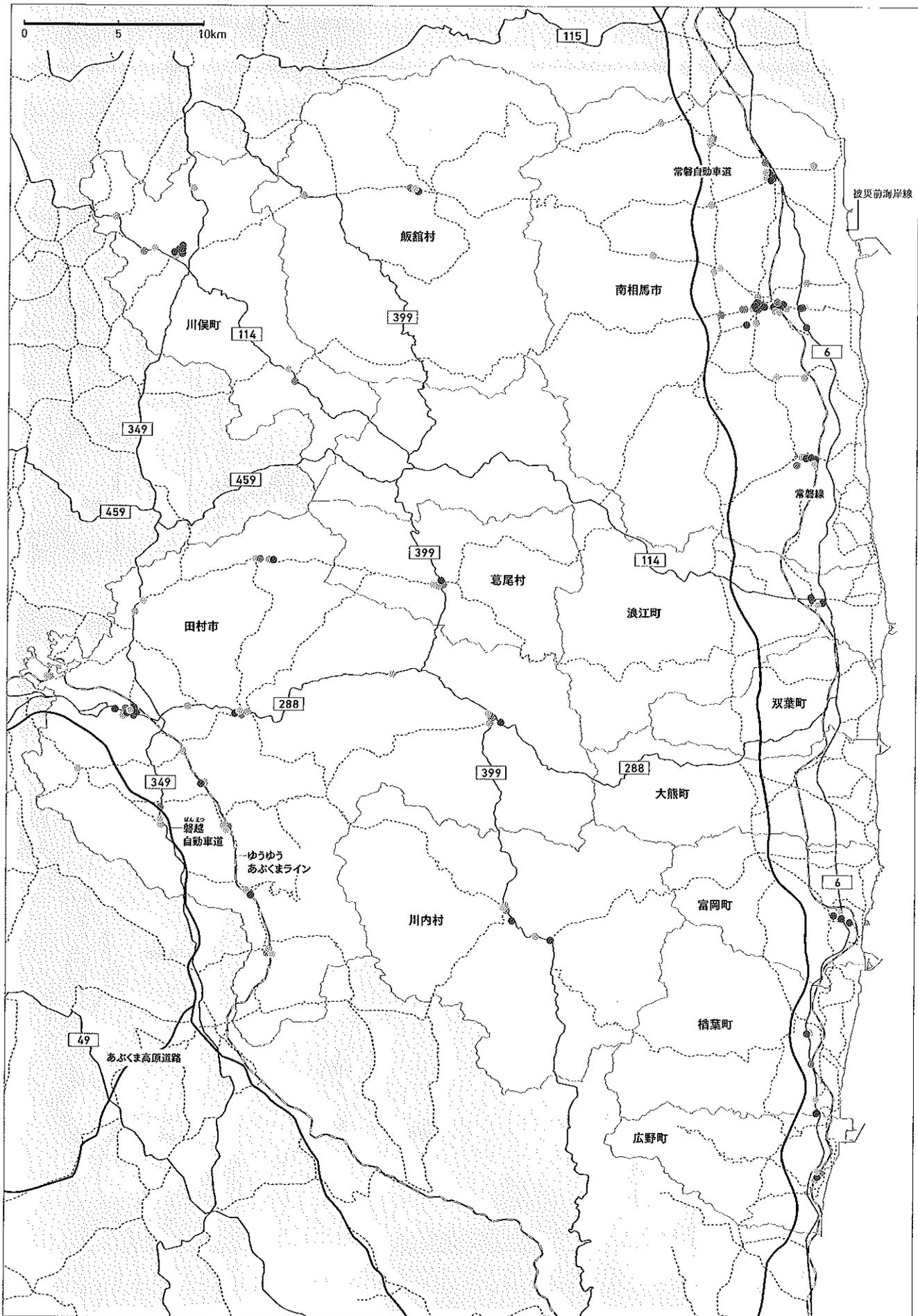
0 5 10km



商業施設は、当然ながら人口が集中する中核的な都市の中心部に集まるが、他方で、自家用車が普及する1970年代以降は幹線道路に沿って大きな駐車場をもつ沿線型店舗（ロードサイド店舗）も増えている。原発被災地では、除染作業・土木工事などに携わる建設会社の社員や作業員や工事用車両が多数移動する幹線道路やその結節点に、コンビニや飲食店、あるいはホームセンターなどが営業しているのが特徴的である。

5. 地域公共サービス施設

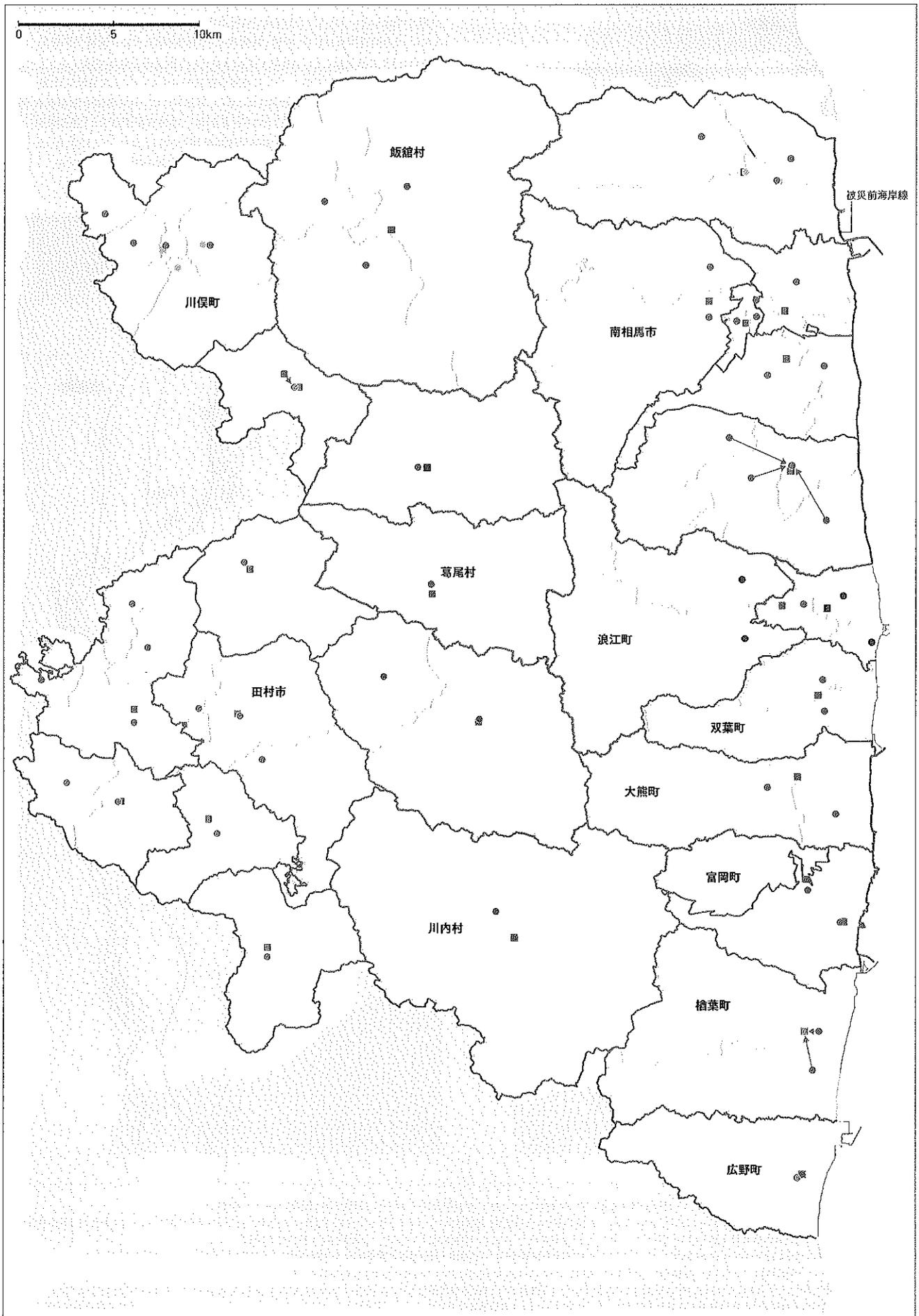
— 高速道路 — 主要道路（国道） 副道路（県道）
 ● 警察署・派出所 ● 消防署 ● 金融機関 ● 郵便局 ● JA



役場以外にも、わたしたちの社会には地域の生活を支える様々な公共的サービスの施設がある。このページでは、[警察署・派出所][消防署][金融機関][郵便局][JA]をとりあげて、稼働しているものの分布をまとめた。これら施設は、一時的に停止していたものもあるが、概して現在の稼働率は高い。このうち、[警察署・派出所][消防署]については、その連絡先を巻末の「緊急時に役立つ電話帳」(→p.63-64)に掲載した。

6. 小学校・中学校の校区と再開状況

●小学校 ■中学校 小学校区 — 中学校区 →統合・集約
 ◎本校舎で再開 ◎仮校舎で再開 ◎通常通り開校 ◎震災以前に活用されていた教育施設
 ◎休校 ◎将来活用される教育施設

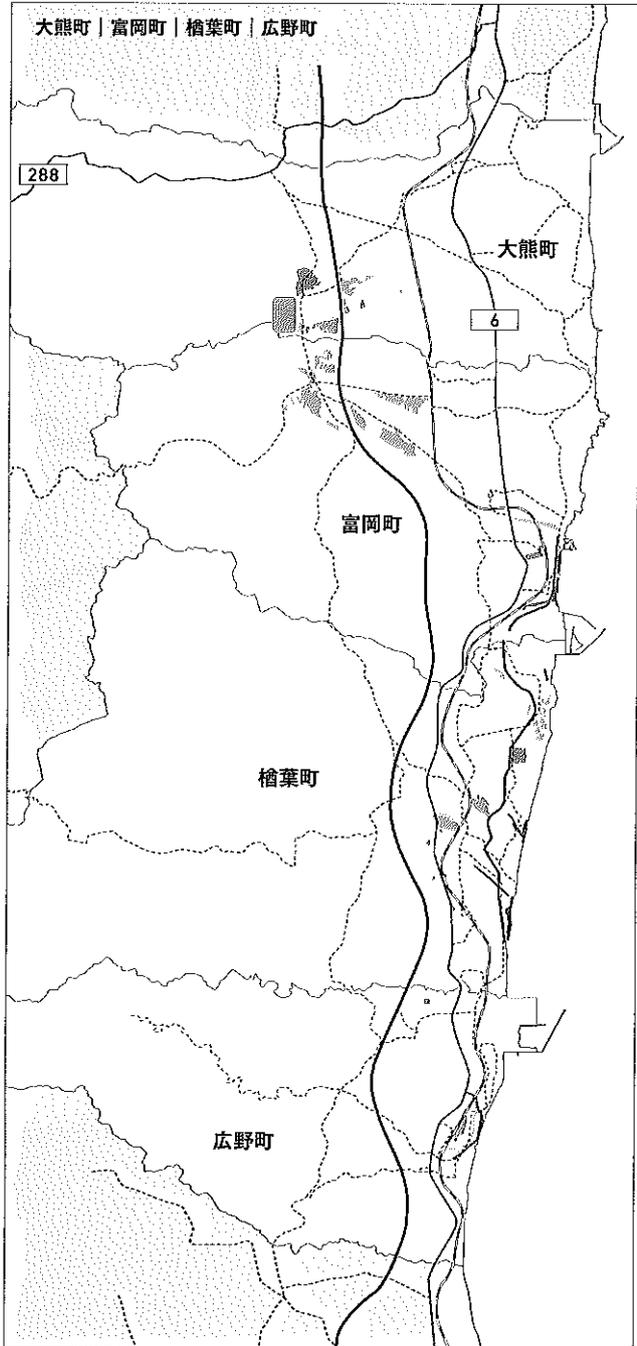
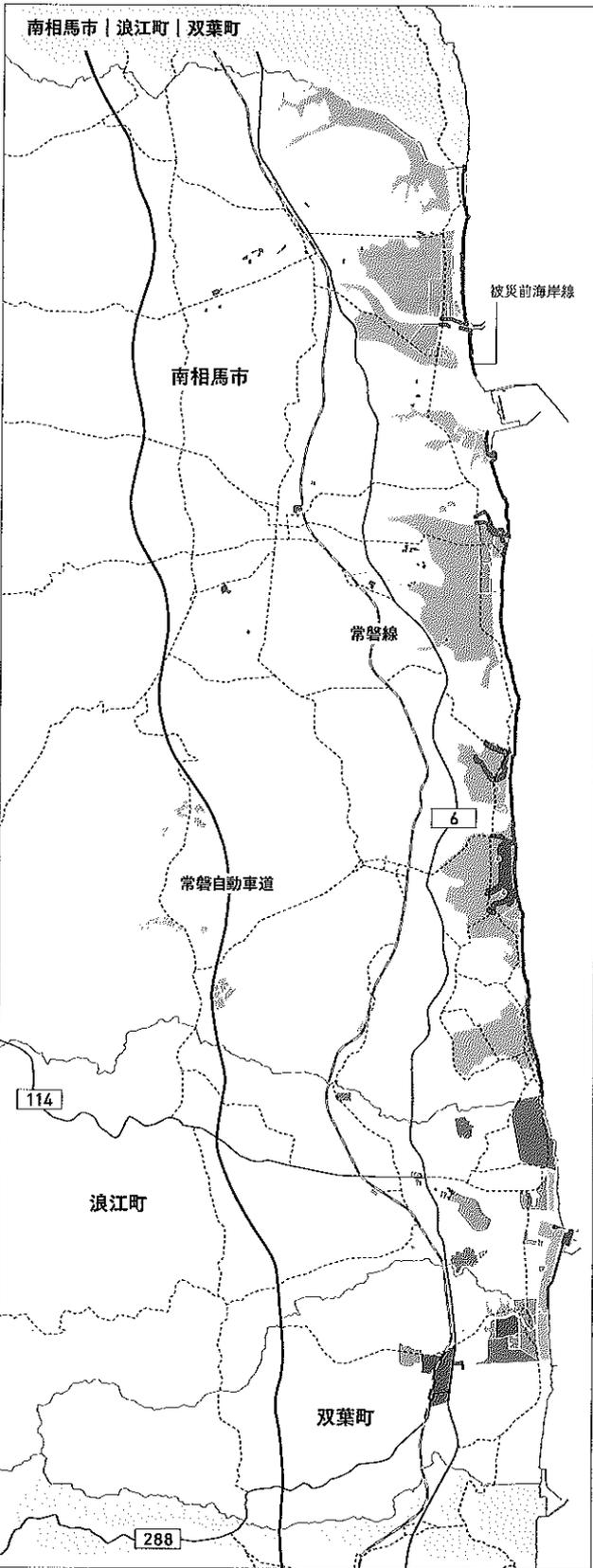


小学校・中学校は子どもの教育を担うだけでなく、[学校区]が地域コミュニティのまとまりとしても機能するなどさまざまな意義をもつ重要な施設である。このページでは、12市町村がどのような[小学校区/中学校区]に分割されているか、そして2017年3月時点でどの学校が開校しているかを地図に示した。震災以前から学校の整理統合が進められていた地域もあるが、震災後に集約される学校、あるいは閉校後も現在あるいは将来的に他の目的で活用される学校施設もある。

7. 大規模復興事業の分布

— 高速道路 — 主要道路(国道) 副道路(県道) 住宅整備 防災整備 復旧関係 産業整備
 関エネルギー整備 環境整備

0 5 10km



地域の復興において何よりも重要なのは住民の生活再建であろう。しかし、それは住宅をはじめ、店舗・事業所などの民間施設、そして役場や学校をはじめとする公共施設、そして道路や堤防などの土木構造物の復旧復興によって支えられる。このページでは、こうした地域の復興のなかで、とくに大規模に計画・実施される公共事業の区域を地図にまとめた。具体的には、防災集団移転事業などの[住宅整備]、防潮堤・防災公園などの[防災整備]、道路等を復旧する[復旧関係]、あるいは[産業整備][エネルギー整備][環境整備]がある。なお、ここに表示した事業計画には、詳細に決定されたものから、大まかな計画の段階のものまでを含む点に留意されたい。

7 大規模復興事業の分布

全域アトラス1~7の作成にあたって活用した資料：(1.避難区域の変遷) ふくしま復興ステーション—復興情報ポータルサイト(避難区域の変遷について—解説—)
<http://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/cat01-more.html> (2.役場機能の立地変遷) 建築雑誌2013年1月号 p13避難の実態とその考察から見る今後双葉郡を中心とする町村役ば機能移転先
 (制作・提供：日本大学工学部浦部智義研究室・はりゅうウッドスタジオ) | ふくしま復興ステーション—復興情報ポータルサイト(避難地域12市町村の詳細)
<http://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/list271-840.html> | 各12市町村役場HPより (3.医療・福祉施設の開業状況 4.幹線交通網と商業施設の稼働状況 5.地域公共サービス)
 ふくしま復興ステーション—復興情報ポータルサイト(避難地域12市町村の詳細) <http://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/list271-840.html>
 | 福島県帰還支援アプリポータル <https://www.pref.fukushima.lg.jp/kikan/> | 福島県HP—指定医療機関状況—より <https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/21045a/shiteizyokyo.html>
 (6.小学校・中学校の校区と再開状況) 南相馬市立学校通学区域に関する規則(H18.1.1教育委員会規則第13号) | 双葉町立小・中学校の通学区域に関する規則(S47.12.20教育委員会規則第1号)
 | 浪江町立学校就学指定に関する規則(H7.9.23教育委員会規則第4号) | 大熊町通学区域の区域を定める規則(S44.10.1教育委員会規則第15号)
 | 富岡町立学校就学指定に関する規則(H18.11.21教育委員会規則第4号) | 楡葉町通学区域の区域を定める規則(S61.4.1教育委員会規則第3号) | 川俣町立学校通学くいきに関する規則
 (S36.2.1教育委員会規則第6号) | 田村市学齢児童生徒の就学すべき学校の指定に関する規則(H17.3.1教育委員会規則第10号) | 飯館村立学校区域に関する規則(S63.2.1教育委員会規則第1号)
 (7復興整備出典) 南相馬市：南相馬市復興整備計画(平成29年1月25日) | 浪江町：浪江町復興計画【第二次】平成29年2月15日 | 双葉町：双葉町復興まちづくり計画(第二次)平成28年12月
 | 大熊町：大熊町復興整備計画 平成29年2月22日 | 富岡町：富岡町復興整備計画 平成29年1月31日 | 楡葉町：楡葉町復興整備計画 平成29年3月2日
 | 広野町：広野町復興整備計画 平成28年3月8日

南相馬市

MINAMI-SOMA CITY / LANDSCAPE



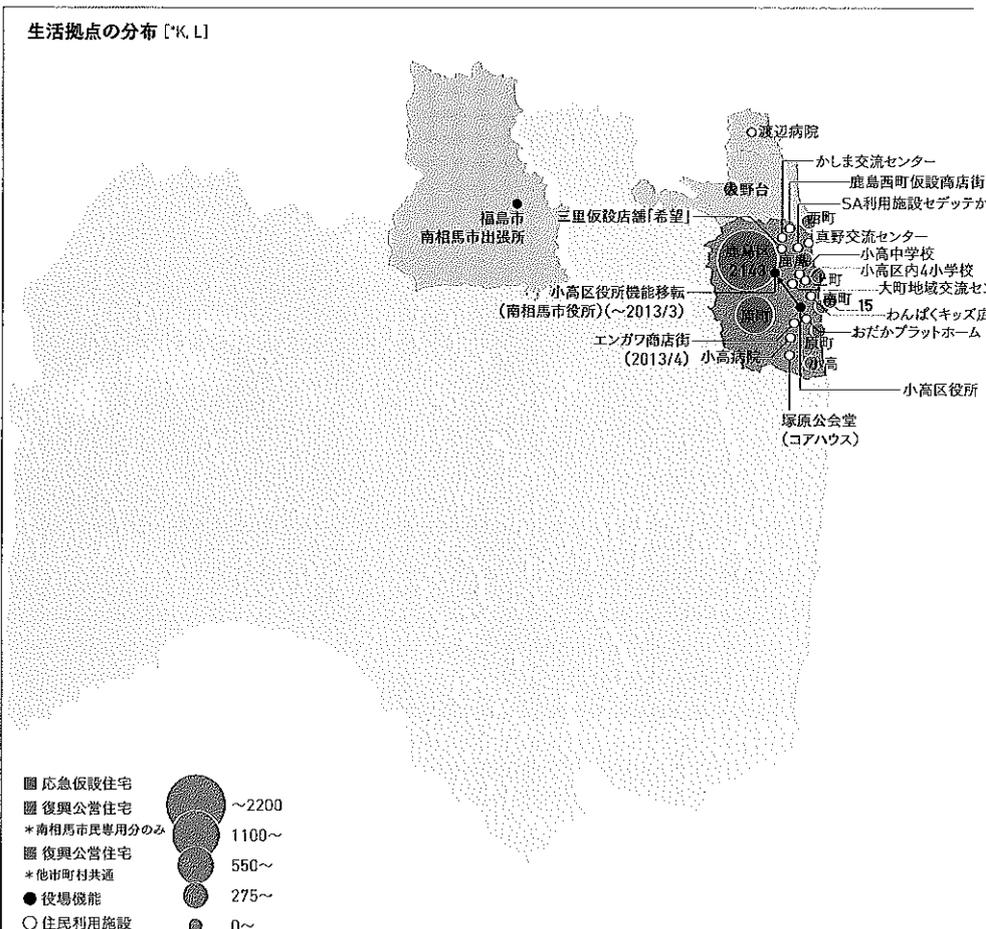
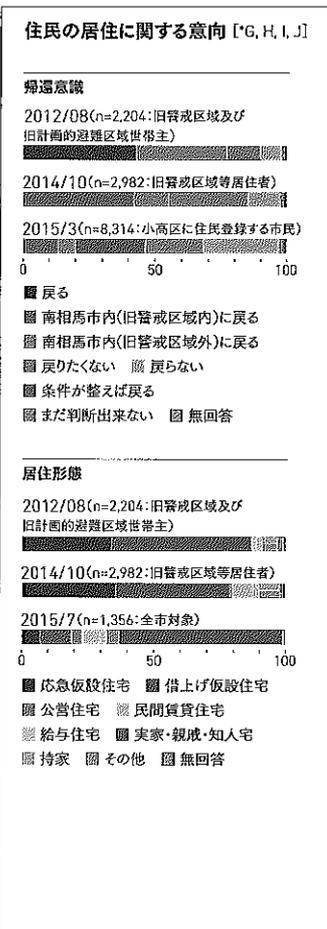
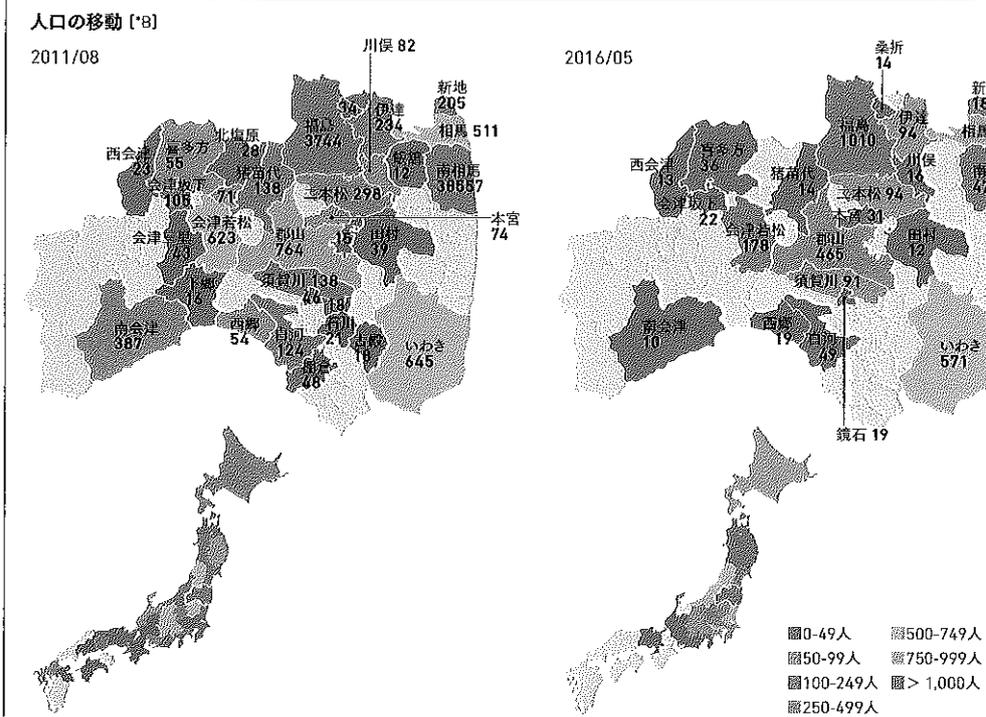
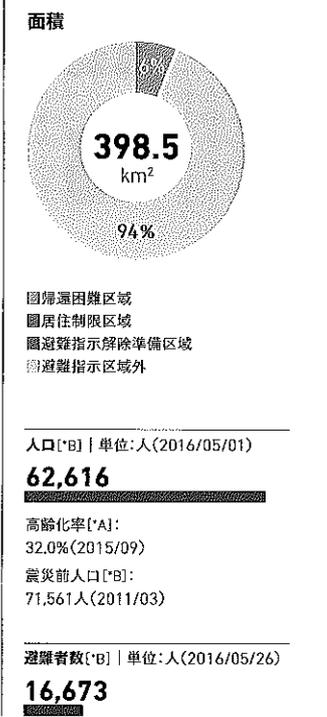
南相馬市

MINAMI-SŌMA CITY

-  市章
-  市の花: さくら
-  市の鳥: ひばり
-  市の木: けやき

南相馬市は、福島県浜通りの北部に位置する。東日本大震災における津波による死者・行方不明者は650名を超え、福島県内で最も多い。また、福島第一原子力発電所の事故により、市の43%(小高区の全域と原町区の一部)が避難指示区域に指定された。同事故によって市外への集団避難がいったん行われ、福島市に役場

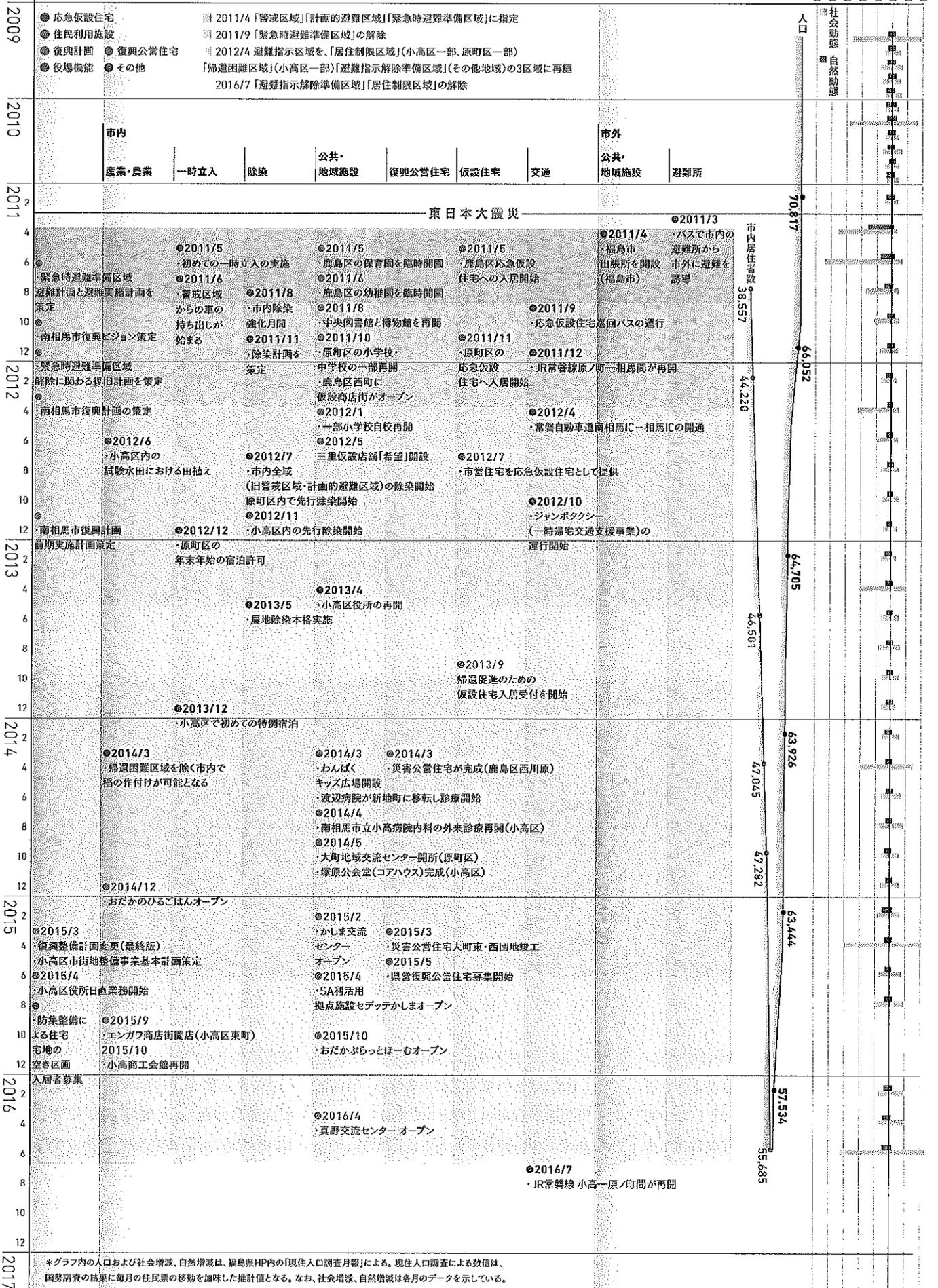
出張所が整備された。応急仮設住宅や災害公営住宅は南相馬市内に整備され、避難区域内でも集会所、医療施設、商業施設などが再開・整備されている。2016年7月に避難指示解除準備区域、居住制限区域の避難指示は解除され、現在は市の6%が避難指示区域(帰還困難区域)に指定されている。



南相馬市

データスケープ

人口の変遷と復興経緯【A,C】

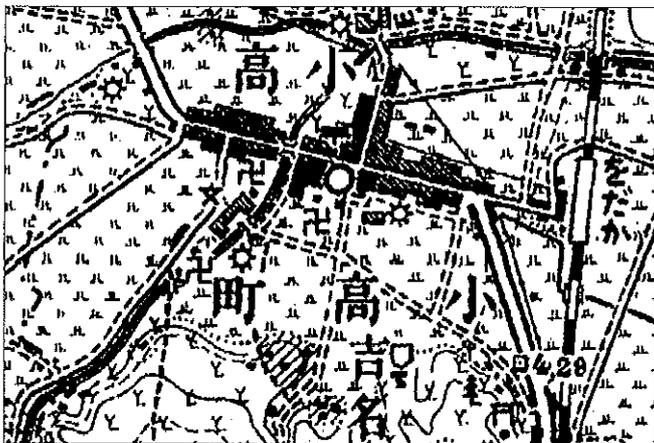


参考資料: *A 福島県HP(<http://www.pref.fukushima.lg.jp>) | *B 南相馬市HP(<http://www.city.minamisoma.lg.jp>) | *C 南相馬市総務部秘書課「広報みなみそま」(2011.4-2016.6) | *D 南相馬市「南相馬市復興ビジョン」(2011.8) | *E 南相馬市「南相馬市復興計画」(2011.12) | *F 南相馬市「南相馬市復興計画前期実施計画」(2012.11) | *G 南相馬市「南相馬市旧警戒区域及び旧計画的避難区域世帯主意向調査回答結果」(2012.8) | *H 南相馬市復興企画部企画課「南相馬市旧警戒区域等市民意向調査回答結果」(2014.10) | *I 南相馬市復興企画部企画課「南相馬市旧警戒区域等市民意向調査回答結果」(2015.9) | *J 南相馬市小高区地域振興課「小高区市民意向調査」(2015.8) | *K 特定非営利活動法人循環型社会推進センター「福島県復興公営入居募集案内」 | *L 福島県「復興公営住宅入居対象市町村ごとの工程表」

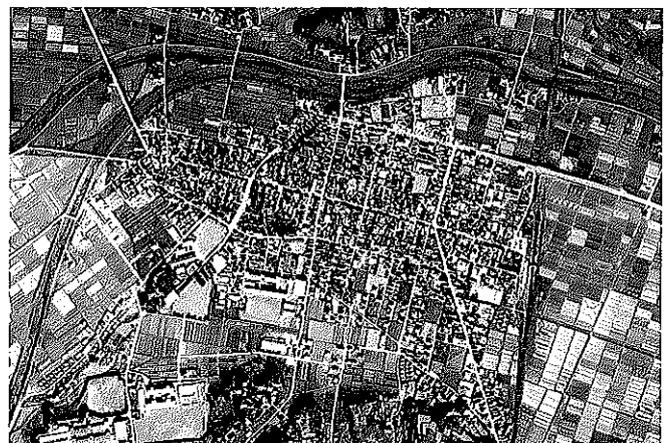


©Google Earth

明治初期の地形図／戦後の空中写真



「原町」1908年測図・1911.7.30発行



1974-78年 国土地理院

1889(明治22)年に行方郡小高村が成立。1896(明治29)年に行方郡が宇多郡と合併し相馬郡となり、1954(昭和29)年には小高村・福浦村・金房村の1町2村が合併し小高町が成立。2006(平成18)年、原町市・相馬郡鹿島町と合併し南相馬市となり、小高町は小高区になった。人口は1975(昭和50)年で14,336人(小高町)、2011(平成23)年では12,636人(小高区)。東部をJR常磐線と国道6号線が南北に走る。山間を前川が東に流れ、小高川に合流して太平洋に注ぐ。これらの河川によって扇状地が

形成され、波状の小起伏をなす。

「小高」は古い郷村名に由来する。中世に野馬追が行われた地として著名であり、現在でも小高神社の祭礼として野馬追祭りが行われる。

小高(一区～五区) | 北端を東に流れる小高川南岸の沖積地に市街地が発達している。近世に相馬氏が小高城を築いて勢力を拡大、それを起源とする浜街道の宿場町が栄えたが、1887(明治20)年に旧国道6号線の開通とともに宿場の町並み

は次第に消えていった。

古くから稲作が中心だが明治維新後には商品作物として養蚕が導入される。1898(明治31)年に国鉄常磐線の開通後は養蚕、製糸を中心に急速に発展、その後日露戦争後に一時的に農作が隆盛を迎えるがすぐに反動で大不況に陥り、対策として昭和初期に区画整理事業が行われた。第二次産業の隆盛とともに機業場や鉄工場、商店街と住宅街が複合する町並みに変貌し、現在では多数の企業が市街地周辺に進出している。

12
南相馬市
レスリーカリスターフ



©Google Earth

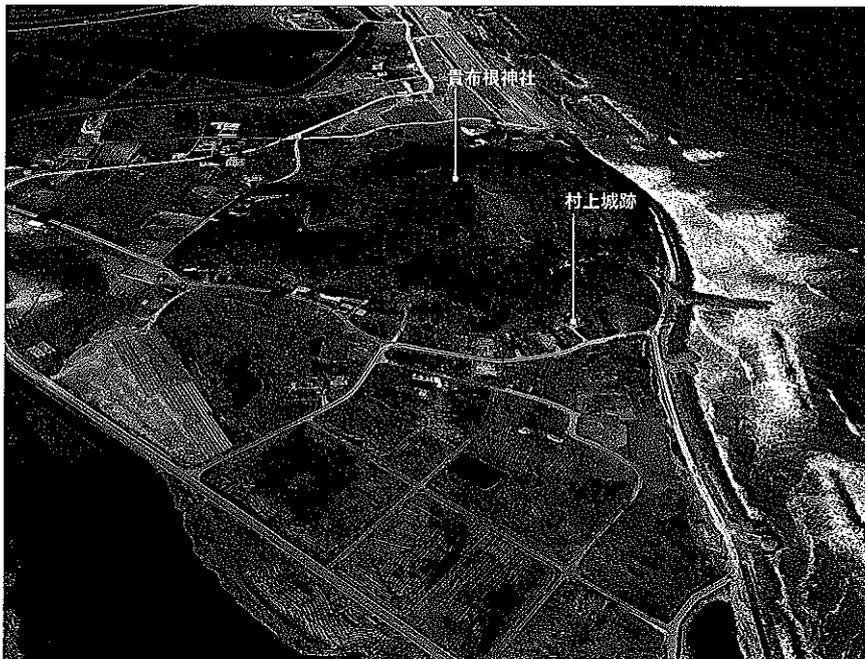


〔井田川浦〕1908年測図・1910.7.30発行



1974-78年 国土地理院

村上 Murakami



©Google Earth



〔井田川浦〕1908年測図・1910.7.30発行



1974-78年 国土地理院

塚原 | 南西から北東に向けて県道が走る。小高川左岸の沖積地に水田が開け、海岸沿いの丘陵の斜面に集落を形成する。1847(弘化4)年から近世末期には郷中の年貢を大船に積み、江戸に輸送した。年貢だけでなく特産の塩・海産物、移入される砂糖、あら鉄などの集散・交易地として賑わった。近世では半数が漁業従事者であり、当時はホッキ貝・ヒラメ・カツオの一本釣りなどで栄えたが、明治末から大正期にかけて次第に衰退。漁業関係者のなかには請戸に移る者もあり、1981

(昭和56)年までに塚原の漁家は2戸を数えるのみとなった。2011年3月の津波被害はないが、避難指示解除後の現在も居住者は6割程度である。

村上 | 小高川の沖積地に水田が広がり、海辺に集落を形成する農業地域。西端を県道が南北に通る。相馬氏が小高城から移転を試みて断念した村上城跡が丸い丘上に残る。かつては半農半漁の地域で、地引網漁も行われたが、1981(昭和56)年で漁業従事者は7戸となり、近在の工場

に勤める兼業農家が増加。凝集性の強い集落は漁村の名残をよく伝えていたが、2011年3月の津波で沿岸の家々は失われた。作家の島尾敏雄が幼少期を過ごした地でもあり、短編「いなかぶり」(『近代文学』1951年)では、大正期の未整備の磯場の風景と徐々に満ちてゆく潮の激しさが島尾少年の恐怖感とともに綴られるほか、わずかではあるが当時衰退を見せていたイワシの地引網漁にもふれられている。

浦尻 | 縄文時代に形成された浦尻貝塚

浦尻 Urajiri



©Google Earth

明治初期の地形図／戦後の空中写真

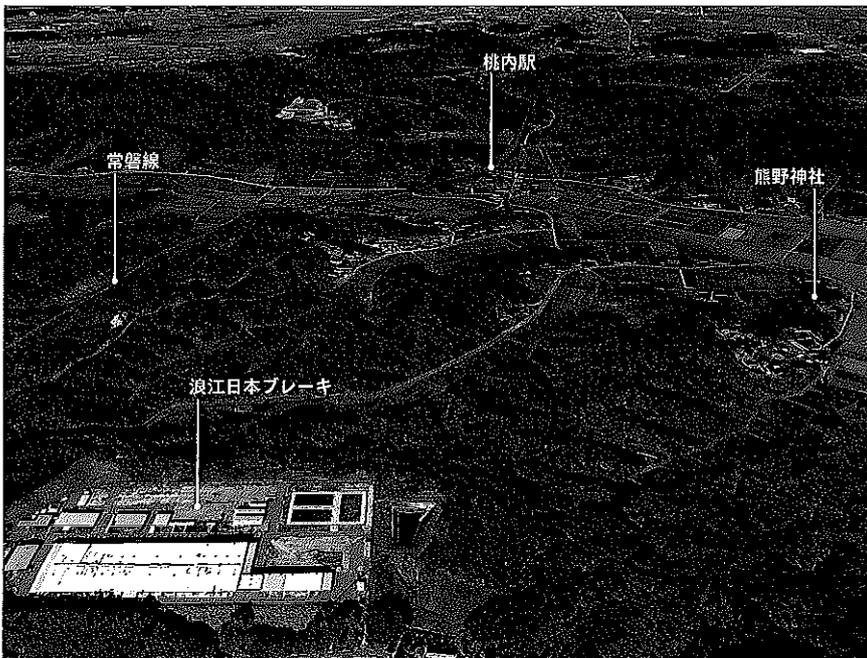


「井田川浦」1908年測図・1910.7.30発行



1974-78年 国土地理院

上浦 Kamiura



©Google Earth

明治初期の地形図／戦後の空中写真



「井田川浦」1908年測図・1910.7.30発行



1974-78年 国土地理院

は、当時の周辺集落の中核的な存在であったと考えられている。貝塚周辺の沖積地は主に水田として、段丘面は桑畑や植林地、果樹林として利用された。1908(明治41)年の地図中央にみられる井田川浦では昭和初期までウナギ、フナ、シジミなどの小規模漁業が営まれていた。井田川浦の干拓は区内の大事業であり、相馬郡石神村の太田秋之助らが1919(大正8)年に立案、10年後の春に排水開田に成功した。造成したばかりの耕地は塩分が非常に高く稲の成育が悪かったが、その後

1975(昭和50)年には1.78km²の水田が広がりが毎年多くの収穫を挙げた。かつて井田川浦を形成していた海岸線沿いの浜堤には、イワシの地引網漁が行われていた漁村の風景を伝える家並みがあったが、6年前の津波で失われている。

上浦 | 小高区の南端に位置し、丘陵地を隔てて相馬郡浪江町に接する。西部をJR常磐線、常磐線の東側を県道が南北に走り、東部を国道6号線が走る。丘陵の斜面には桑などの畑地をつくり、北端を東

に流れて井田川浦に注ぐ宮田川の沖積地には水田と集落を形成する農業地域である。谷戸地形を切り開いてつくられた集落は浜通り内陸部に多く見られるが、ここ上浦もその典型例であろう。古くから残る民家、納屋や農家の屋敷配置が現在もしばしば見受けられる。

字宮田の低丘斜面には、近隣地方で最も古い縄文前期初頭の宮田北・宮田東貝塚がある。

NAMIE TOWN / Landscape

浪江町



浪江町

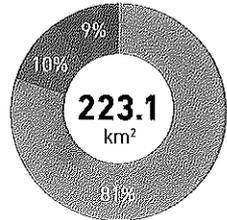
NAMIE TOWN

-  町章
-  町の花:コスモス
-  町の島:かもめ
-  町の木:松

浪江町は、双葉郡に属し、浜通りに位置する。福島第一原子力発電所の事故により、全域が避難指示区域に指定され、全住民が町外へ避難している。事故直後に避難した二本松市を中心に、福島市、二本松市、本宮市などに応急仮設住宅と共に住民利用施設が整備されている。また主に南相馬市、いわき市、二本松市

において復興公営住宅の整備が進められており、順次入居が開始されている。また、浪江町復興計画では2017年3月に避難指示解除準備区域、居住制限区域の避難指示解除を予定している。町内には役場機能のほか、一時帰町時に利用できる仮設診療所、複数の事業所がすでに開設されている。

面積



-  帰還困難区域
-  居住制限区域
-  避難指示解除準備区域
-  避難指示区域外

人口[*B] | 単位:人(2016/04/30)

18,615

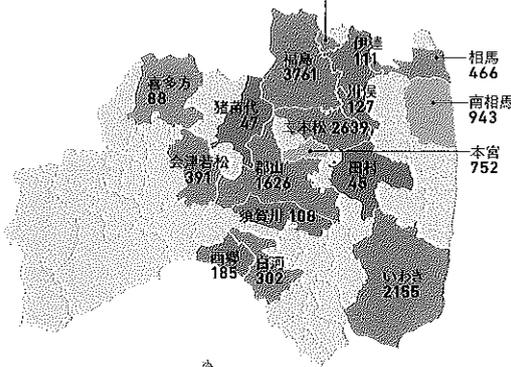
高齢化率[*A]:
31.2%(2015/09)
震災前人口[*A]:
20,858人(2011/02)

避難者数[*B] | 単位:人(2016/04/30)

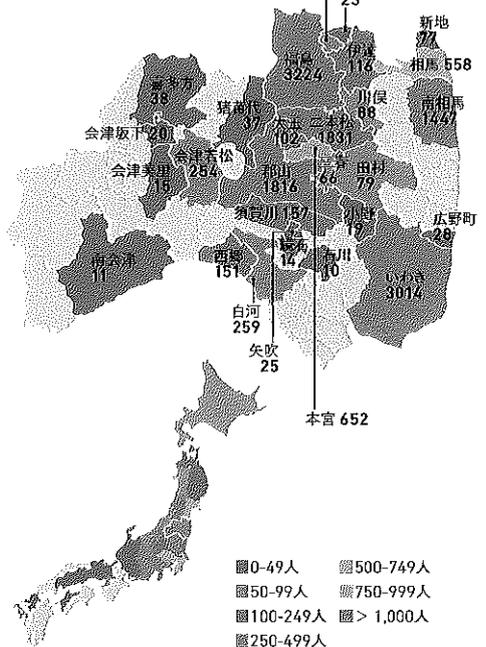
20,867

人口の移動[*B]

2012/10



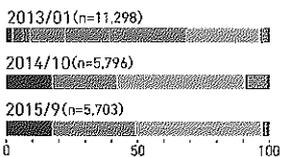
2016/04



-  0-49人
-  50-99人
-  100-249人
-  250-499人
-  500-749人
-  750-999人
-  1,000人

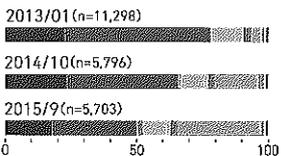
住民の居住に関する意向[*F,G,H]

帰還意識



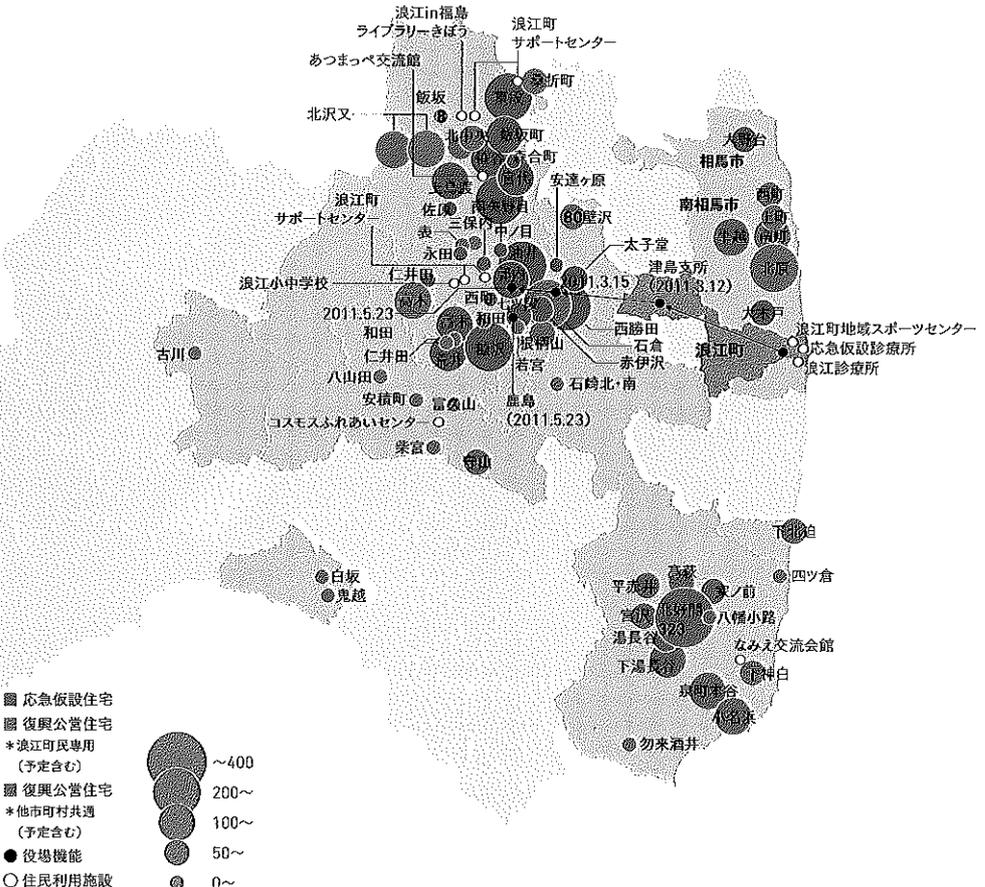
-  戻りたい(解除後すぐに戻りたい)
-  条件が整えば戻りたい
-  自宅に帰れるのであれば解除後すぐに戻りたい
-  自宅に帰れるのであれば条件が整えば戻りたい
-  戻らない
-  無回答

居住形態

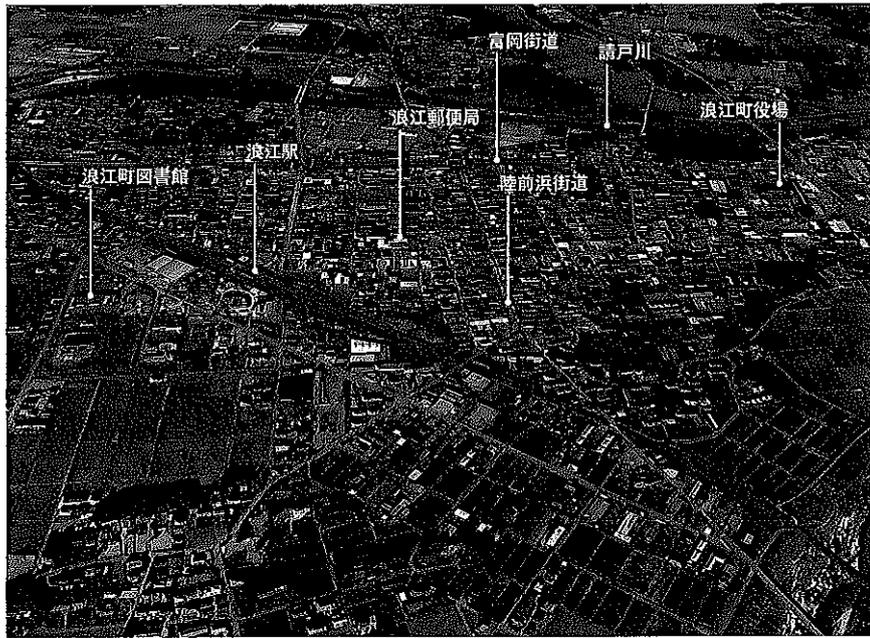


-  応急仮設住宅
-  借上げ仮設住宅
-  公営住宅
-  民間賃貸住宅
-  給与住宅
-  実家・親戚・知人宅
-  持家
-  その他
-  無回答

生活拠点の分布[*I,J]



-  応急仮設住宅
-  復興公営住宅 *浪江町民専用(予定含む)
-  復興公営住宅 *他市町村共通(予定含む)
-  役場機能
-  住民利用施設



©Google Earth

明治初期の地形図／戦後の空中写真



「浪江」1908年測図・1911.4.30発行



1974-78年 国土地理院

請戸 Ukedo



©Google Earth

明治初期の地形図／戦後の空中写真



「井田川浦」1908年測図・1910.7.30発行



1974-78年 国土地理院

1956(昭和31)年、浪江町と荻野・大堀・津島の3ヵ村が合併して、現在の浪江町となった。人口は1975(昭和50)年時点で21,527人、震災直前は21,434人とほぼ同じだが、その間には70年代の企業進出にともなう人口増加と90年代の減少がある。双葉郡北端に位置し、阿武隈山地中央から太平洋岸に至る平野部の多い町である。70年代には隣町大熊・双葉に、東電第1原発1〜3号機の運転開始に続き4〜5号機も建設され、町内にも関連企業などが進出したため事務所・住宅が増えている。

権現堂 | 町の東部に位置し、沖積平野の中心に商店・官公庁・駅舎が立ち並ぶ、町の中心街である。この地区は、江戸時代に「高野宿」と呼ばれ、当時は東西に長い町並みであったが、幕末の大火災によりほぼ全焼。翌年、向きを南北に変えた新町通りが建設された。この頃から、火災を二度と出さないことを祈願して「浪江」という名称が定着していったといわれる。のちに国鉄常磐線が通ると、浪江駅と高野宿をつなぐように市街が形成されていった。町役場の所在地でもあり、毎年十日

市祭りや裸祭りが行われる。

請戸 | 県内浜通りに3つある漁港のひとつ請戸漁港を擁する。請戸川の南は水田地帯で、河口付近の請戸港から海岸に沿って南に伸びる半農半漁の集落があったが、2011年3月の津波で失われた。請戸港は中世以降、漁港ならびに諸物資の移出入港として発達し、1975(昭和50)年には水揚総額3億円を誇った。漁港から南に広がる請戸海水浴場は夏には海水浴とサーフィンで賑わう。

FUTABA TOWN / Landscape

双葉町



双葉町

FUTABA TOWN



町章



町の花: さくら



町の鳥: きじ

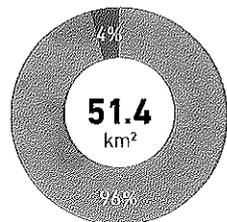


町の木: せんたん

双葉町は、双葉郡に属し、浜通りの中央に位置する。福島第一原子力発電所が立地しており、事故により全町域が避難指示区域に指定された。帰還困難区域が町の9割を占めており、避難指示解除の時期は2017年2月時点では示されていない。事故後、役場は埼玉県の加須市に移転したが、2014年にいわき市に再度移転し、同時に公立幼稚園・小中学校もいわき市

内で再開された。その他の地域では、郡山市、福島市等に応急仮設住宅が整備され、復興公営住宅への入居も開始されている。町内では、2015年に避難指示準備区域に再編された大字両竹、大字中浜を復興産業拠点として整備していく計画となっている。また、町内への中間貯蔵施設の建設受け入れが決定している。

面積



- 帰還困難区域
- 居住制限区域
- 避難指示解除準備区域
- 避難指示区域外

人口[*B] | 単位: 人(2016/05/01)

6,205

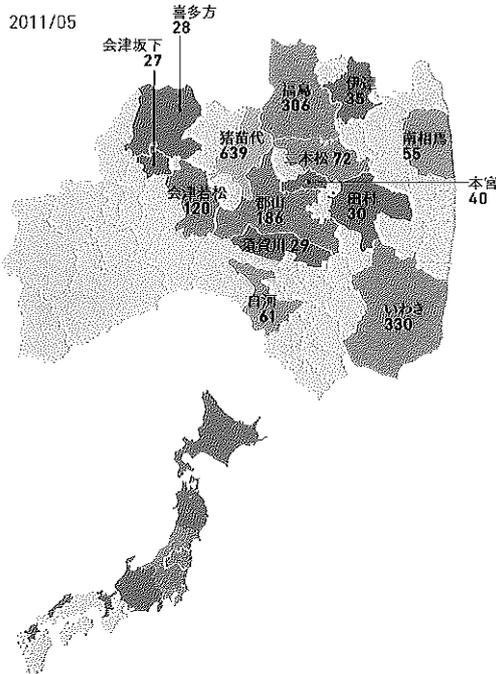
高齢化率[*A]:
31.4%(2015/09)
震災前人口[*B]:
7,122人(2011/03)

避難者数[*B] | 単位: 人(2016/05/01)

6,968

人口の移動[*B]

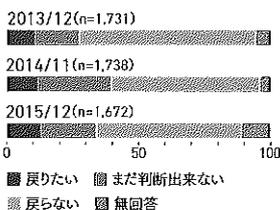
2011/05



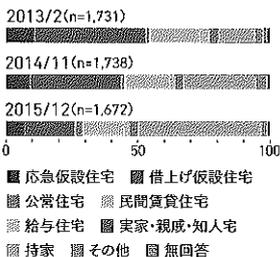
- 0-49人
- 50-99人
- 100-249人
- 250-499人
- 500-749人
- 750-999人
- > 1,000人

住民の居住に関する意向 [*F,G,H]

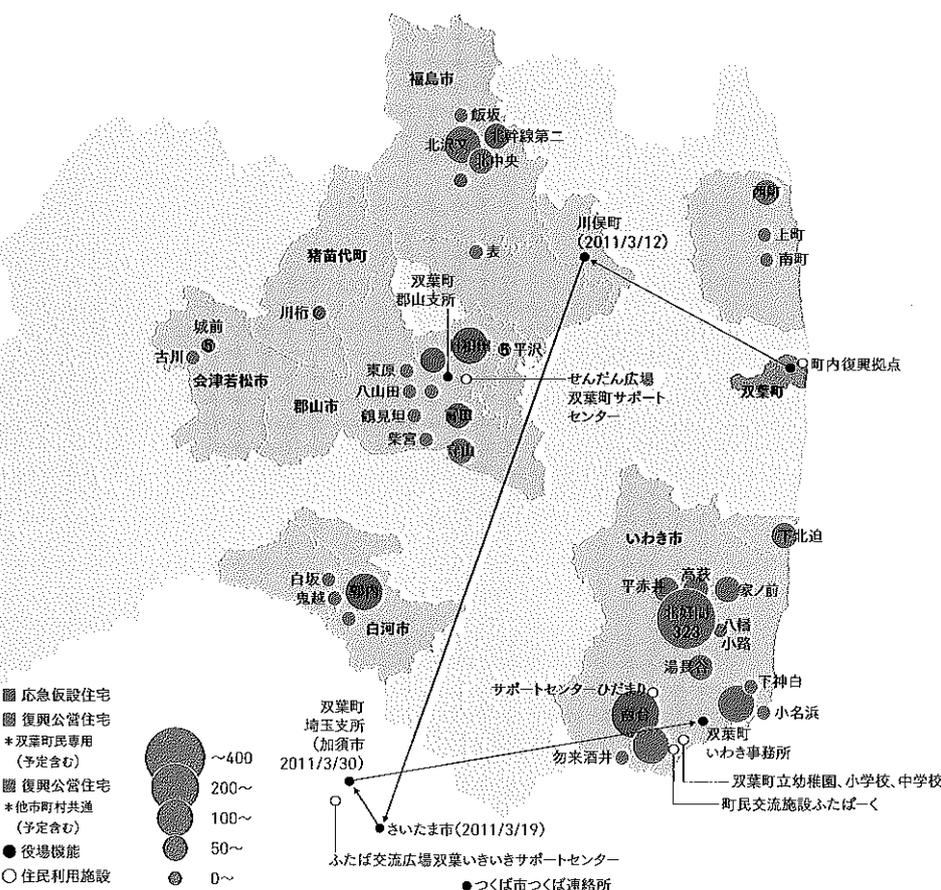
帰還意識



居住形態



生活拠点の分布 [*I,J,K]



- 応急仮設住宅
- 復興公営住宅 * 双葉町民専用 (予定含む)
- 復興公営住宅 * 他市町村共通 (予定含む)
- 夜場機能
- 住民利用施設



● つくば市つくば連絡所



©Google Earth

明治初期の地形図／戦後の空中写真



〔富岡〕1908年測図・1910.12.15発行



1974-78年 国土地理院

鴻草 Kounokusa

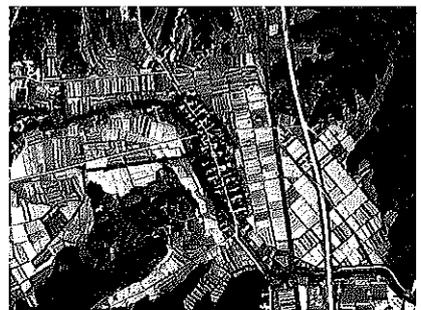


©Google Earth

明治初期の地形図／戦後の空中写真



〔富岡〕1908年測図・1910.12.15発行



1974-78年 国土地理院

1951(昭和26)年に新山町・長塚村が合併して標葉町となり、1956(昭和31)年に双葉町と改称した。1975(昭和50)年の人口は7,602人であり、2010(平成22)年は6,932人である。町名の「双葉」は、1896(明治29)年に旧標葉郡・檜葉郡が合併して成立した双葉郡の名から来ている。

県東部に位置し、東側は太平洋に面する。西側は阿武隈山地東部にあたり、西部は畑作地帯、東部は水田地帯が多い。1975(昭和50)年には沿岸部の細谷において、東電第1原発の操業が開始された。

長塚 | 町の東部に位置し、旧国道6号沿から周辺へと町の中心市街地が形成されており、商店街や郵便局・図書館などの公共施設や企業立地とともに宅地開発も進んできた。JR常磐線の双葉駅は中心市街地の西側にあり、国道6号線はその東側を通る。1910(明治43)年の地図に、浜街道(旧国道6号)沿いの市街地がみえる。また1970年代の航空写真には、新しい国道6号と、1970(昭和45)年に拡張整備が完了した駅前通り(駅前～久保前)がみえる。

鴻草 | 町の北東端にある。良田の多い農業地域で、空中写真には浜街道(旧国道)に沿って家屋が密集する街村状の集落と、台地の裾に寄り付くような家々がみえる。また、街道沿いの集落の東側をJR常磐線と国道6号が南北に縦断している。

地図の左下に見える台地には、平安時代866(貞観8)年の太政官符に見える鹿島神宮の苗裔神社である、鹿島神社がある。

OKUMA TOWN / Landscape

大熊町



大熊町

OKUMA TOWN



町の花: なし

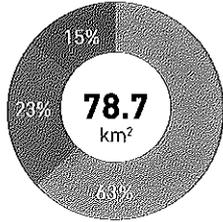
町の鳥: とび

町の木: もみ

大熊町は、双葉郡に属し、浜通り中央部に位置する。1971年に町内に福島第一原子力発電所が開所し、多くの町民が関連事業に従事していた。福島第一原子力発電所の事故により町の全域が避難指示区域に指定された。町の住民の約96%が居住していたエリアは、現在も帰還困難区域となっている。行政機能については、

事故直後は田村市、その後会津若松市へと移転している。その後はいわき市や郡山市にも仮設住宅、復興公営住宅、役場機能が整備され、いわき市への避難者が特に増加している。町内の計画については、「大熊町復興まちづくりビジョン」で、放射線量が比較的低い大川原地区を最初の復興フィールドにすることとしている。

面積



- 帰還困難区域
- 居住制限区域
- 避難指示解除準備区域
- 避難指示区域外

人口[*B] | 単位: 人(2016/04/30)

10,704

高齢化率[*A]:

24.9%(2015/09)

震災前人口[*A]:

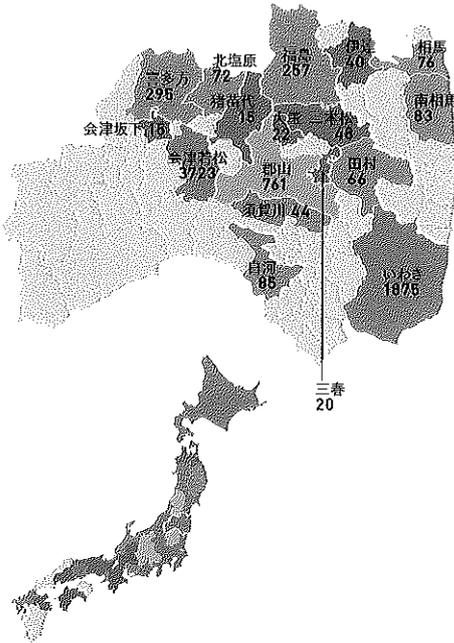
11,505人(2011/03)

避難者数[*B] | 単位: 人(2016/04/30)

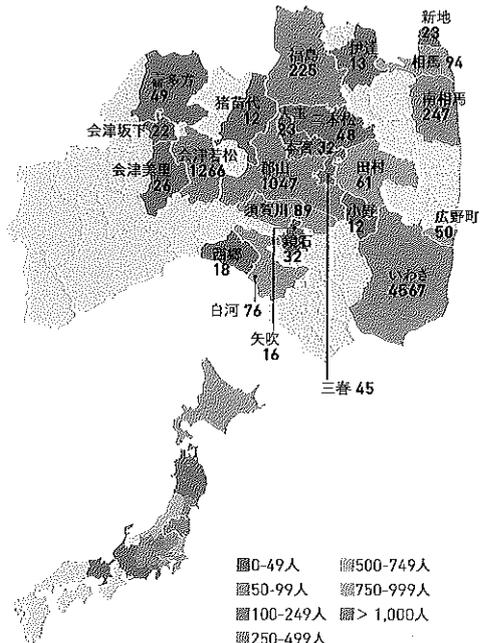
10,701

人口の移動 [*B]

2011/09



2016/05

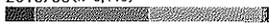


- 0-49人
- 50-99人
- 100-249人
- 250-499人
- 500-749人
- 750-999人
- > 1,000人

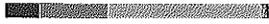
住民の居住に関する意向 [*E,F,I]

帰還意識

2013/03(n=3,445)



2014/11(n=2,825)



2015/8(n=2,667)



- 戻りたい
- まだ判断出来ない
- 戻らない
- 無回答

居住形態

2013/03(n=3,445)



2014/11(n=2,825)

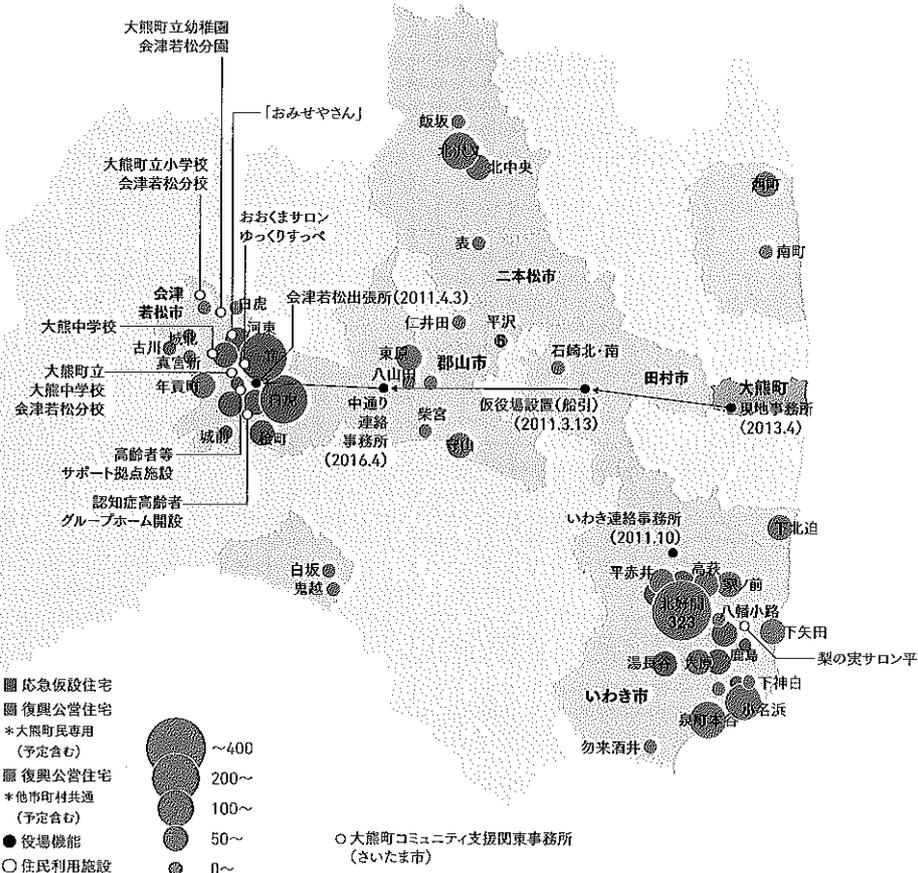


2015/8(n=2,667)



- 応急仮設住宅
- 借上げ仮設住宅
- 公営住宅
- 民間賃貸住宅
- 給与住宅
- 実家・親戚・知人宅
- 持家
- その他
- 無回答

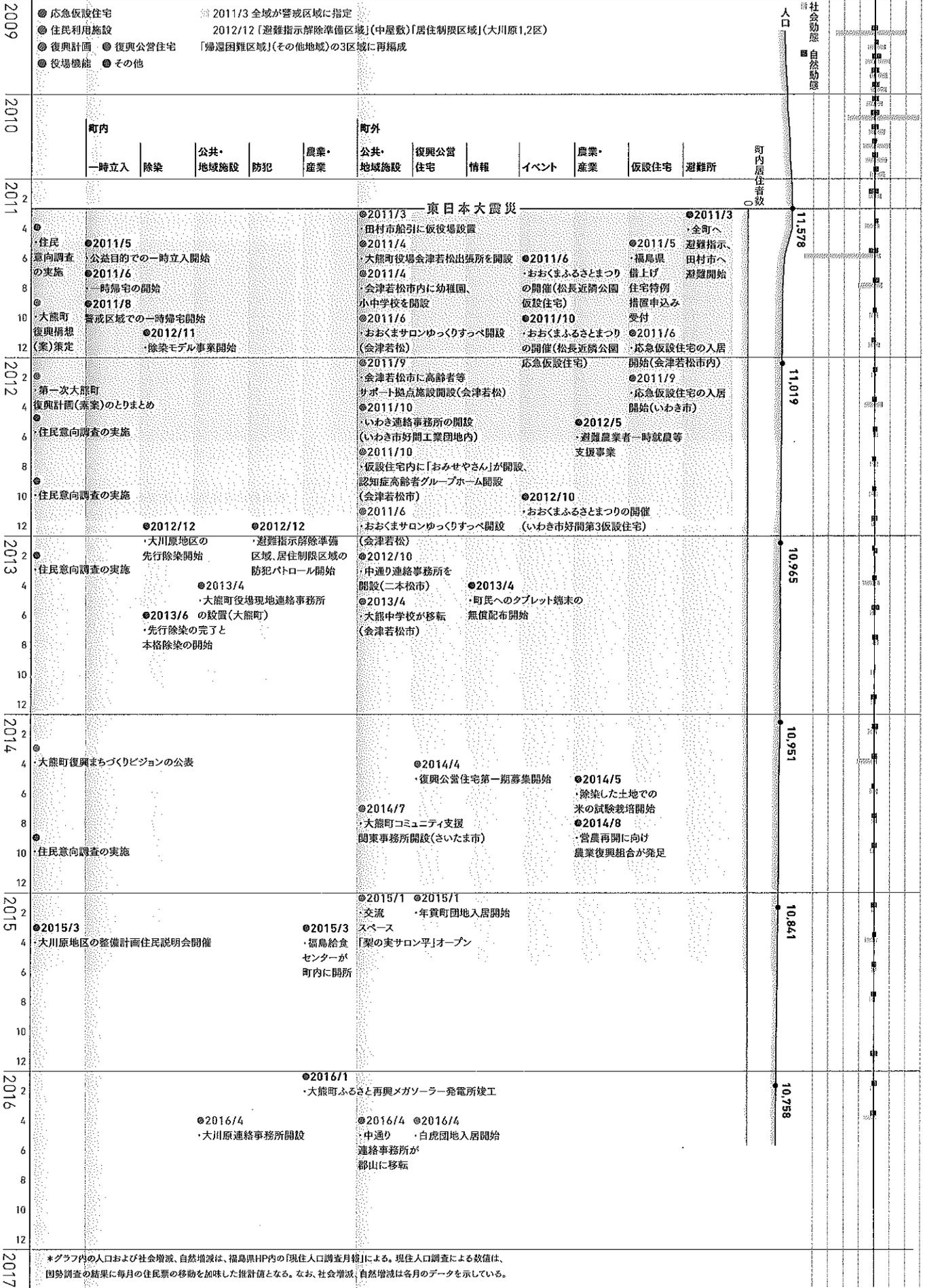
生活拠点の分布 [*G,H]



- 応急仮設住宅
- 復興公営住宅
- 復興公営住宅 *大熊町民専用 (予定含む)
- 復興公営住宅 *他市町村共通 (予定含む)
- 役場機能
- 住民利用施設

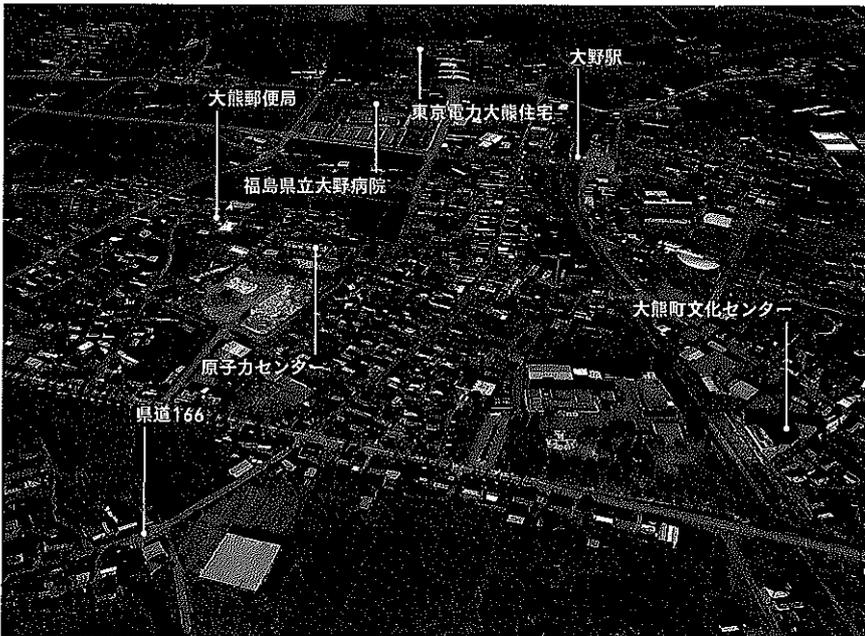
○ 大熊町コミュニティ支援関東事務所 (さいたま市)

人口の変遷と復興経緯 [A,C]



参考資料: *A 福島県HP(<http://www.pref.fukushima.lg.jp>) | *B 大熊町HP(<http://www.town.okuma.fukushima.jp/>) | *C 大熊町役場総務課「広報おおくま」(2011.6-2016.6) | *D 大熊町「大熊町第二次復興計画(中間報告)」(2014.12) | *E 復興庁、福島県、大熊町「大熊町住民意向調査 調査結果(速報版)」(2014.11) | *F 復興庁、福島県、大熊町「大熊町住民意向調査 調査結果(速報版)」(2013.3) | *G 特定非営利活動法人循環型社会推進センター「福島県復興公営入居募集案内」 | *H 福島県「復興公営住宅入居対象市町村ごとの工程表」 | *I 復興庁、福島県、大熊町「大熊町住民意向調査 調査結果 報告書」(2016.3)

下野上 Shimonogami



©Google Earth

明治初期の地形図／戦後の空中写真

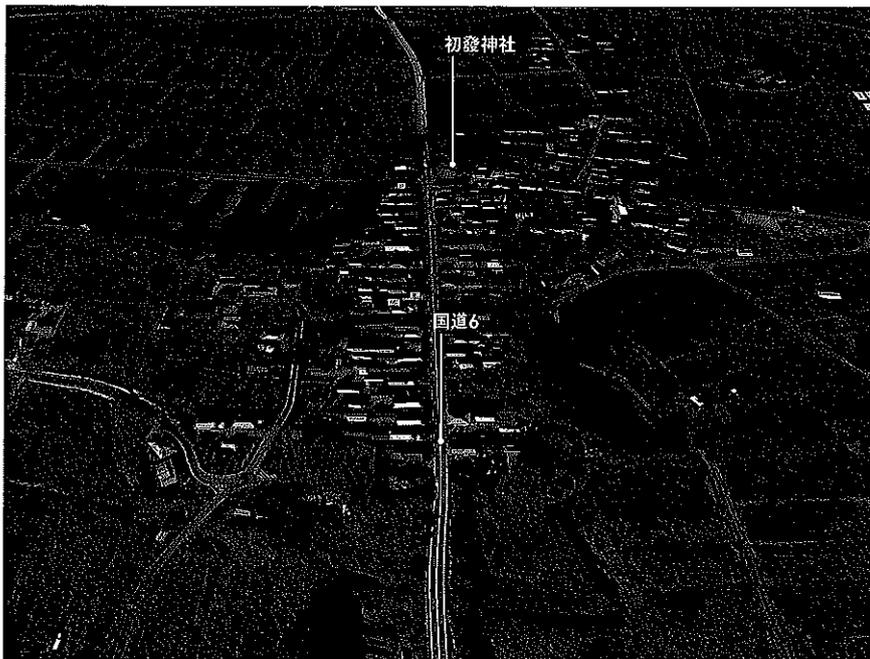


『浪江』1908年測図・1911.4.30発行



1974-78年 国土地理院

熊 Kuma



©Google Earth

明治初期の地形図／戦後の空中写真



『富岡』1908年測図・1910.12.15発行



1974-78年 国土地理院

双葉郡のほぼ中央に位置し、南は富岡町、西は田村郡都路村に接する。1954(昭和29)年に大野・熊町の2ヵ村が合併してできた町で、「大熊」の地名は2つの旧村名の合成である。地形は東西に長く、半分は山地で国有林が多い。東部の比較的平坦な土地を国道6号線とJR常磐線が南北に走る。明治40年代の産業は、農業・養蚕・畜産・林産・水産の順で農業が中心。1921(大正10)年頃から大川原などの原野に果樹栽培が始まり、今日の興隆をみるに至った。1966(昭和41)年から建設工事がはじ

まった福島第一原発の影響で村民の平均所得が増加。1981(昭和56)年時点で福島県第1位を示している。人口は、1975(昭和50)年で8,190人、1985(昭和60)年で9,988人、2010(平成20)年で11,511人と右肩上がりに上昇している。

下野上 | 町の中央部。JR常磐線が南北に走り大野駅がある。1904(明治37)年の大野駅開設以来、駅前には市街地化し、大野郵便局などの施設ができた。駅近くに広がる平地には文化センターや双葉農業

高校、県立原子力センターなどがあり、町の行政・経済の中心地となっている。

熊 | 中央部を熊川が東流し、小高い台地上に宿場同様の街村的な家並みがみられる。集落を貫く浜街道が拡幅されて今日まで国道として引き継がれている例は他にはあまりない。1910(明治43)年の地図をみると、街道は集落の両端で折れていたことがわかる。北端にみえる初發神社は現在もこの場所に立地する。ここは旧相馬藩の南境で、「堺目付検断」が置かれていた。

小高駅前に広がるコーヒーの輪

小高駅前の一角に改造したワゴン車の店舗でOMSB(オムスピ)カフェが休日に開店している。このカフェのマスターを務めるのは花岡高行さん。神奈川県出身、東京都杉並区育ち。杉並区と南相馬市の災害時の相互援助の協定で同市への派遣職員として2014年度より南相馬市に在住・勤務している。

コーヒースタンド開店のきっかけになったのは小高区で毎年恒例のイベント「小高ハッカソン」。このイベントを通じて、企画に賛同する、同年代の地元で活躍する仲間と出会い、花岡さんを代表とする団体「OMSB手作り委員会」を結成した。営業開始は2016年12月17日。1日50～60杯のオーダーがある。「いつか喫茶店をやれたらいいなと思っていた」と語ってくれた。

コーヒー豆は熟成豆を使用。このチョイスに根っからのコーヒー好きな花岡さんのこだわりが窺える。ワゴンのトランク部分には本棚が設えられていたり、店の前には手づくりの木製ベンチが置かれたり、ポータブルスピーカーで音楽を流したりと、コーヒー一杯で楽しめる工夫が目目を引く。花岡さんたちの気さくな人柄が震災後まばらになった街角に、気軽に集まれる交流の場をつくり出している。

人が集まり、話の絶えない名物食堂

双葉食堂を切り盛りするのは豊田英子さん。双葉食堂は豊田さんの義母・豊田イク子さんが1951年に創業したお店である。避難時は鹿島区の仮設商店街で4年半営業していた。

小高区の避難指示解除後はすぐに震災前と同じ場所に戻ってきて営業再開のため壁紙を張り替えるなど準備を始めた。家族ですごした地へ帰りたいという意識は強く「帰ろうかどうかと迷うことはなかった」という。義母から夫へ、そして今は英子さんが食堂への思いをしっかりと引き継いでいる。店内が満席になったときは茶の間空間も使って対応する。お

客さんでいっぱいになると「玄関から入って茶の間の方にまわって!」という英子さんの元気な声が響いてくる。お客さんは自宅用玄関を通り豊田さんの自宅である茶の間でラーメンを食べるのだ。

定番のメニューは義母の代からラーメン。人気店の理由は「ここに来れば、人に会える、地元の話でおしゃべりできることじゃないか」という。50年以上続く食堂であり、変わらないメニューと創業の地に対するこだわりが感じられる。英子さんたちの活気やお客さんとの会話がつくる、誰とも気軽にしゃべりできる雰囲気、多くの人が訪れる。

こだわりの食器と過ごすひととき

葛尾村でCafe嵐が丘を営むのは堀江安則さんとみどりさん。安則さんは東京出身、みどりさんは北海道出身だ。ふたりはもともと神奈川県厚木市で暮らしていた。2011年に退職し、ひと足早くみどりさ



お客さんと談笑するマスターの花岡さん。お店を訪れるのは地域の住民や、仙台、東京などから散策に来た人。



コーヒーは手挽きのミルで淹れる方式。注文が入ってから豆を挽くので香り高い一杯を飲むことができる。



本日のおすすめBooks。「15分あれば喫茶店に入りなさい」ということでコーヒー飲んでって!と店長からのコメント入り。

んが開店準備を行っていた矢先に震災に遭遇。玄関タイルや壁紙、食器が被害にあった。その後、仮設住宅で5年ほど暮らしていた。葛尾村役場が2016年4月1日に村内へ戻ったときに合わせてオープン。自宅兼店舗のお店は、1階が店舗、2階が住宅となっており大きな吹き抜けで1階と2階がつながっている。

店舗のある上ノ川地区には2軒ほど戻ってきていて、週の半分を村で暮らしている人もいます。「若い人が葛尾村で頑張っている姿も見ています。今後も盛り上げ役の一助になればと思う」と地域への思いを語ってくれた。

客層は村外の方が6、7割程度であり、残りの3割が村民だという。リピーターもいて、1時間ほど滞在する方が多く、ランチタイムは満席になることも多い。ふたりが集めたこだわりの食器とともにみどりさんの食事を楽しむことができる。



豊田英子さん(中央)と従業員のみなさん。仮設時代の従業員は6名。このうち現在のお店では3名が働いている。



双葉食堂自慢の醤油ベースのラーメン。最も定番(人気のメニュー)である。



Cafe嵐が丘を営む堀江みどりさん(左)と安則さん。棚の食器はどれもこだわりの一品。



本を借りに、子どもたちも集まってくる。



ショッピングセンターTom-とむ跡地での販売の様子。



出張の様子。バスの横に机とコンテナを広げ閲覧スペースをつくらせている。中央で話すのが司書の高橋将人さん。

変わる、行政の役割

平成27年より南相馬市が運営するバス型移動図書館のスローガンは、「立ち読み お茶のみ おたのしみ」。中央図書館から約1500冊の本を積んで計22ヵ所を巡回している。1日3〜4ヵ所、行き先は市内の幼稚園・保育園・高齢者施設・災害公営住宅など。巡回スケジュールを南相馬市ホームページで公開しており、巡回時に次回に借りたい本の予約をすることも可能だ。

「行き先のリクエストに応じながら本棚をカスタマイズします」。そう語るのは担当司書の高橋将人さん。運営当初は、先に移動図書館をはじめていたNPO法人シャンティ国際ボランティア会から車両の寄贈を受け、ノウハウを構築した。震災直後はとくに、知りたい情報がなかなか届かないところへ本だけではなく行政のお知らせなども届けた。高橋さんいわく、スタッフ同士が情報共有し地域の様子を把握することで、本の貸し出し以上の関わりを心掛けているそうだ。移動図書館を通して行政のあり方も模索されている。

帰還への第一歩

移動販売「イトーヨーカドーあんしんお届け便」は、富岡町の一時帰宅開始と同時に昨年9月から運営が始まった。今年3月、国道6号沿いの複合商業施設「さくらモールとみおか」に、同じセブン&アイグループ

のヨークベニマルが開店したため、既に富岡町内の移動販売は終了しているが、当時町内に生鮮食料品を扱う店舗がなかったことから、短い期間でも週2回の訪問に多くの人が集まった。

「生鮮食料品を多く扱いながら、さらにメニューに飽きないよう惣菜の種類などを毎回入れ替えて届けていました」と話すのはイトーヨーカドー平店副店長の荒尾哲郎さん。富岡町民の他にも作業員の方が弁当を買っていくことも多かったそうだ。

また、同店周辺では一環として、ネットで商品を頼むと自宅まで届くイトーヨーカドーネットスーパーのサービスも運営中である。

仮設店舗から、ふるさとの村へ

約50年前、葛尾村の中央に開店した石井食堂。最初はラーメン屋としてスタートした。震災後は三春町の仮設店舗で経営していたが、昨年6月から「かつらお帰村応援宅配サービス」を開始した。同年4

月、村の商工会が音頭を取り、地域経済産業活性化対策費補助事業（経済産業省）の補助を受けて始めたものである。地元の運送会社マルニと連携し、三春町仮設団地内の店舗と村内にいる人とを結ぶサービスという枠組み。毎週月・水・金曜に運営し、注文は当日の午前9時まで受け付けている。

三春町の仮設団地で生活する3代目の石井秀昭さんは今年6月の帰還の準備に忙しい。しかしそれでも、片道30、40分ほどかけて三春町の仮設店舗から、村内の顔見知りのお客さんや作業員の方々に食事を届け続けている。さらには頼まれていない惣菜なども見繕って車に乗せることもある。また今年1月からは村の支援を受け、販売促進策としてスタンプ事業も開始したそうだ。

そして今後の村にこそ色々な店の存在は不可欠。「おじいちゃんおばあちゃん、村に店がないと生きていけないから」。



仮設店舗の石井食堂と3代目石井秀昭さん。店内には震災前から飾っていた空撮写真やサインなどが並ぶ。



ボリューム満点のカツ丼定食と野菜炒め定食。オススメは炒飯だそう。

TOMIOKA TOWN / Landscape

富岡町



富岡町

TOMIOKA TOWN



町章



町の花: つつじ



町の鳥: セキレイ

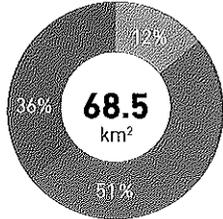


町の木: 桜

富岡町は、双葉郡に属し、福島県浜通りに位置する。町内には楡葉町とまたがって福島第二原子力発電所が立地しているが、1975年の着工以降原子力発電所の建設の従事者の増加により人口、就業構造が変化した経緯がある。町内には常磐線の富岡駅と夜の森駅の二つの鉄道駅を中心とした町の拠点が形成されており、今後の町内復興の拠点としても位置付けら

れている。福島第一原発の事故により町内全域が避難区域に指定され、事故直後は郡山市に避難を行った。現在は応急仮設住宅および復興公営住宅が多く整備され、町外の拠点である郡山市といわき市への避難者が多い。帰町は2017年4月を目標としており、町内の土地利用計画の検討が進められている。

面積



- 帰還困難区域
- 帰還制限区域
- 避難指示解除準備区域
- 避難指示区域外

人口【'B】| 単位:人(2016/03/01)

13,795

高齢化率【'A1】:
25.5%(2015/09)

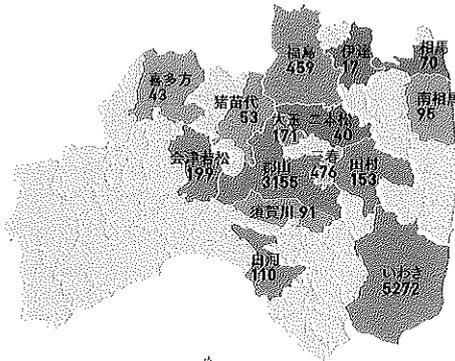
震災前人口【'A】:
15,964人(2011/02)

避難者数【'B】| 単位:人(2016/05/01)

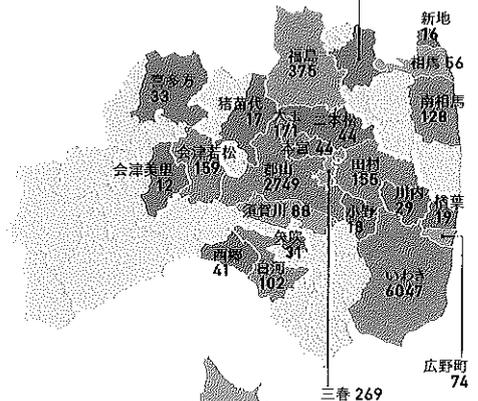
15,109

人口の移動【'B】

2012/09



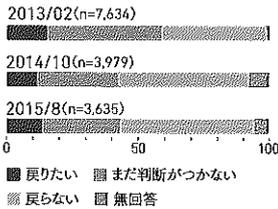
2016/05



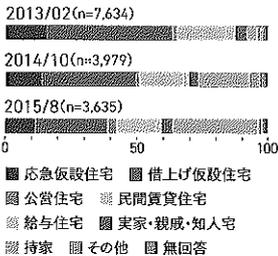
- 0-49人
- 50-49人
- 100-249人
- 250-499人
- 500-749人
- 750-999人
- > 1,000人

住民の居住に関する意向【'E, F, G】

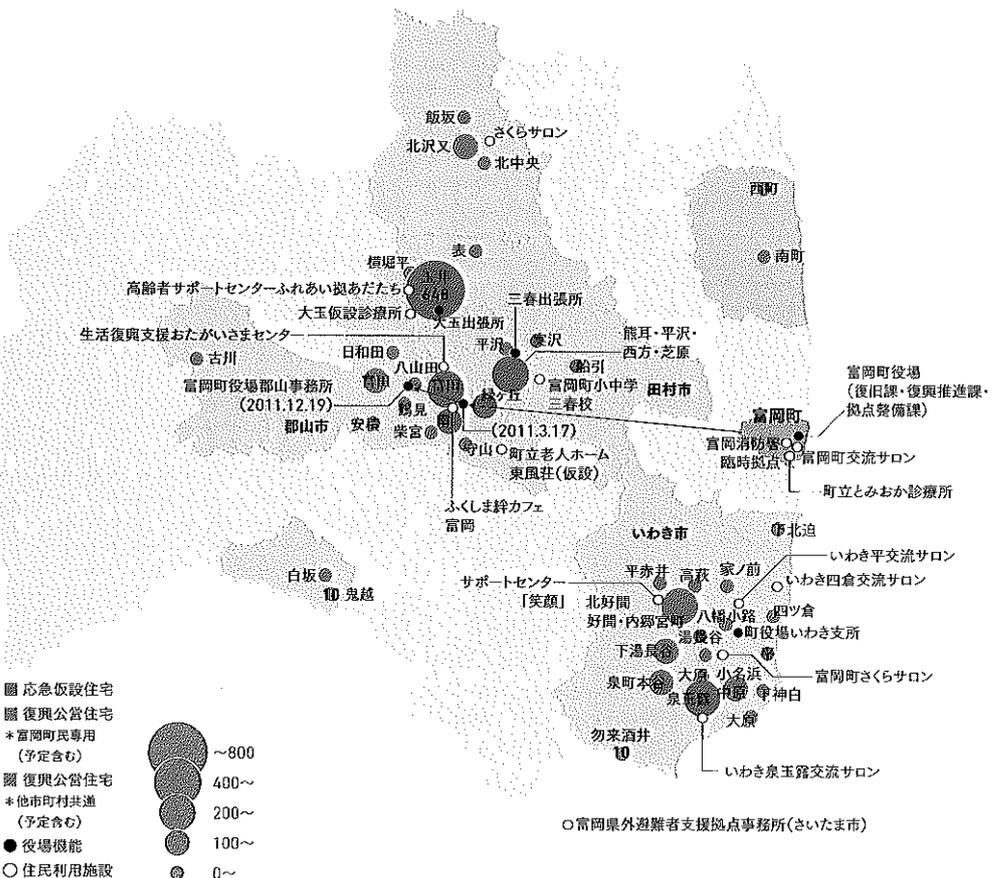
帰還意識



居住形態



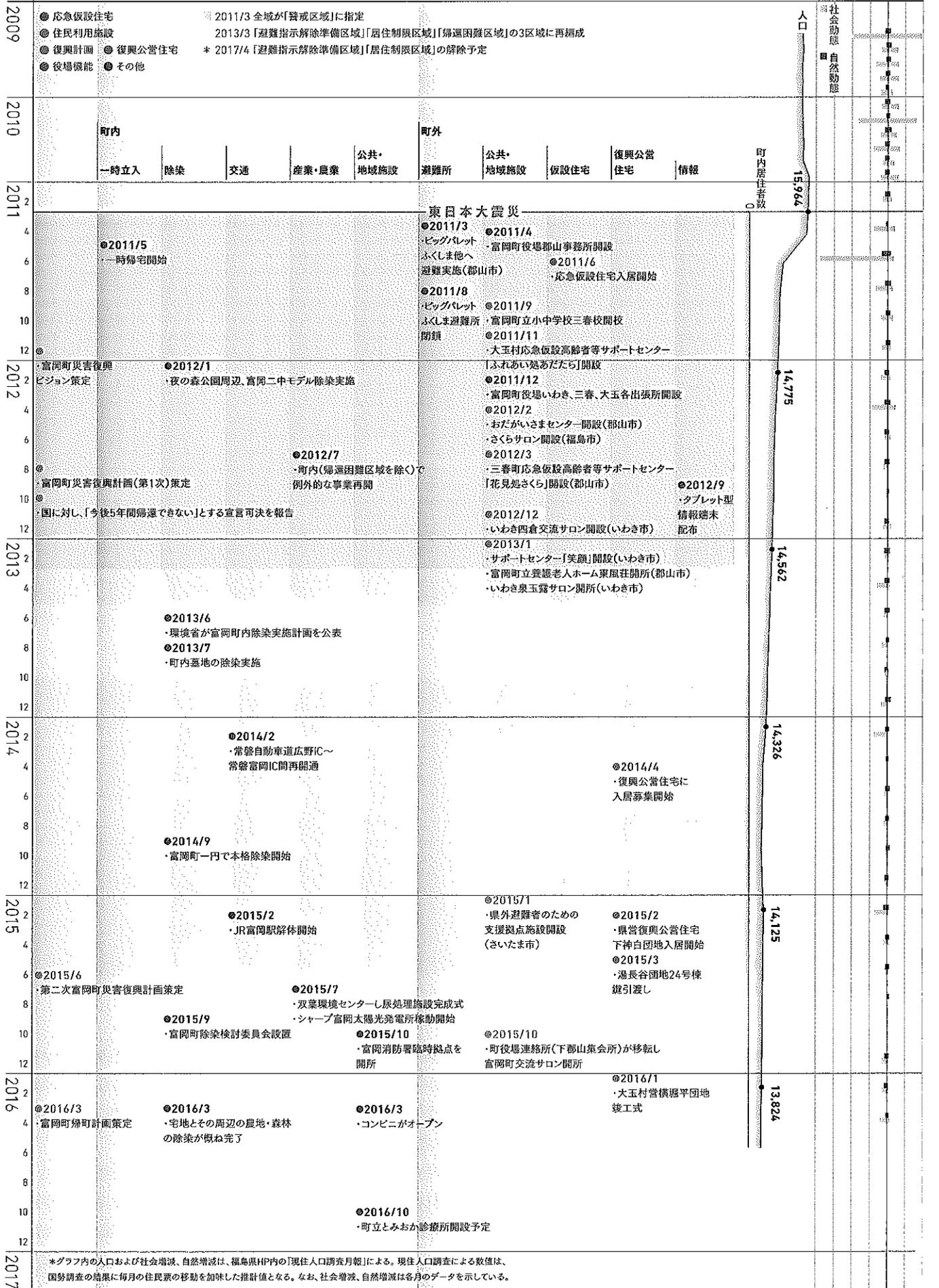
生活拠点の分布【'H, I】



- 応急仮設住宅
- 復興公営住宅
- 復興公営住宅 * 富岡町民専用 (予定含む)
- 復興公営住宅 * 他市町村共通 (予定含む)
- 役場機能
- 住民利用施設

○ 富岡県外避難者支援拠点事務所(さいたま市)

人口の変遷と復興経緯 [A, C]



参考資料: *A 福島県HP(<http://www.pref.fukushima.lg.jp/>) | *B 富岡町HP(<http://www.tomioka-town.jp/>) | *C 富岡町「広報とみおか」(2012.3-2016.6) | *D 富岡町「富岡町災害復興計画(第1次)」(2012.9) | *E 復興庁、福島県、富岡町「富岡町住民意向調査 調査結果(速報版)」(2014.10) | *F 復興庁、福島県、富岡町「富岡町住民意向調査 調査結果(速報版)」(2013.2) | *G 復興庁、福島県、富岡町「富岡町住民意向調査 調査結果(速報版)」(2015.8) | *H 特定非営利活動法人循環型社会推進センター「福島県復興公営入居募集案内」 | *I 福島県「復興公営住宅入居対象市町村ごとの工程表」



©Google Earth

明治初期の地形図／戦後の空中写真



「富岡」1908年測図・1910.12.15発行



1974-78年 国土地理院

浜通り中部、双葉郡にある町。富岡の地名は中世に遡るが、現在の富岡町は1955年（昭和30）年に旧富岡町と旧双葉町が合併したもの。人口は1975（昭和50）年に12,974人、1985（昭和60）年に15,895人と10年間で3000人の上昇をみせたが、2011（平成22）年の震災直前で15,960人とほぼ増減はない。500m以上の山岳から延びる舌状の台地が樹々の枝のように広がり、富岡町全域の約40%を占める。南北に国道6号線およびJR常磐線が走り、夜の森、富岡の2つの駅がある。明治期の産業の

中心は農業で、馬耕や養蚕を中心としていた。しかし、1920年頃から生糸・絹織業は衰退。かわって昭和初年頃には木製メートル尺・煉瓦の生産が増加した。1973（昭和48）年には東電第二原発が設けられている。国や県の出先機関も多く、浜通り中部の中心的存在といつてよい。

中央・小浜・本町 | 町の東部に位置する中心市街地。大きな舌状台地と、その北を東流する富岡川にはさまれるように中心市街地が広がり、富岡郵便局や東京電

力浜通り電力所、富岡中央会館などがある。他方、中央の南側に立ち上がる台地上には龍台寺や福島県立富岡高等学校（閉校）などがある。

JR常磐線がこの丘陵を避けて東を走るため、富岡駅は海岸近くにあり、市街地は西から東へ伸びている。東部を縦断する6号線沿いには、東京電力のPR施設であるエネルギー館がある。

桐葉町

NARAHHA TOWN / Landscape



檜葉町

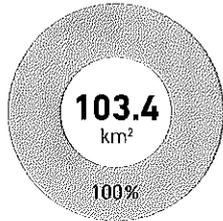
NARAHARA TOWN

-  町章
-  町の花: ヤマムロ
-  町の鳥: うぐいす
-  町の木: スギ

檜葉町は、双葉郡に属し、浜通りに位置する。町の北東部に福島第二原子力発電所が立地している。福島第一原発発電所事故により、町の約8割が避難指示準備区域に指定され、全町避難を行っていた。当初、役場は会津美里町に避難したが、その後いわき市へと移転した。2015年9月に避難指示が解除され、一部の住

民が帰還を開始している。一方で、いわき市内には現在も仮設住宅の運営が続けられている。町役場機能は町内に帰還しており、駅周辺のエリアにコンパクトタウンを整備する計画が進められている。また、いわき市で運営されていた小中学校も2017年4月に町内に帰還することが決まっている。

面積



-  避難指示区域
-  居住制限区域
-  避難指示解除準備区域
-  避難指示区域外

人口[*B] | 単位:人(2016/04/28)

7,359

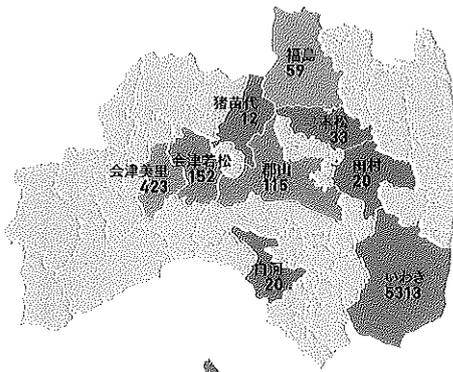
高齢化率[*A]:
30.2%(2015/09)
震災前人口[*A]:
7,678人(2011/02)

避難者数[*B] | 単位:人(2016/04/28)

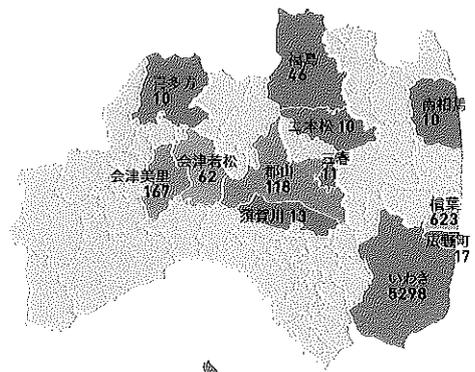
6,736

人口の移動[*B]

2012/05



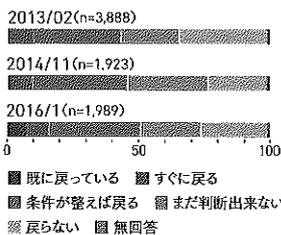
2016/04



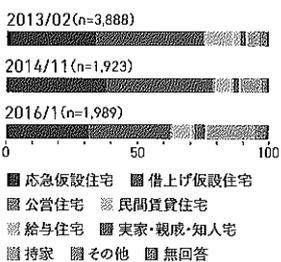
-  0-49人
-  50-99人
-  100-249人
-  250-499人
-  500-749人
-  750-999人
-  > 1,000人

住民の居住に関する意向[*E, F, G]

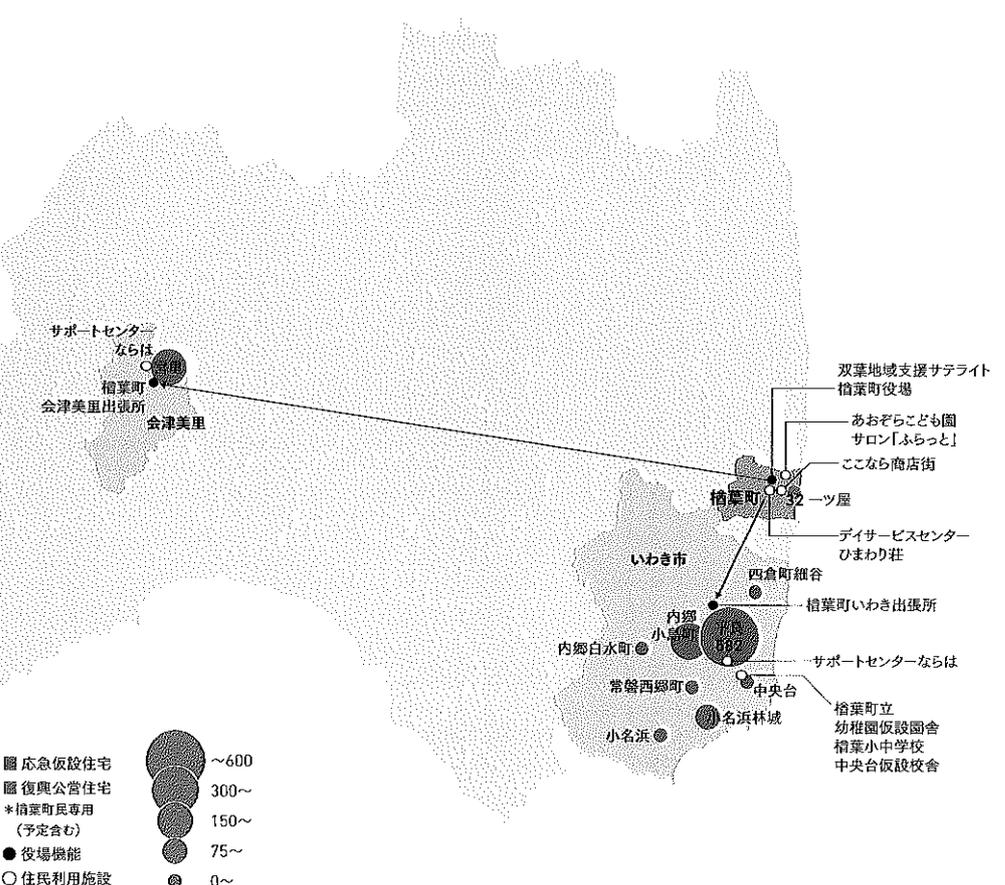
帰還意識



居住形態



生活拠点の分布[*H, I]



下小埜 Shimokobana



©Google Earth

明治初期の地形図／戦後の空中写真



「井出」1908年測図・1910.5.30発行



1974-78年 国土地理院

山田岡 Yamadaoka



©Google Earth

明治初期の地形図／戦後の空中写真



「富岡」1908年測図・1910.12.15発行



1974-78年 国土地理院

現在の檜葉町は、1956(昭和31)年に木戸村・竜田村が合併してできた。地名は旧郡名に由来。町域は東西13km、南北11kmにおよび、東部をJR常磐線と国道6号線が南北に走る。阿武隈山地に水源を発する木戸川・井出川が東流し、その流域と国道6号線に沿って水田が開けている。産業は、明治期に養蚕・生糸・産馬・和紙・林業・石炭などの産業が興隆をみせた。1955(昭和30)年以降、人口の減少に見舞われた当町は、1970(昭和45)年に過疎地域に指定された。1974(昭和49)年には東電第2原発

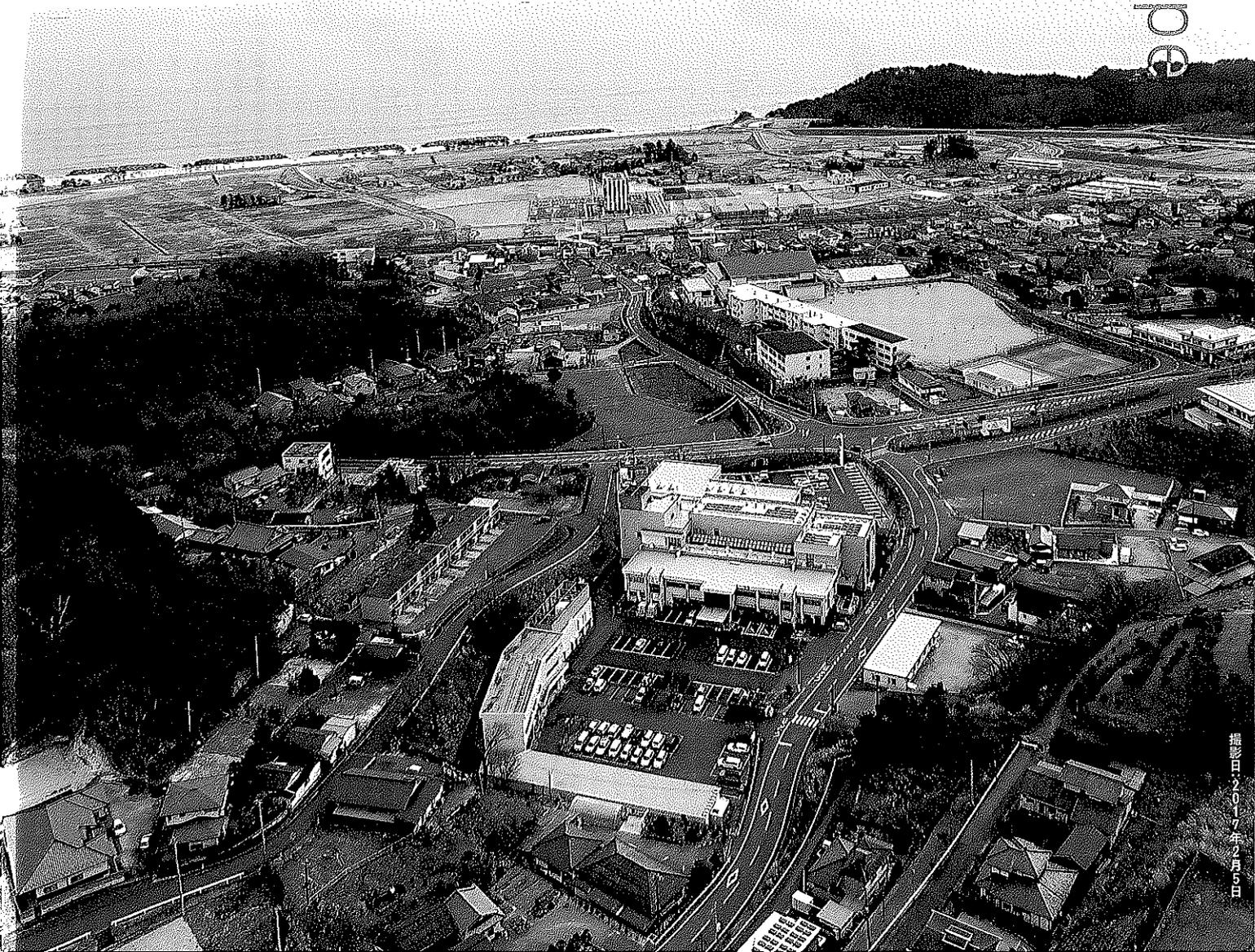
の建設とともに、地域整備が強力に推進され、施設・道路の整備が進められ、人口は1975年から一時期増加をみせる。1975(昭和50)年で7,884人、1985(昭和60)年で8,422人。しかし2010(平成22)年では7,701人と1995年頃から減少をつづけている。70年代以降の双葉地方の地域開発は急激なものであったが、檜葉もその例外ではない。中心的集落の井出(竜田駅周辺)は、もともと陸前浜街道に沿う街村であったが、役場・学校などの公共施設や運動施設や企業等が立地し、宅地化も進んでいる。

下小埜 | 町の南東部。県道沿いに発達した旧木戸村の中心地で、木戸川の河口に位置し、もとは陸前浜街道の旧宿駅であった。下町と呼ばれる市街地の中央に本陣跡があって宿場町の名残りをとどめ、木戸村役場跡・木戸郵便局などがある。

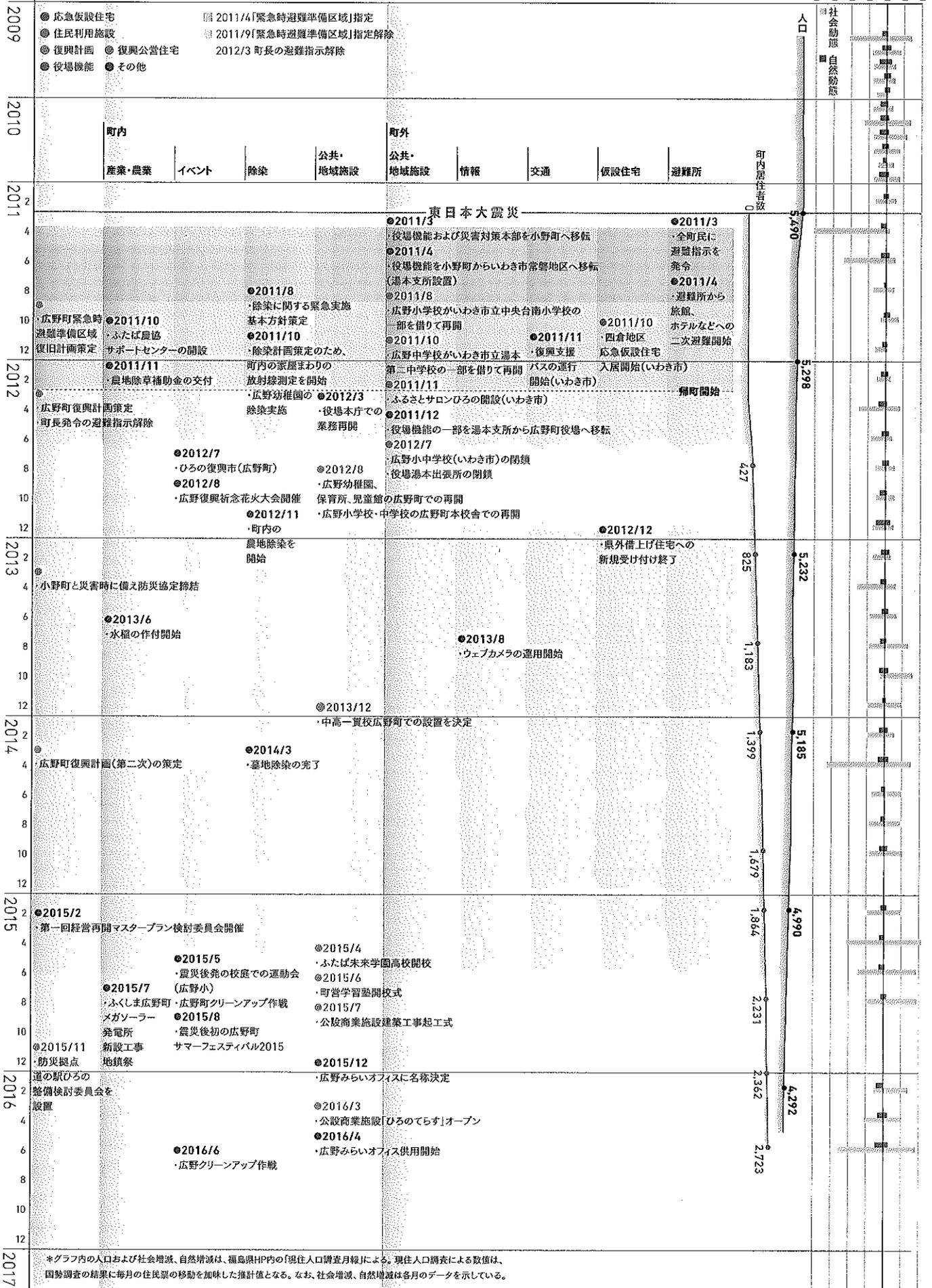
山田岡 | 木戸集落の南に、JR常磐線の木戸駅を挟んでつづく街村。集落は同駅周辺に形成されており、駅南部は上町と呼ばれている。

HIRONO TOWN/Landscape

広野町



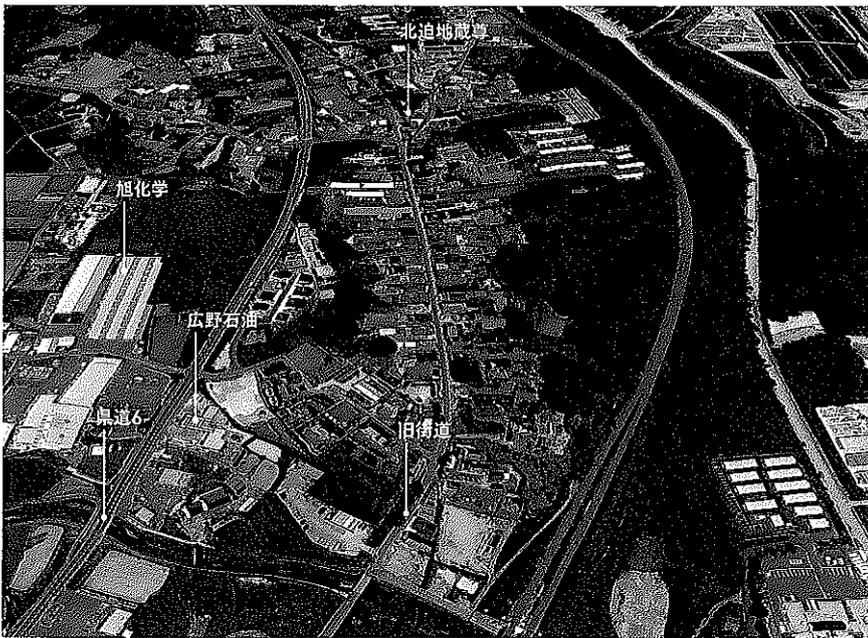
人口の変遷と復興経緯【*A, B, C】



*グラフ内の人口および社会増減、自然増減は、福島県HP内の「現住人口調査月報」による。現住人口調査による数値は、国勢調査の結果に毎月の住民票の移動を加味した推計値となる。なお、社会増減、自然増減は各月のデータを示している。

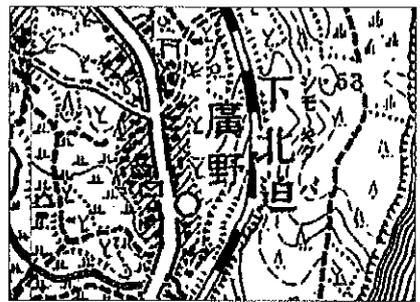
参考資料：*A 福島県HP(<http://www.pref.fukushima.lg.jp>) | *B 広野町HP(<http://www.town.hirono.fukushima.jp/index.html>) | *C 広野町役場総務課秘書広報係「広報ひろの」(2011年5月-2016年6月) | *D 広野町「広野町復興計画(第二次)」(2014.3) | *E 広野町「広野町復興計画(第二次)策定のため民意調査結果について」(2013.12) | *F 広野町「広野町復興のための町民意向調査結果について」(2011.10) | *G 特定非営利活動法人循環型社会推進センター「福島県復興公営入居募集案内」 | *H 広野町「広野まちづくり会議まちづくりアンケート報告」(2014.11) | *I 広野町「環境防災課 生活環境係」 | *J 県内・県外避難者数調べ(H23.8.30)(H24.10.11)(H29.2.8)

下北迫 Shimokitaba

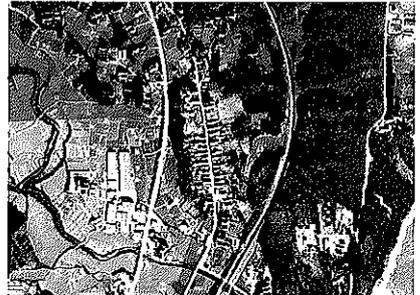


©Google Earth

明治初期の地形図／戦後の空中写真

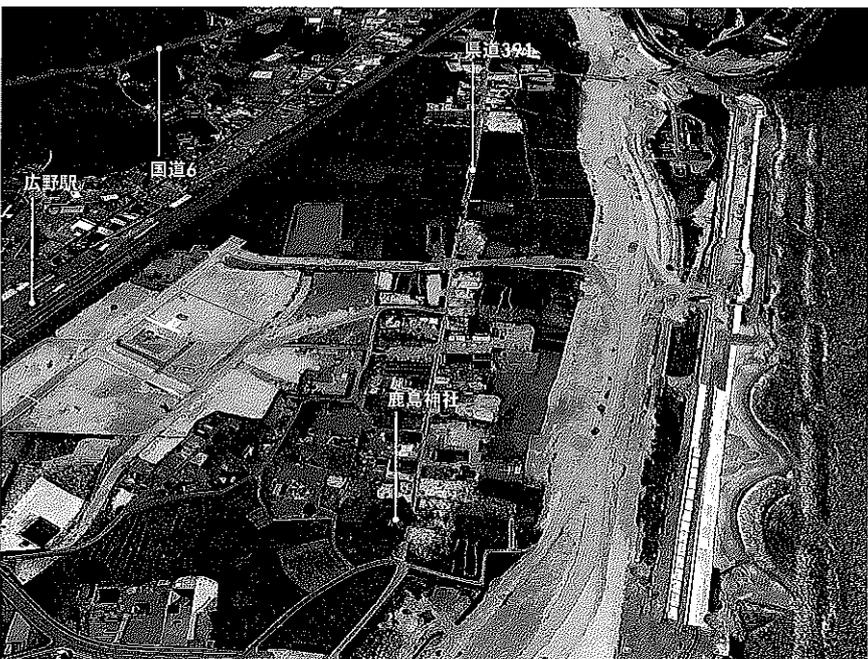


[井出]1908年測図・1910.5.30発行



1974-78年 国土地理院

下浅見川 Shimoasamigawa



©Google Earth

明治初期の地形図／戦後の空中写真



[井出]1908年測図・1910.5.30発行



1974-78年 国土地理院

1889(明治22)年に夕筋・上浅見川・下浅見川・折木・上北迫・下北迫の6ヵ村が合併し、広野村となる。1940(昭和15)年に町制を施行して現在の広野町が成立。人口は1975(昭和50)年に4,796人、2010(平成22)年に5,418人となっている。双葉郡の南端に位置する農業地域である。漁業は広野漁業組合が1903(明治36)年に認可を受け組合員8名で設立した。当時双葉郡内で最も小規模な組合であったが、収入は他の組合を上回っていた。他に江戸期から続く塩産業などでも知られる。さらに

浜街道宿場町「広野宿」としても栄え、町名はこれに由来する。

下北迫 | 町の北東端に位置し、JR常磐線が走っている。旧国道を挟み西町・東町に分かれた街村状集落を成し、江戸期の広野宿の名残が見られる。北西部には耕地が広がっている。北東端には東京電力広野火力発電所やその新町独身寮がある。関連会社の進出でこのエリアの宅地化が進んだ。

下浅見川 | 江戸時代までは町行政の中心地であった。JR常磐線が南北に走り、広野駅を中心に、旧国道6号線沿いに商店街が伸びる。新しい国道6号線がもうひとつの町の軸であり、小・中学校、幼稚園、町役場・公共施設を中心に、西方へ宅地開発が広がる。震災後は駅の東に産業復興拠点と防災緑地の建設が進められている。なお、1997年に開設されたサッカーのナショナルトレーニングセンター「Jヴィレッジ」は、小規模ながらも浜通り屈指の観光地となっている。

飯舘村

ITATE VILLAGE / Landscape



飯館村

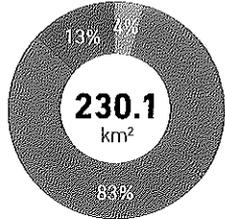
IITATE VILLAGE

-  村章
-  村の花:やまゆり
-  村の鳥:うぐいす
-  村の木:あかまつ

飯館村は、相馬郡に所属し、浜通り北西部に位置する。福島第一原子力発電所事故により、全域が避難指示区域に指定され、全村避難が行われた。避難先としては、元々通勤圏であった福島市が約6割と多い。意向調査によれば、今後の居住地としても福島市を希望する住民が多い。この他、川俣町、南相馬市に復興公営住宅の整備とともに村外拠点が形成されている。

一方、村内の高齢者施設やいくつかの事業所は村内で運営を続ける判断がなされている。2017年3月に帰還困難区域を除くエリアで避難指示解除が予定されており、復興公営住宅、道の駅、学校等を中心とした村内拠点の整備計画が進められている。

面積



-  避難困難区域
-  居住制限区域
-  避難指示解除準備区域
-  避難指示区域外

人口[人] | 単位:人(2016/04/30)

6,193

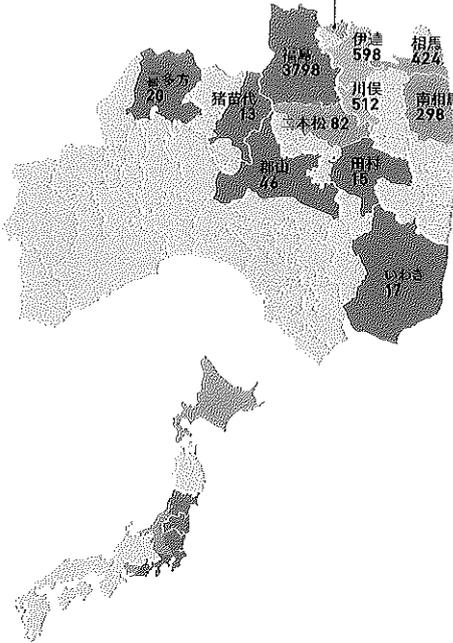
高齢化率[A]:
32.5%(2015/09)
震災前人口[*A]:
6,150人(2011/02)

避難者数[B] | 単位:人(2016/05/01)

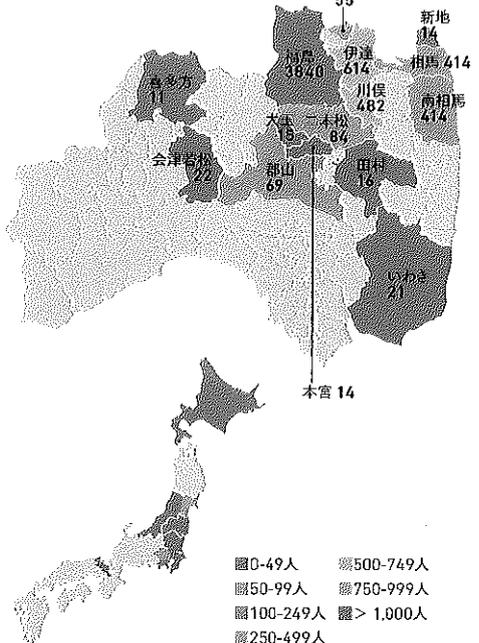
6,760

人口の移動 [人]

2012/03



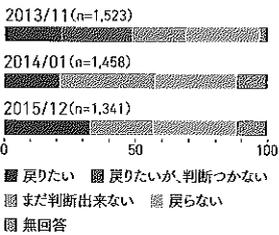
2016/05



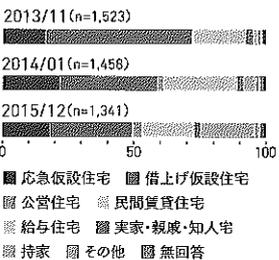
-  0-49人
-  50-99人
-  100-249人
-  250-499人
-  500-749人
-  750-999人
-  1,000人

住民の居住に関する意向 [E,F,G]

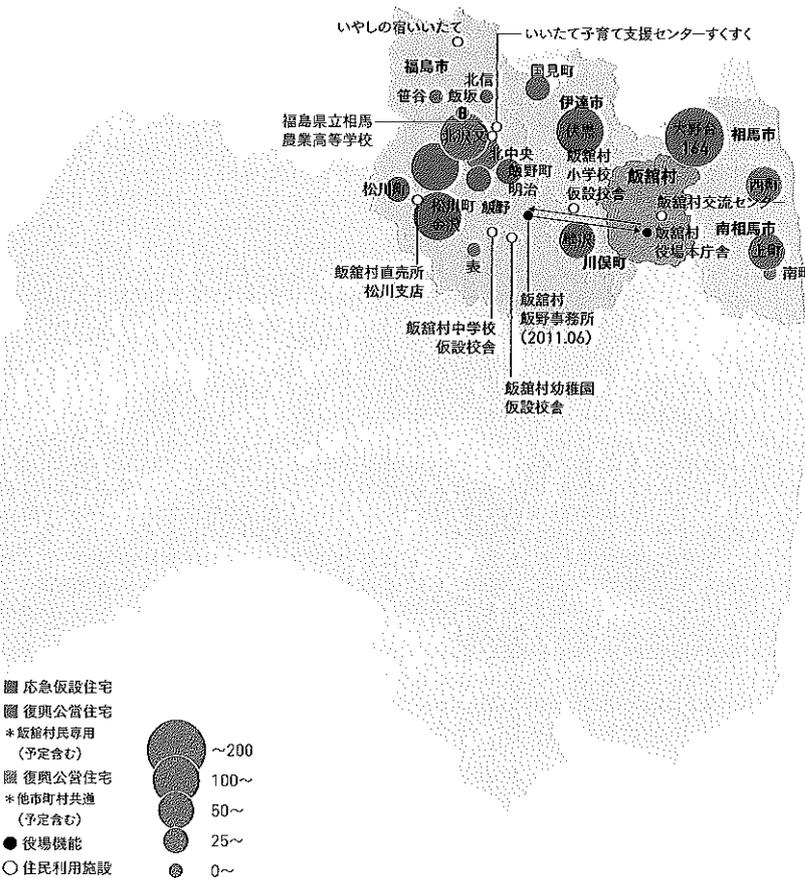
帰還意識



居住形態



生活拠点の分布 [H,I]





©Google Earth



[中村]1908年測図・1912.4.30発行



1974-78年 国土地理院

飯樋 litoi



©Google Earth



[中村]1908年測図・1912.4.30発行



1974-78年 国土地理院

1956(昭和31)年、大館村と飯館村が合併して、現在の飯館村となった。村名は、旧村名の各1字をとったものである。県の北東部を占め、阿武隈山地の北部中央に位置している。人口は1975(昭和50)年時点で8,438人、震災直前は6,509人と減少しており、他の11市町村に比べやや減少傾向が強い。

村の総面積の83%は山林で、その50%は国有林である。従来はそれ以外の民有林で木炭生産が行われていたが、戦後の燃料革命の影響で生産量は減少してい

た。2010(平成22)年、「日本で最も美しい村」連合に加盟している。

草野 | 村の中央部に位置し、水田・牧草地が開ける農業地域である。国道31号線沿いに中心商店街が形成され、村役場・農協・生活改善センター・小中学校などの公共施設が付近に集中している。なお、昨年16戸の大谷地団地が竣工したが、これは元々あった団地を整備したものである。

飯樋 | 村の南西部に位置する。四方を

山々に囲まれ、そこから流れる小川が合流し飯樋川となって東流している。川の沖積地に水田を開き、集落を形成してきた農業地域である。国道31号線沿いに集落が集中している様子が写真から分かり、中心部には診療所・小中学校・郵便局・グラウンドなどがある。また村自体は高冷地帯に位置するが、飯樋はかなりの米生産力を有していた。しかし、他方で自然災害をまともに受けることも多かったため、江戸期の産業としては、馬産と林産とが米の低生産を補っていたことが知られている。

44
飯館村
イラストリカルスケッチ

「飯館の杉は使えるんです」

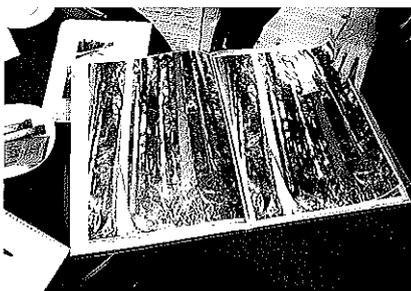
飯館村の菅野元一さんが暮らしてきた地区は、2017年1月現在は目前の避難指示解除を待っている。地震による家屋の損壊はほとんどなかったが、2011年4月に原発事故による避難指示が出されて避難先を転々とするようになった。2016年、菅野さん夫妻は飯館の家に戻るため、改修を進め、10月に完工した。

菅野さん宅の裏には居久根と呼ばれる杉の防風林がある。改修・増築にはこの杉材を100本以上使ったが、そこには社会に対するメッセージが込められている。菅野さんは使用する木に自ら一本一本番号を付け、専門家の協力をえて放射線量を測定しながら家づくりを進めた。家をつくることに、そのまま安全性の科学的証明でもあった。さらに、設計者の提案により、増築された居間では高さ4mの厚い板材を縦に使って壁をつくる、特殊な工法が採用されている。この方法なら、家の外にも内にも断熱材や仕上材が不要で、「飯館の杉」を全面的に表現できるのである。

菅野さん夫妻はこうしてできた住まいを飯館村の復興拠点にしたいと語る。現在飯館の帰還率は約60%であり、地域の



新たに増築された居間で改修までの過程と心境を語る菅野元一さん。自身も木材や構法に詳しく、新旧の建物ともに想いやこだわりは抜け目ない。



居久根の木々。線量測定をするにあたって木々の番号を記載して場所を把握している。

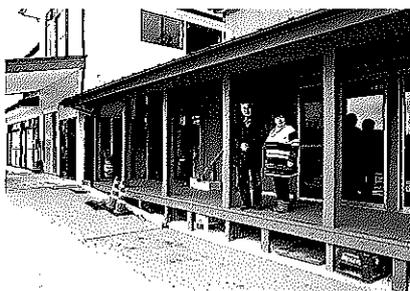
交流も深いために菅野さんの考えに賛同して改修を考える人も出るなど、菅野邸の意義は大きい。環境や農業の専門家が交流する場にと夢は広がる。

新築となった増築部がある場所には、もともと菅野さんのお父さんが建てた作業小屋があったが、これは東側に骨組みを移築して使い続けている。91才のお父さんもこれに大満足という。

茅葺き民家で芽生える地元意識

田村市都路町で「よりあい処華」を営む今泉富代さんは、2014年3月に避難指示が解除され、古道小学校が再開されると同時に都路に戻ってきた。都路は避難指示解除以後、帰還人口が徐々に増えつつあり、地域の活性化に積極的な今泉さんは自宅敷地内の茅葺き民家を食事処兼地域の活動の場として利用している。築100年を超えるこの古民家は地震ではびくともしなかったという。

さらに都路は小学校のクラブ活動が盛んな地域であり、子供たちは忙しくて地元の行事やイベントに参加できない実情がある。そこで今泉さんは小学校と連携することで授業時間に課外活動として華で郷土



緑側に立つ菅野さん夫妻。活動的で朗らかな二人と開放的で明るい部屋が映り込んで、飯館の一角から復興の芽吹きを感じさせる。



よりあい処華の外観。目抜き通りの良い立地で大屋根は一層際立つ。

料理や手芸を子供たちに教える活動をはじめることにした。今泉さんはこれを通して子供たちに都路への地元意識を持ってもらえたらよいと語る。2017年4月から都路では小学校が統合されて子供が増える予定であるため、華はこれからより一層賑わいを増すことだろう。

6年目の家をこれからの家に

2017年2月13日、南相馬市原町区の朝日座でワークショップ「6年目のふるさとを考える——原発型避難集落への改修による復帰——」が開かれ、避難指示解除後の福島で避難者・帰還者が円滑な生活再建を行うための課題の把握と、その解決方法の一つとしての住宅の改修をテーマに、建築専門家が議論を交わした。

建築家の新堀学氏は、住宅の改修における建築デザインの方法について事例を踏まえて紹介。同じく建築家の豊田善幸氏は、古くなった建物をまずは壊さず、結論を先延ばしにして、後から使い方を見つけていく、あるいは改修を通して様々な人々が関わりながら物語を共有していくようなあり方について語った。建築史家・評論家の五十嵐太郎氏も、こうした事例紹介を受けて、多様な時代の建物が重層的に蓄積されていくことの重要性を強調した。

話題は住宅の「所有」にも展開。家族が子供に継がれることが減るなかで、住み手がいなくなったら家を壊し、結果的に多くの空き家が有効に活用されない現状がある。それゆえ、家族外の人々にも建物をスムーズに受け継ぐ仕組みをつくっていくことが必要だと新堀氏・豊田氏は語る。それが実現するためには所有者が「家族以外には家を貸したくない」といった価値観を変えていくことが必要だ。

しかし、被災地の現実、どちらかといえはこうした議論とは反対の方向に進んでいるように見える。建築家の嶋影健一氏は、現状では新築が圧倒的に多いなかで、改修による資産の再生をより活性化していくために建築家に何ができるかと自問した。

復興の早い神社

南相馬市小高区の相馬小高神社は、相馬野馬追いで知られる立派な神社だ。2011年3月の地震では社殿はほぼ無傷だったが、本殿を囲む玉垣をはじめ、鳥居や灯籠などの多くは石できているためことごとく倒れてしまったようだ。今では一見被害など何もなかったかのようだが、たしかに灯籠の多くは部位と部位の間にモルタルが入り、火袋(ろうそくを入れる箱状の部位)は新調されて石の色が白いものも多い。こうした社殿・境内の復興は宮司さんの奮闘によるもので、震災直後から足繁く境内に通って修理を進めたという。地域の期待と責任に応えようと尽力する神職の方々が被災各地におられるのだろう。

村の鎮守は一歩ずつ

他方、集落住民が氏子として皆で支えるのが、いわゆる村の鎮守である。たとえば上浦の熊野神社は、本殿の高欄や縁束に新しい材が加えられ、本殿の屋根から幣殿にかけて筋交い(斜材)で補強されている。境内は阿武隈山地から枝分かれしながら浜通りに伸びてきた小さな丘陵の先端にあり、こうした丘陵にまもられた集落を見下ろせる。神社と村の緊密な関係を思わせる。

龍田神社は檜葉町の竜田駅近くにある。参道は実にきれいに掃除され、葉っぱひとつ落ちていない。拝殿から本殿に向かって手をあわせると、幣殿(本殿と拝殿をつなぐところ)の材が新しく、日の光を浴

びて清々しい。震災後は宮大工の手配がつかず苦心されているとのことだったが、境内全体が氏子住民の手で一歩ずつ復興に向かっている。

津波被災集落と神社

浦尻の綿津見神社は、太平洋の荒波を眼下に、小高い丘上にある。参道の入り口には新しく奉納されたと思われる鳥居や灯籠。鳥居をくぐって進むと、参道も、その先にぽっかりと開ける境内も、実にていねいに掃き清められており、しかもそれが日常的なものであることをうかがわせる。高台のため津波被害はないが、地震の影響は大きかったようだ。本殿こそ無傷だが、拝殿・幣殿が新築されており、木材の色が異なる。境内に南向きに据えられた石碑には、こう刻まれていた。「(前略)私たちは浦尻地域の震災受難者の方々のご冥福を祈るとともに、受難を免れた住民一丸となって、当神社の復旧復興を施行致し、未来への礎として、碑を建立致しました。平成二十六年五月吉日浦尻行政区一同」。浦尻には、海際に列状に密集する集落があったが、2011年の津波で失われ、そこに防潮堤が建設中である。

住民帰還前の集落でも

浪江町幾瀬橋の初發神社。わたしたちが訪ねた時点(2017年1月)ではまだ居住が許されない地域であったが、境内のそこかしこに手入れのあとが見られた。地震で傾いた拝殿には応急処置がなされ、崩れ



左/相馬小高神社 | 修理された灯籠
右/熊野神社 | 本殿



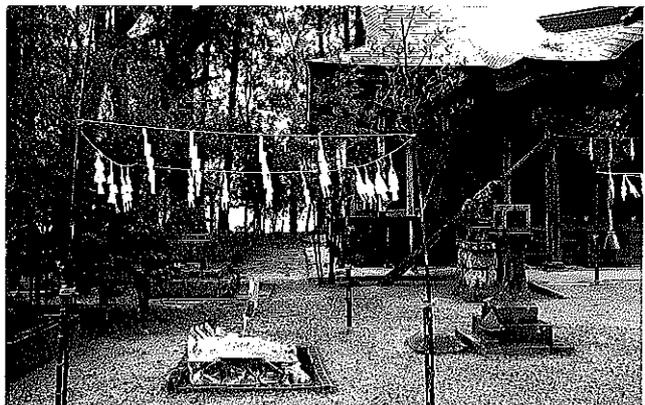
龍田神社 | 幣殿内部

てしまった灯籠も整頓され、境内はやはり丁寧に掃除されている。参道の入り口には「祈復興」の旗。そして、お炊き上げのために氏子住民たちが境内に持参したと思われる正月飾りやお札が注連縄の結界のなかに納められていた。神社は地域のなかで生きている。

原発事故後避難を経験してきた12の市町村には、まだ避難指示解除準備区域、居住制限区域、帰還困難区域が多く残る。神社の修理状況も、こうした区域の指定と、その解除の状況によることはいうまでもないが、住民の帰還よりも神社の修理や掃除の方がはるかに早いことが何よりも印象的だった。



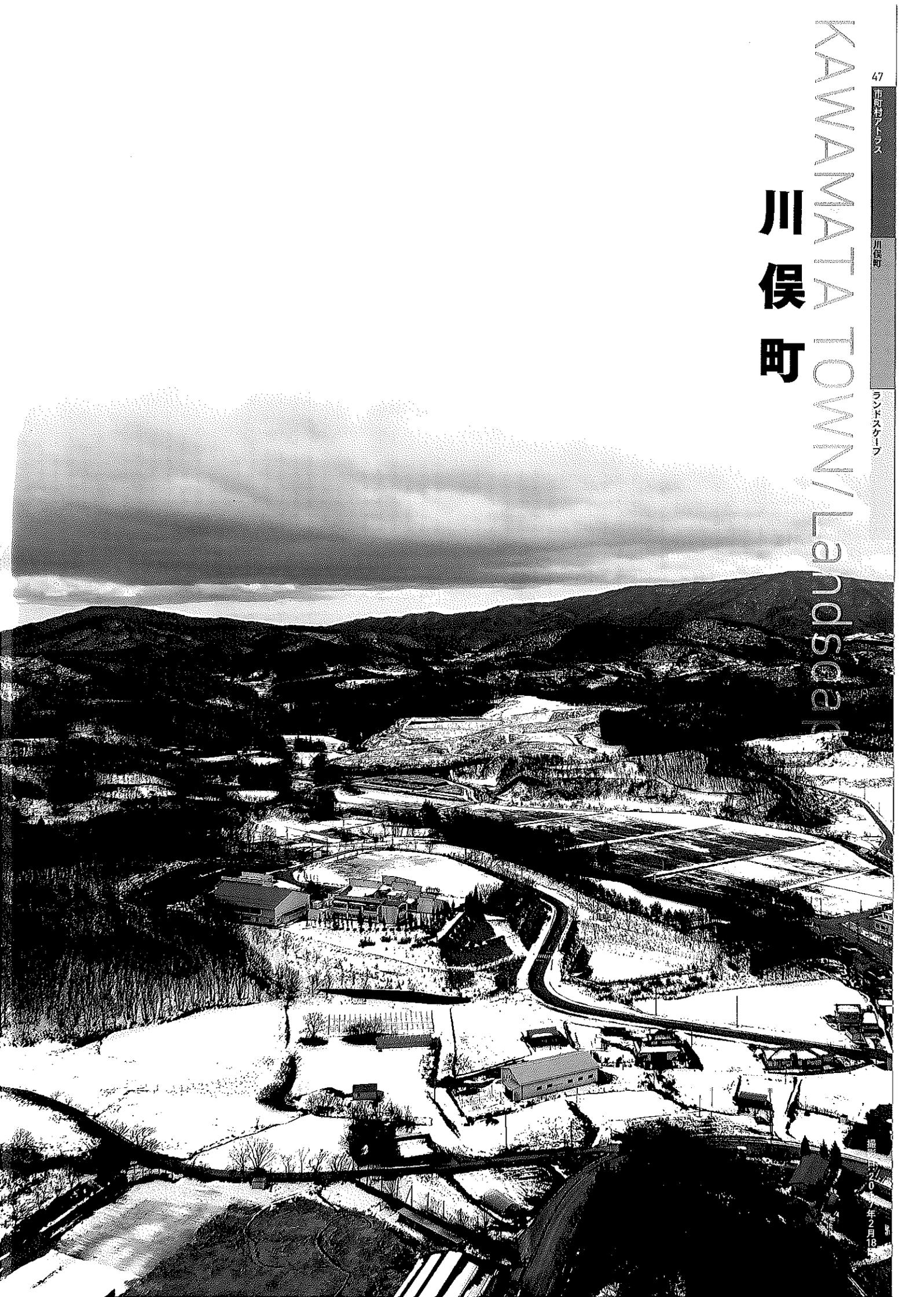
綿津見神社 | (南相馬市浦尻)の本殿(左側)と新築された拝殿(右側)



初發神社 | お炊き上げの正月飾りやお札。応急処置のなされた社殿。

川俣町

KAWAMATA TOWN/Landscape



川俣町

KAWAMATA TOWN



町章

町の花: 山つつじ

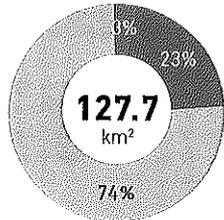
町の鳥: うぐいす

町の木: かえで

川俣町は伊達郡南部に属し、中通りに位置する。福島第一原子力発電所の事故により町の南東に位置する山木屋地区(全町の約26%)が居住制限区域及び避難指示解除準備区域に指定されており、川俣町民の約1割が町内外に避難している。また川俣町は避難自治体であると同時に、多くの避難者を受け入れており、事

故直後は約6,000人の避難者を迎えた。現在も500人ほどの町外住民を受け入れているほか、飯館村立の学校も町内に整備されている。山木屋地区の避難指示解除に向けては、医療・福祉機能を持った複合施設の整備、山木屋地区住民向けの公営住宅の整備などが計画されている。

面積



■ 帰還困難区域
 ■ 居住制限区域
 ■ 避難指示解除準備区域
 ■ 避難指示区域外

人口[‘B] | 単位:人(2016/05/01)

13,818

高齢化率[‘A]:
 36.6%(2015/09)

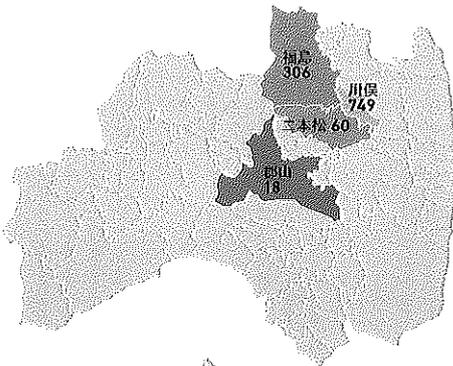
震災前人口[‘A]:
 15,513人(2011/02)

避難者数[‘B] | 単位:人(2016/05/01)

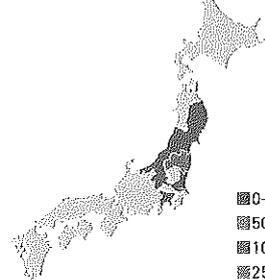
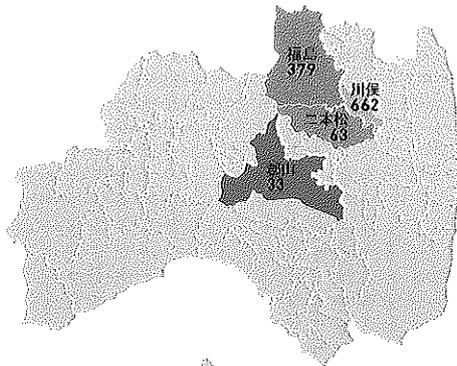
1,398

人口の移動 [‘B]

2014/04



2016/05



■ 0-49人 ■ 500-749人
 ■ 50-99人 ■ 750-999人
 ■ 100-249人 ■ > 1,000人
 ■ 250-499人

住民の居住に関する意向 [‘G, H, I]

帰還意識

2013/02(n=856)

2014/02(n=322)

2015/10(n=342:山木屋地区)

■ 戻る
 ■ 宅地と農地が年間10ミリシーベルト以下になれば戻りたい
 ■ 宅地と農地が年間5ミリシーベルト以下になれば戻りたい
 ■ 宅地と農地が年間1ミリシーベルト以下になれば戻りたい
 ■ 山木屋全体が年間10ミリシーベルト以下になれば戻りたい
 ■ 山木屋全体が年間5ミリシーベルト以下になれば戻りたい
 ■ 山木屋全体が年間1ミリシーベルト以下になれば戻りたい
 ■ わからない・判断つかない
 ■ 戻らない
 ■ 無回答・その他

居住形態

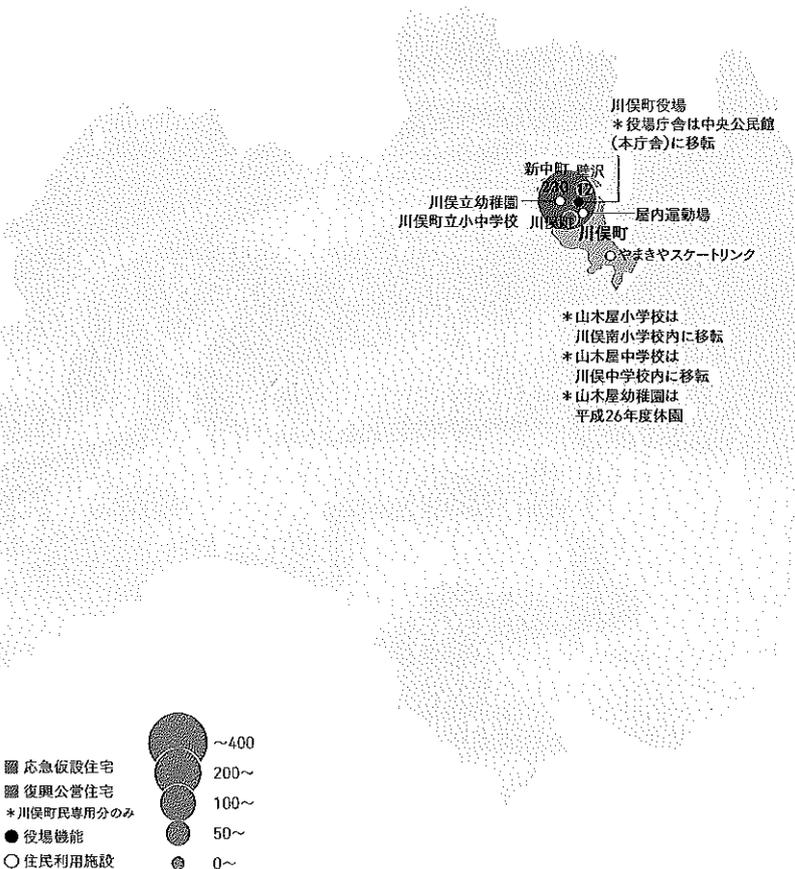
2013/02(n=856)

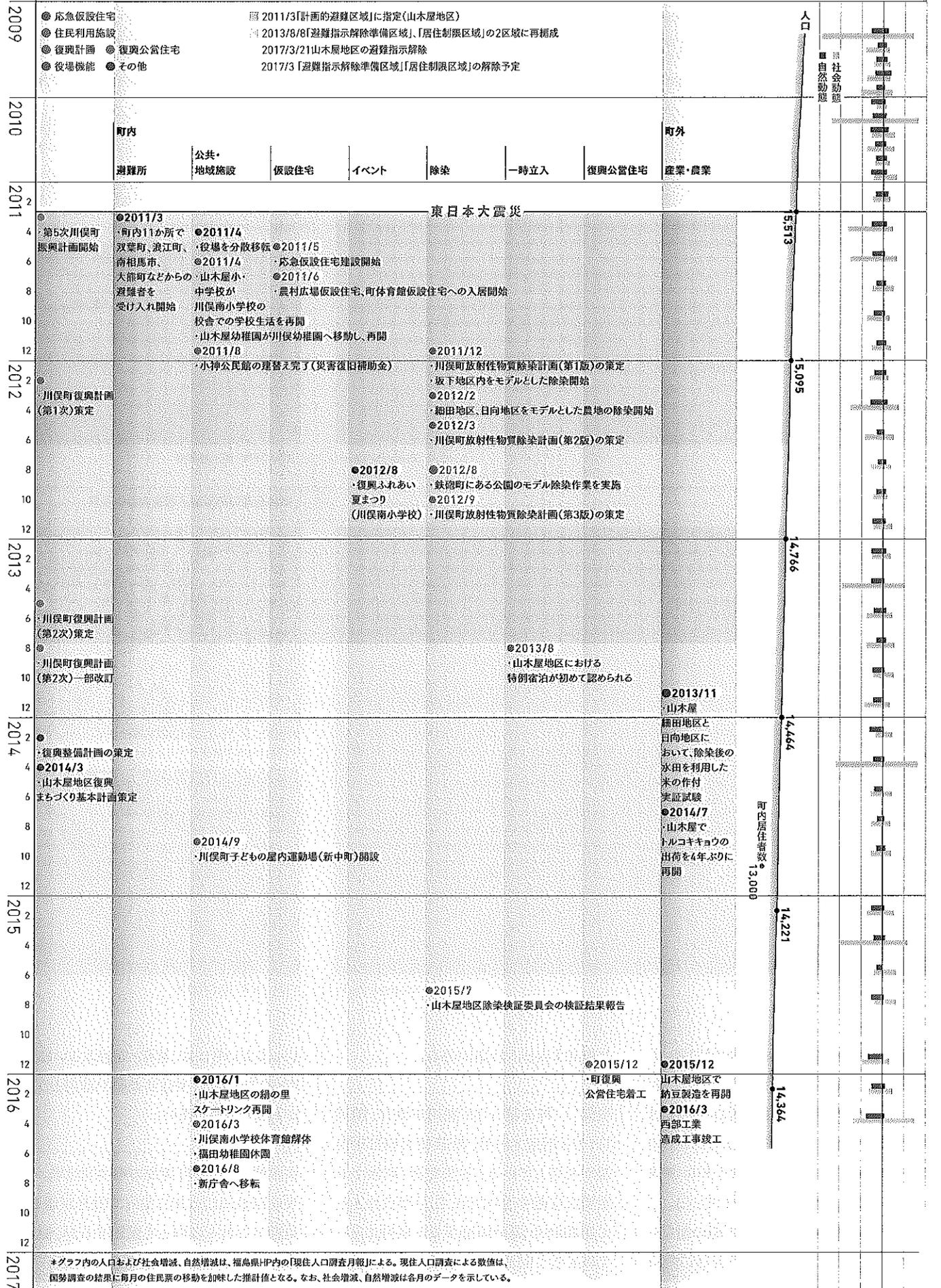
2014/02(n=322)

2015/10(n=342:山木屋地区)

■ 応急仮設住宅 ■ 借上げ仮設住宅
 ■ 公営住宅 ■ 民間賃貸住宅
 ■ 給与住宅 ■ 実家・親戚・知人宅
 ■ 持家 ■ その他 ■ 無回答

生活拠点の分布 [‘J, K]





参考資料: *A 福島県HP(<http://www.pref.fukushima.lg.jp>) | *B 川俣町HP(<http://www.town.kawamata.lg.jp/>) | *C 川俣町役場「広報かわまた」(no.638-no.701) | *D 川俣町「川俣町復興計画(第2次)」(2014.7) | *E 都市防災総合推進事業川俣町スマートコミュニティ推進委員会「山木屋地区復興まちづくり基本計画」(2014.3) | *F 福島県「復興整備計画」(2014.8) | *G 復興庁、福島県、川俣町「川俣町住民意向調査 調査結果(速報版)」(2014.2) | *H 山木屋地区自治会、川俣町「川俣町山木屋地区住民アンケート報告書」(2013.2) | *I 復興庁、福島県、川俣町「川俣町住民意向調査 調査結果(速報版)」(2015.12) | *J 特定非営利活動法人福環研社会推進センター「福島県復興公営入居募集案内」 | *K 福島県「復興公営住宅入居対象市町村ごとの工程表」

川俣 Kawamata



©Google Earth

明治初期の地形図／戦後の空中写真

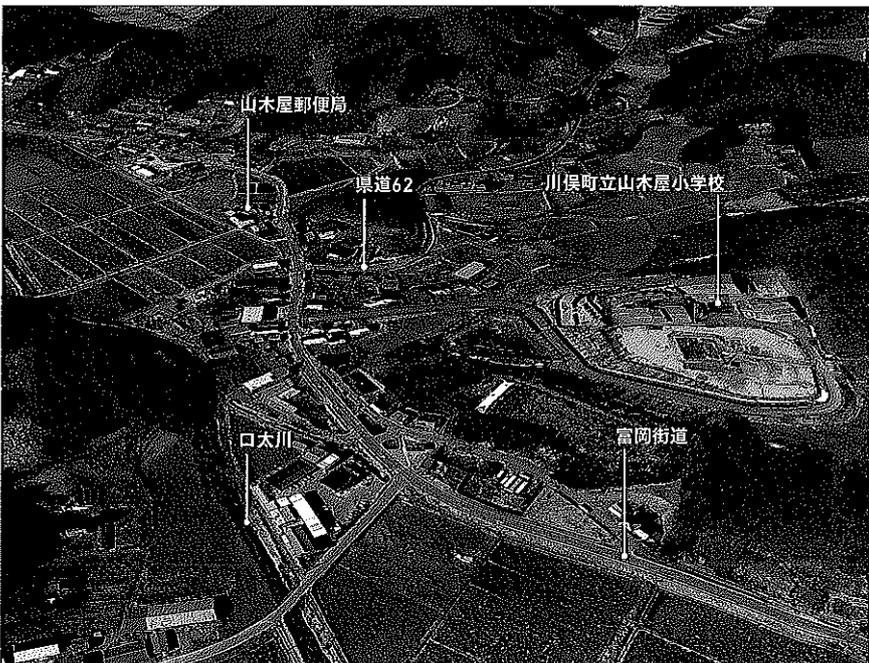


〔川俣〕1908年測図・1912.4.30発行



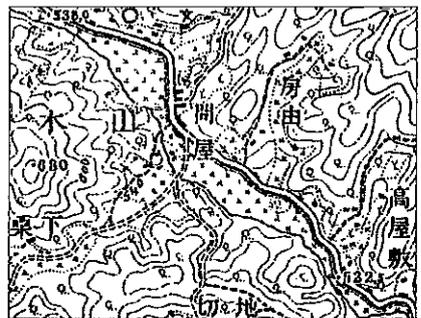
1974-78年 国土地理院

山木屋 Yamakiya



©Google Earth

明治初期の地形図／戦後の空中写真



〔川俣〕1908年測図・1912.4.30発行



1974-78年 国土地理院

1955(昭和30)年に旧伊達郡の川俣町、小島・飯坂・小綱木・大綱木・富田・福田の各村、ならびに安達郡山木屋村の1町7ヵ村が合併して今日の川俣町となった。1981(昭和56)年の人口は21,641人だが、2010(平成22)年には15,569人まで減少している。

阿武隈山系の起伏に富んだ峰の連なりにあいだに形成された狭い平野部に展開する。町名の由来には、養蚕・機織りの祖小手子姫の郷里、大和国高市郡川俣の里にちなんだという説と、町を流れる広瀬川と五十沢川が合流する地域(川股)の形状

に由来するという2説がある。

川俣 | 町を縫って広瀬川が流れ、国道114号と国道349号、県道12号原町川俣線が交差している。古来交通・政治上の重要な位置を占めたが、江戸時代に入って絹織物生産が隆盛すると幕府にとっての重要な財源ともみなされ、それ以前の複雑な支配から幕府直轄地となり、陣屋設置に至った。陣屋跡は1972(昭和47)年に廃止されるまで県繊維工業試験場が置かれていた。面的に発達した都市と

いってよい町には、宮町・寺前あるいは瓦町・鉄炮町など、多様な来歴や職業をうかがわせる町名が多い。

山木屋 | 川俣町南部の中山間地域。中央を流れる口太川に沿って国道が通る。集落もこれらに沿って展開するが、他の家々は山地に点在する。地内には、震災前まで幼稚園や小・中・高等学校もあったが、現在は多くが運営をしておらず、2018(平成30)年4月に小中一貫校の再開方針が打ち出されている。

葛尾村

KATSURAO VILLAGE / Landscape



葛尾村

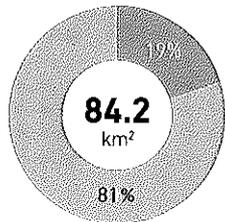
KATSURAO VILLAGE

-  村章
-  村の花:つつじ
-  村の鳥:きじ
-  村の木:赤松

葛尾村は双葉郡に属し、浜通り西部に位置する。福島第一原子力発電所の事故により全域が避難指示区域(帰還困難区域、居住制限区域、避難指示解除準備区域)に指定され、全村民が村外へ避難した。三春町に応急仮設住宅、役場、学校等が設置され、復興公営住宅の入居も始まっている。一方近隣の都市部である郡

山市や、震災前から買い物や仕事で行き来の多かった田村市への避難者も多い。2016年6月12日に帰還困難区域を除く避難指示が解除され帰還が始まり、2016年3月の葛尾村総合戦略では2拠点居住の考えとともに定住人口900人の村を目指すことが示されている。

面積



-  帰還困難区域
-  居住制限区域
-  避難指示解除準備区域
-  避難指示区域外

人口[*B] | 単位:人(2016/06/01)

1,466

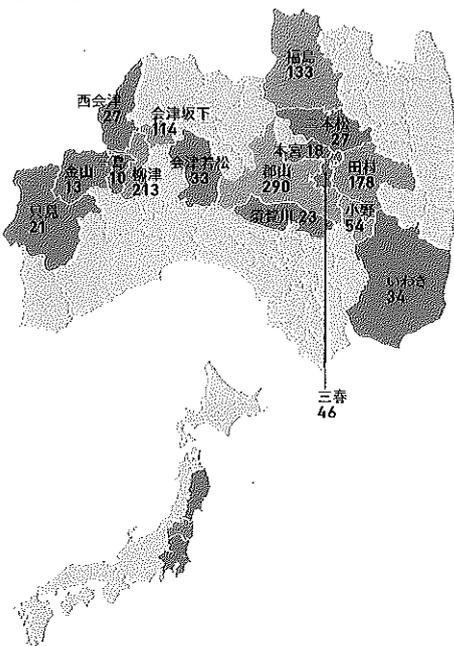
高齢化率[*A]:
35.9%(2015/09)
震災前人口[*A]:
1,525人(2011/02)

避難者数[*B] | 単位:人(2016/06/01)

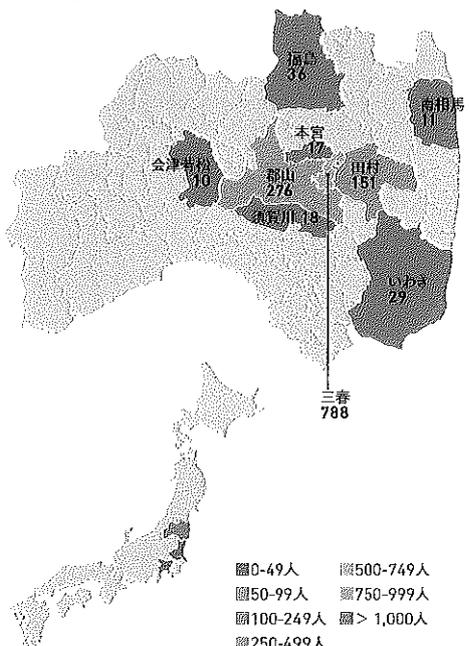
1,466

人口の移動[*B]

2011/06



2016/06



-  0-49人
-  50-99人
-  100-249人
-  250-499人
-  500-749人
-  750-999人
-  > 1,000人

住民の居住に関する意向[*E, F, G]

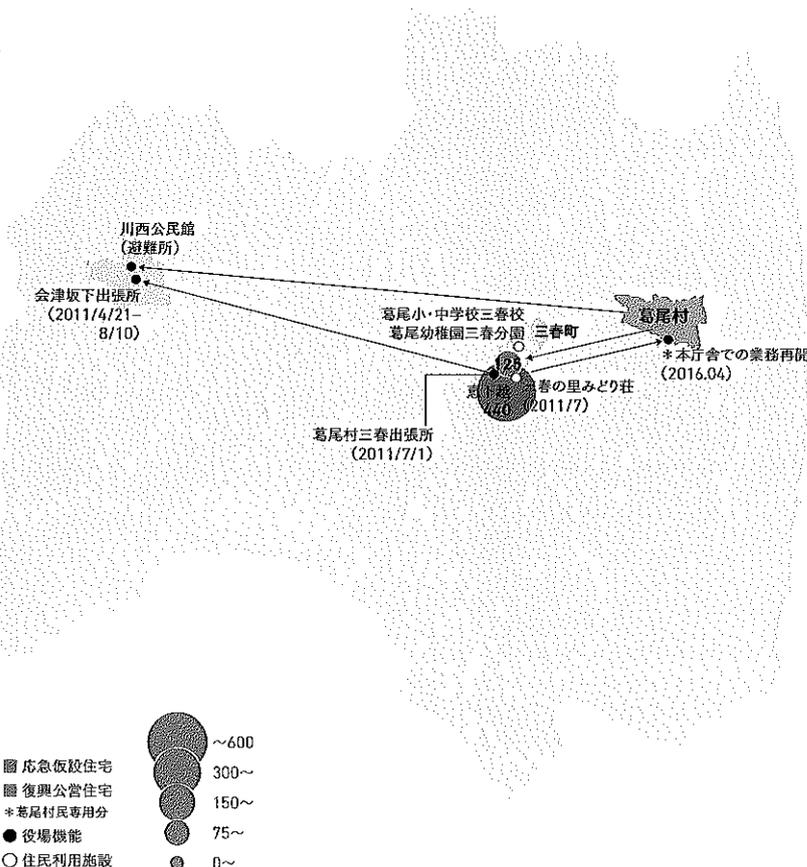
帰還意識

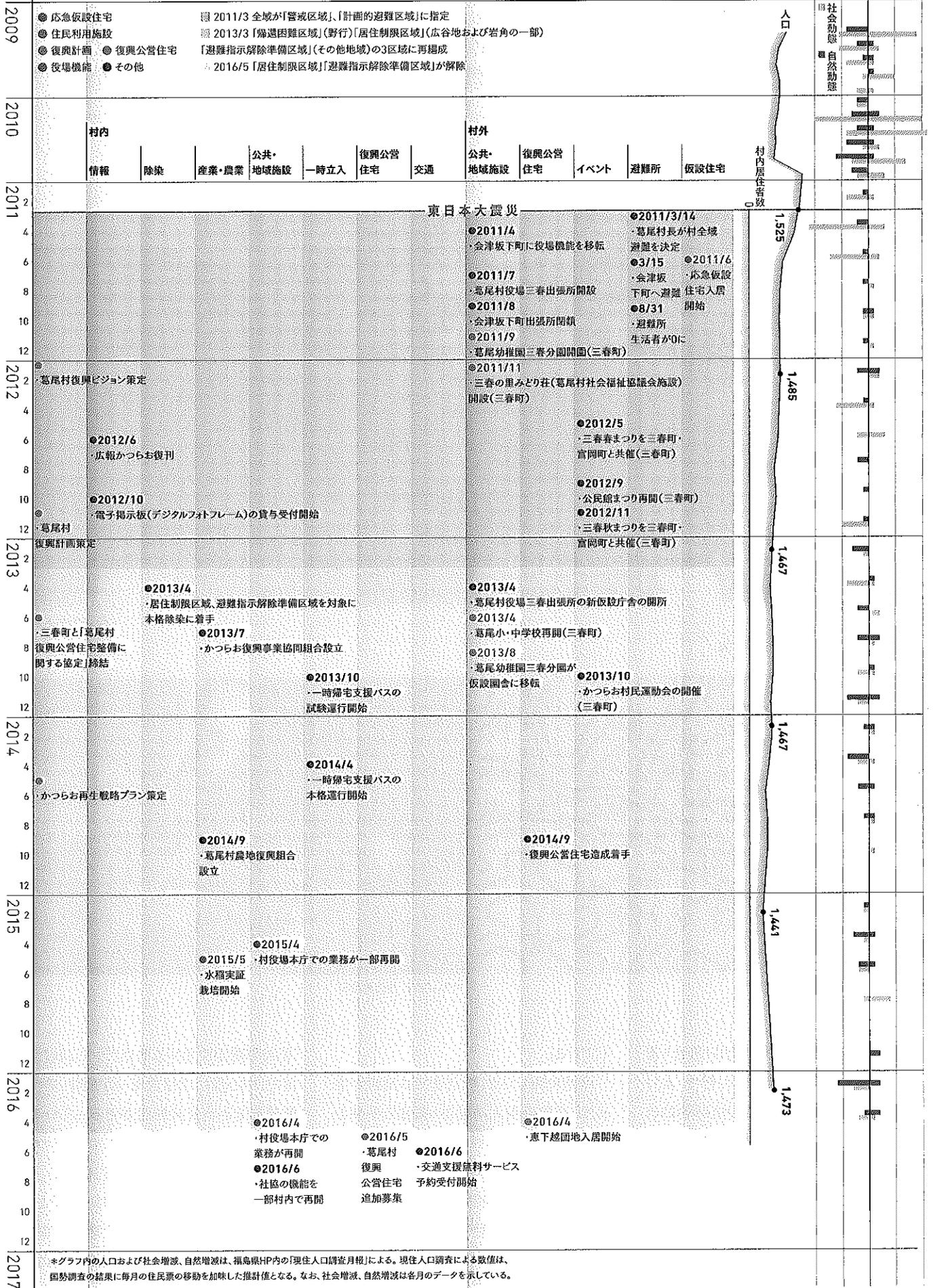


居住形態

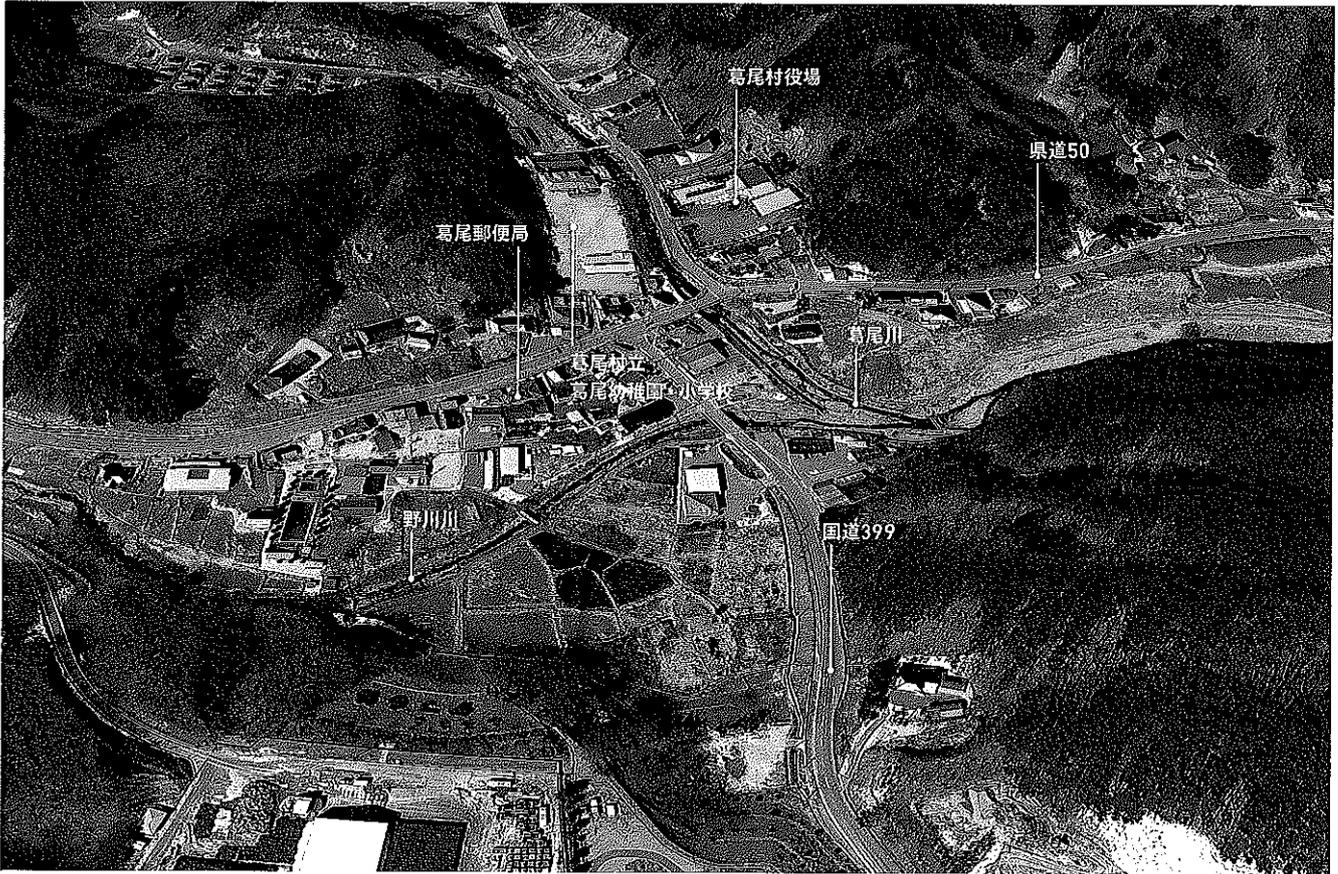


生活拠点の分布[*H, I]



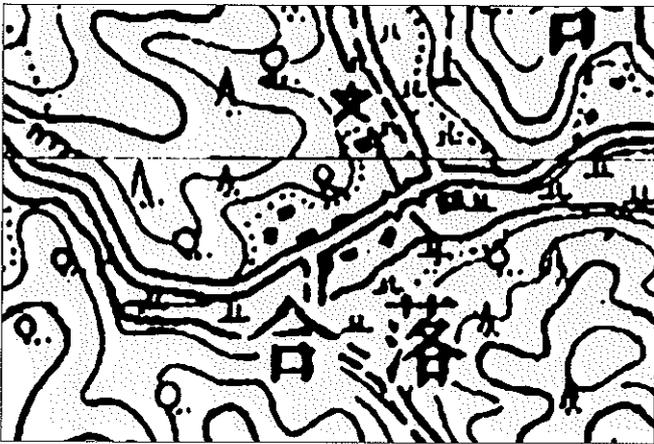


参考資料: *A 福島県HP(<http://www.pref.fukushima.lg.jp>) | *B 葛尾村HP(<http://www.katsurao.org/>) | *C 葛尾村「広報かつらお」(no.372-no.420) | *D 葛尾村復興委員会「復興まちづくり事業化計画「かつらお再生戦略プラン」」(2014.6) | *E 復興庁、福島県、葛尾村「葛尾村住民意向調査 調査報告書」(2013.3) | *F 復興庁、福島県、葛尾村「葛尾村住民意向調査報告書」(2014.3) | *G 葛尾村「帰還後の住まい再建に係る意向調査」(2015.10) | *H 特定非営利活動法人復興型社会推進センター「福島県復興公営入居募集案内」 | *I 福島県「復興公営住宅入居対象市町村ごとの工程表」



©Google Earth

明治初期の地形図／戦後の空中写真



「浪江」1908年測図・1911.4.30発行



1974-78年 国土地理院

1889(明治22)年、上野川・野川・落合・葛尾の4ヵ村が合併して成立した村で、人口は1975(昭和50)年で2174人、2010(平成22)年には1531人。村は県東部、双葉郡の北西端、阿武隈山地東部の高原地帯に位置する。西部を東流する野川が葛尾川に合流し、同村南東端で高瀬川に合流している。村内を主要地方道浪江都路線、県道50号・253号線が走る。

村名は、大永年間頃に信州葛尾城(松本城)ゆかりの松本勘解由介親照が相馬頭胤に仕え、この地に定住したことに由来

している。

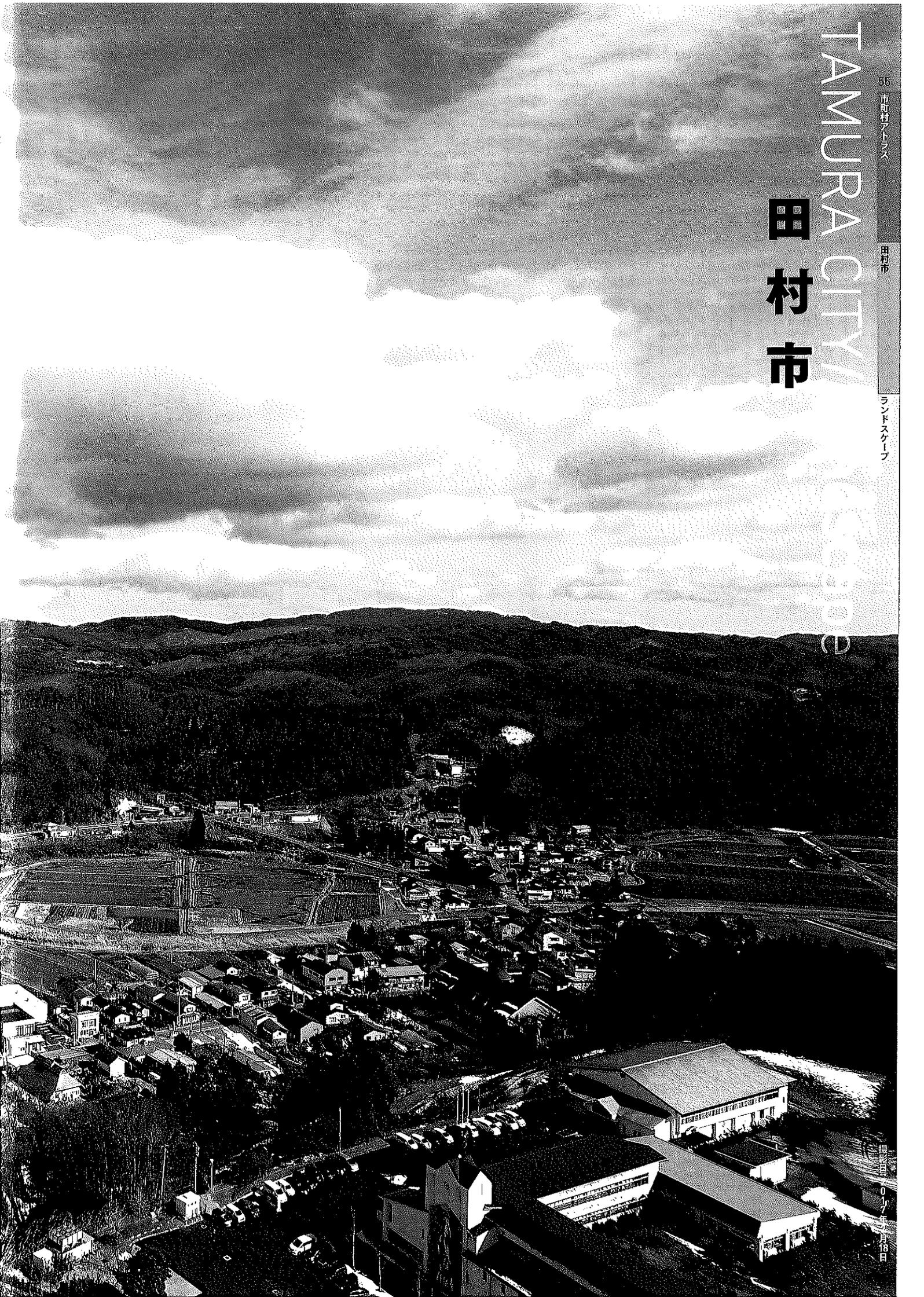
産業に関しては、戦前までは馬産が盛んで、村民の収入は馬産・養蚕と冬季の林業から得ていたが、それらは戦後衰退し、代わりに畜産と稲作が盛んになる。またそうした戦後の産業転換とともに開拓入植者が増加し、新しい集落が形成されていった。

落合 | 村の南東部、葛尾川と野川の合流点付近に中心街が形成されている。写真からも分かるように、国道399号線、県

道50号線が交差する地点につくられた集落で、中心部には村役場・幼稚園・学校・郵便局などの公共施設がそろっている。1910(明治43)年の地図にすでに学校の記載がある。落合から南西側に位置し、都路村との境にある五十人山はツツジとスズランの名所で、初夏には行楽客で賑わう。震災後、村役場は2016年4月1日に村内に戻っている。

田村市

TAMURA CITY / LANDSCAPE



田村市

TAMURA CITY



市章



市の花: つばき



市の鳥: うぐいす

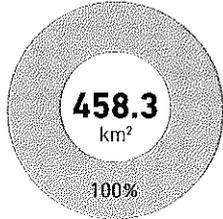


市の木: なら

田村市は中通りの最東端に位置する。福島第一原子力発電所の事故により都路地区の一部が避難指示区域(避難指示解除準備区域)に指定された。仮設住宅や復興公営住宅が市内の避難指示区域外に建設されたほか、学校も市内の避難指示区域外で運営された。その後除染が完了し2014年4月に避難指示が解除され、

帰還が開始された。学校や事業者が都路地区で再開され生活基盤が整いつつあり、帰還率は徐々に増加しており、2016年7月時点では、旧避難指示区域の居住者のおよそ6割が市内へと帰還している。発災後、本庁舎の移転は行われなかったが、その後新庁舎が建設され、2015年には新庁舎での業務が開始されている。

面積



- 旧帰還困難区域
- 旧居住制限区域
- 旧避難指示解除準備区域
- 旧避難指示区域外

人口[人] | 単位:人(2016/04/01)

38,130

高齢化率[A]:
31.9%(2015/09)

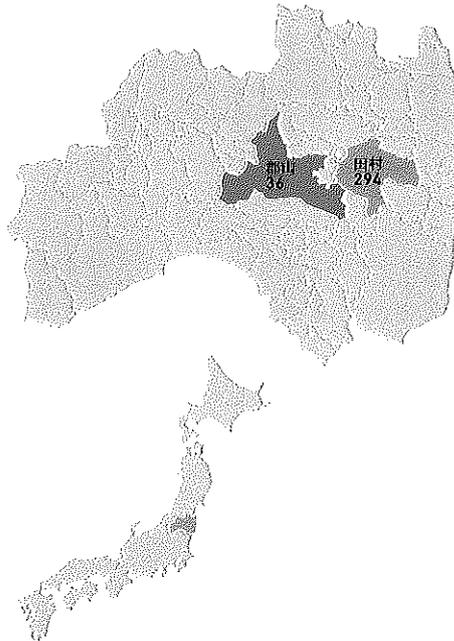
震災前人口[A]:
40,258人(2011/02)

避難者数[G] | 単位:人((2014/06末)

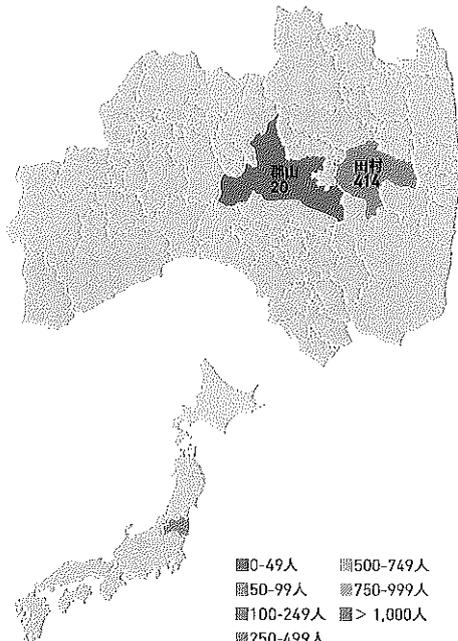
1,523

人口の移動

2012/11



2014/10



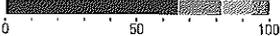
- 0-49人
- 50-99人
- 100-249人
- 250-499人
- 500-749人
- 750-999人
- > 1,000人

住民の居住に関する意向 [F,H]

現在の住まいの場所

2014/11(n=505:都路地域の世帯の代表者)

2015/10(n=528:都路地域の世帯の代表者)



- 震災発生当時の住居
- 震災発生当時の住居以外
- 震災発生当時の住居とそれ以外の住居を行き来している
- 無回答

帰還意識

2014/11(n=193) *「現在の住まいの場所」で「震災発生当時の住居以外」および「震災発生当時の住居とそれ以外の住居を行き来している」を選択したもの

2015/10(n=148:都路地域の世帯の代表者)

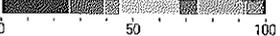


- 都路地域に住みたい
- 田村市以内(都路地域以外)に住みたい
- わからない
- 田村市以外に住みたい
- 無回答

居住形態

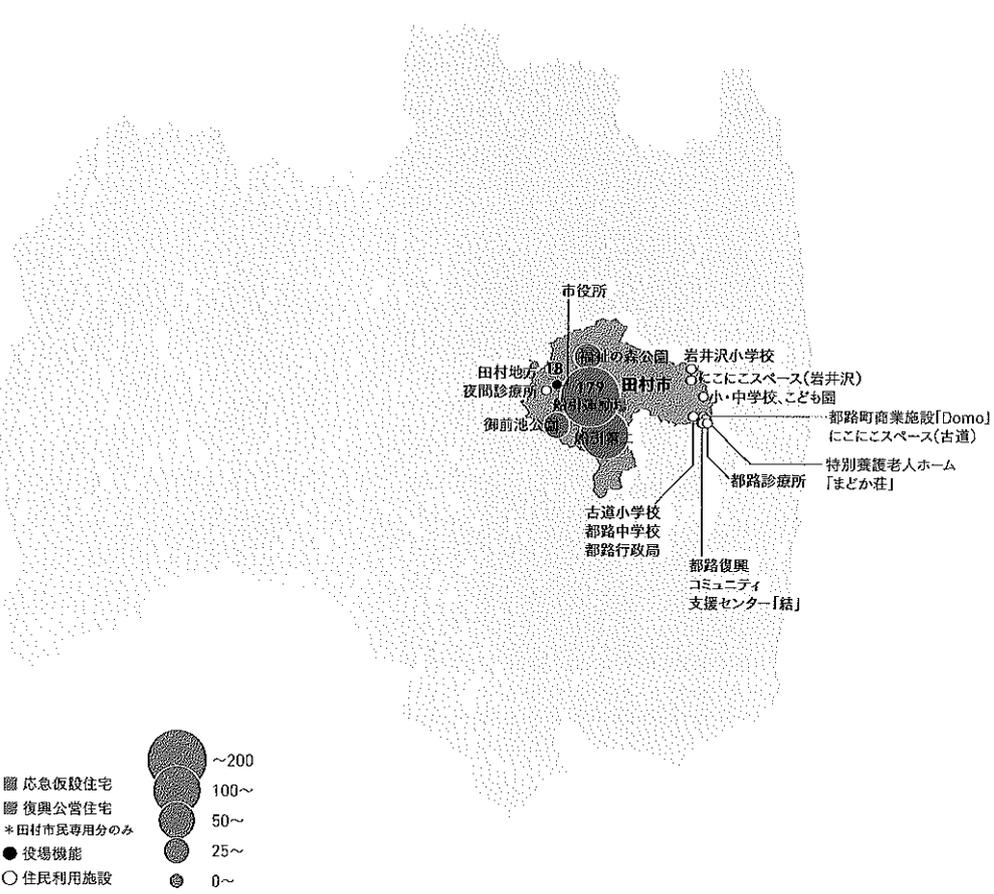
2014/11(n=193) *「現在の住まいの場所」で「震災発生当時の住居以外」および「震災発生当時の住居とそれ以外の住居を行き来している」を選択したもの

2015/10(n=148:都路地域の世帯の代表者)



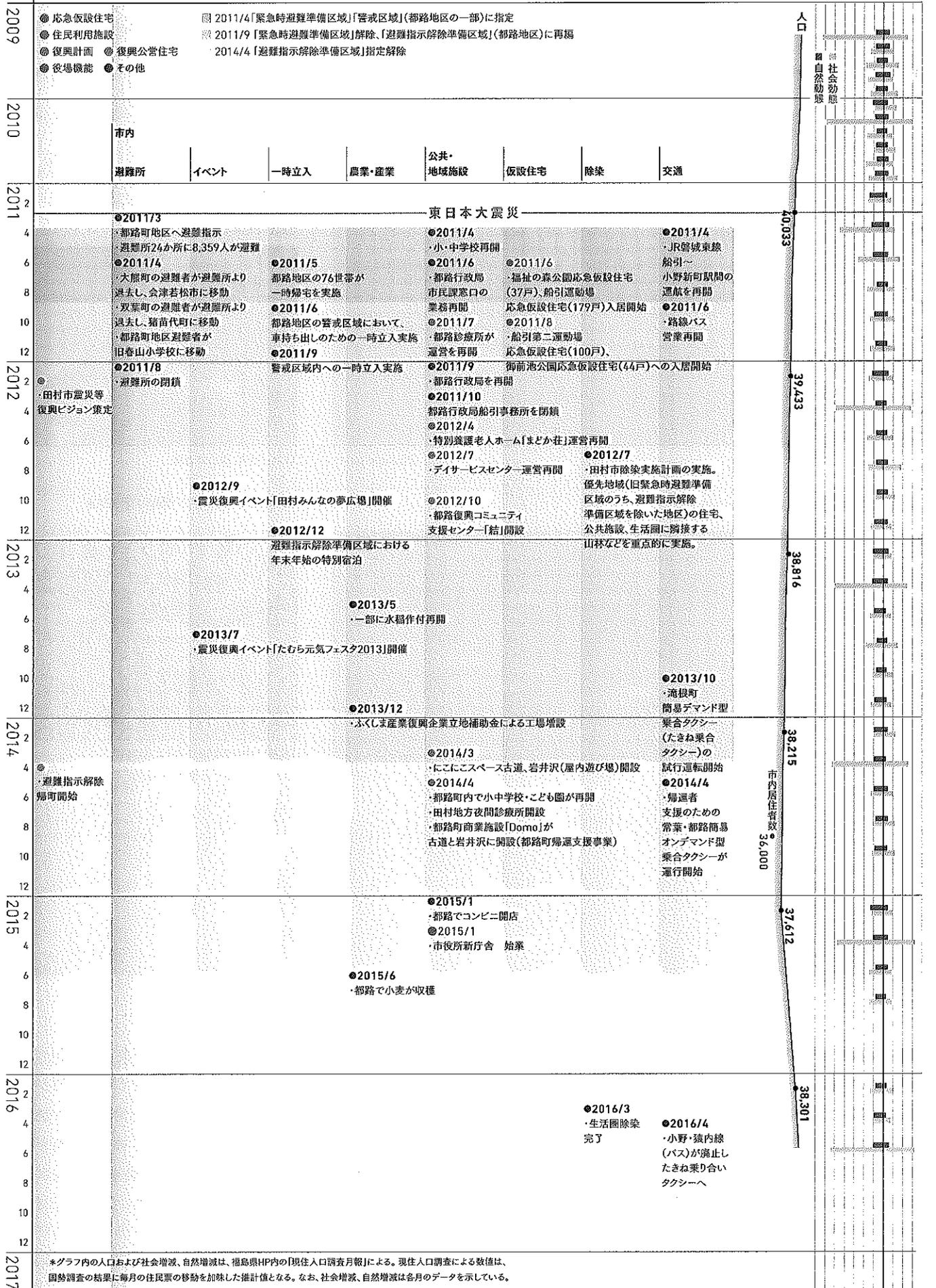
- 応急仮設住宅
- 借上げ仮設住宅
- 公営住宅
- 民間賃貸住宅
- 給与住宅
- 実家・親戚・知人宅
- 持家
- 無回答

生活拠点の分布 [I]



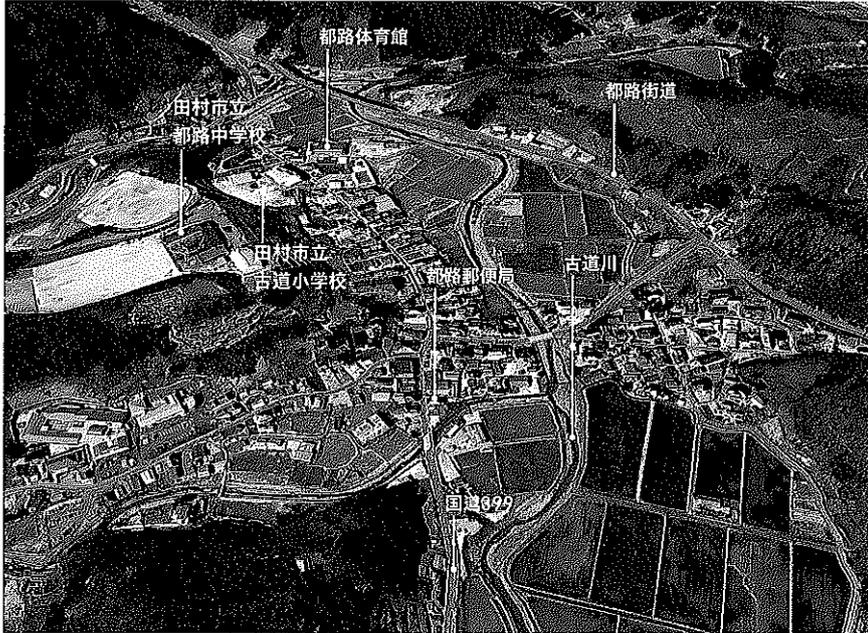
- 応急仮設住宅
- 復興公営住宅
- 田村市民専用分のみ
- 役場機能
- 住民利用施設
- 0~
- 25~
- 50~
- 100~
- ~200

人口の変遷と復興経緯 [A,C]



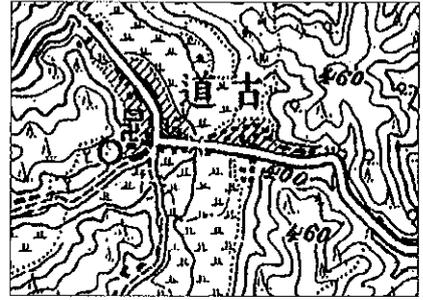
参考資料: *A 福島県HP(<http://www.pref.fukushima.tg.jp>) | *B 田村市HP(<http://www.city.tamura.lg.jp/>) | *C 田村市「たむら市政だより」(2011年5月号～2016年6月号) | *D 田村市「田村市震災等復興ビジョン」(2012.3) | *E 都路町生活基本構想協議会「都路町生活基本構想 地域と共に暮らせる「都路」へ」(2014.9) | *F 復興庁、福島県、田村市「田村市住民意向調査」(2014.11) | *G 出口政「田村市都路町における対応と復興に向けた住環境整備構想」(日本都市計画学会『都市計画』2014.10) | *H 復興庁、福島県、田村市「田村市住民意向調査」(2015.10) | *I 特定非営利活動法人循環型社会推進センター「福島県復興公営入居募集案内」

都路町古道 Miyakojimachi-furumichi



©Google Earth

明治初期の地形図／戦後の空中写真



〔浪江〕1908年測図・1911.4.30発行



1974-78年 国土地理院

都路町岩井沢 Miyakojimachi-iwaisawa



©Google Earth

明治初期の地形図／戦後の空中写真



〔常葉〕1908年測図・1912.4.30発行



1974-78年 国土地理院

1889(明治22)年に古道と岩井沢の2ヵ村が合併して都路村が成立。2005(平成17)年、常葉町・大越町・滝根町・船引町との合併により、田村市都路町となる。1975(昭和50)年時点で人口は4092人、2011(平成23)年では3001人と減少する。阿武隈山地のほぼ中央部にある山村であり、山林原野が面積の9割を占め、耕地面積は1割に満たない。高瀬川の支流古道川が村のほぼ中央を北東に流れ、その川に沿ってわずかな平地が広がっている。三春と請戸浜を結ぶ都路街道が交易上の要路で

あり、都路は中通りと浜通りとの結節点にあたる。地名の「都路」は江戸期に三春藩の秋田侯が参勤交代で都(江戸)に向かう途中に通ったことに由来するという。未開地であった古道・岩井沢村は近世に藩財政源を増大させるために初めて開田政策の対象となり、中でも大規模なものは1661年から1673年の奉行栗原兵右衛門によって行われた。江戸期には馬産も行われた。地形的に山林原野が多く放牧に適したが、1803年には古道村に牧場を設けて良馬の繁殖を企てながら、大飢饉後の人

口減少と害獣の影響で数年で廃絶された。その他主要産業として木炭産業があり、木炭は古道・岩井沢・常葉などで焼かれて幕府に献上された。林業と牧畜を組み合わせた産業構造は幕末から第2次世界大戦後まであまり変化しなかったとされる。しかし1950年代のエネルギーや交通機関の変革は、都路の農業経営から木炭生産と馬産を没落させ、その収入源は出稼ぎで代替された。こうした人口流出が過疎化を進行させた。

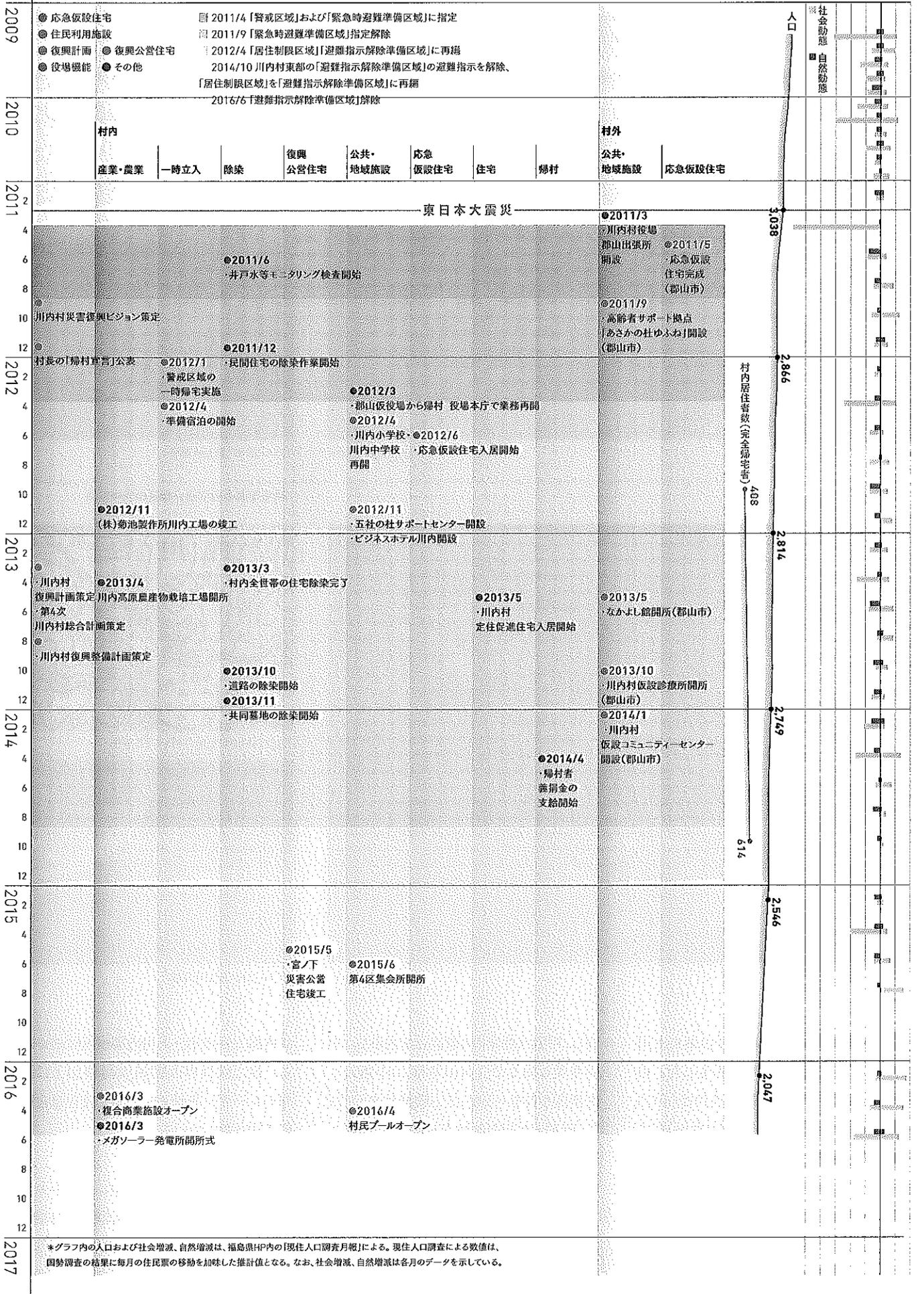
KAWAUCHI

川内村

SCAPE



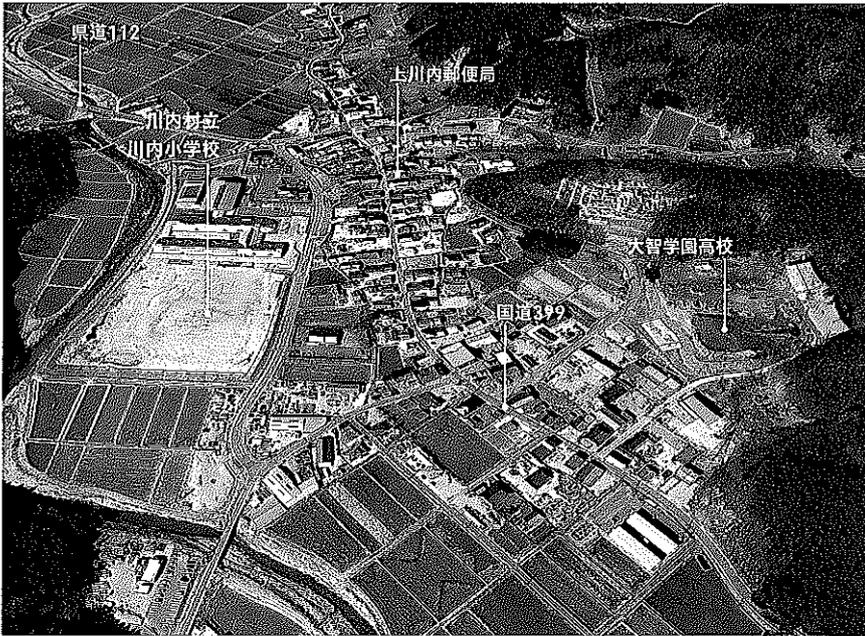
人口の変遷と復興経緯 [A,B,C]



※グラフ内の人口および社会増減、自然増減は、福島県HP内の「現住人口調査月報」による。現住人口調査による数値は、
 国勢調査の結果に毎月の住民票の移動を加味した推計値となる。なお、社会増減、自然増減は各月のデータを示している。

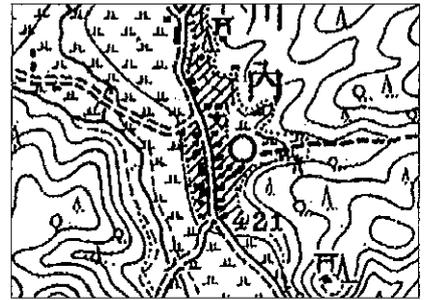
参考資料: *A 福島県HP(<http://www.pref.fukushima.lg.jp>) | *B 川内村HP(<http://www.kawauchimura.jp/index.html>) | *C 川内村「広報かわうち」No.558-no.607 | *D 福島県双葉郡川内村「第四次川内村総合計画」(2013.3) | *E 福島県、郡山市「復興整備計画」(2014.8) | *F 福島県双葉郡川内村「川内村復興計画」(2013.3) | *G 「村の復興と行政機能再編に向けた帰村の意向調査結果について」(<http://www.devast-project.org/img/mapping/川内村帰村の意向調査.pdf>) | *H 復興庁、福島県、川内村「川内村住民意向調査 調査結果(速報版)」(2015.12) | *I 特定非営利活動法人循環型社会推進センター「福島県復興公営入居募集案内」 | *J 福島県「復興公営住宅入居対象市町村ごとの工程表」

上川内 Kamikawauchi



©Google Earth

明治初期の地形図／戦後の空中写真

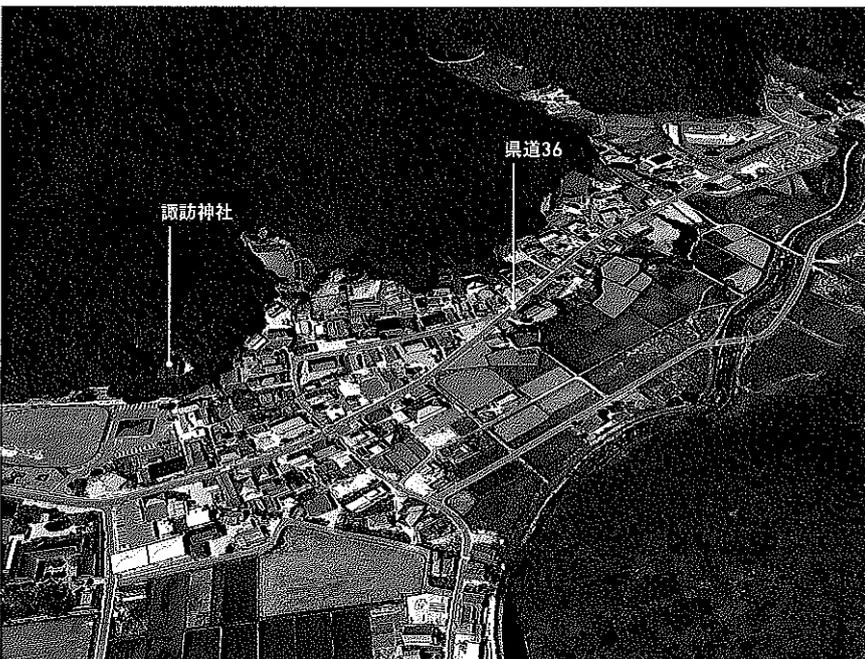


[浪江]1908年測図・1911.4.30発行



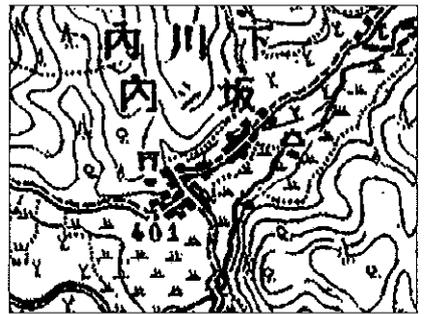
1974-78年 国土地理院

下川内 Shimokawauchi



©Google Earth

明治初期の地形図／戦後の空中写真



[浪江]1908年測図・1911.4.30発行



1974-78年 国土地理院

現在の川内村は、1889(明治22)年に上川内村と下川内村が合併し誕生した。地名の由来は江戸期に遡る。人口は、1975(昭和50)年で4,308人、2010(平成22)年で2,821人と減少している。阿武隈高地に位置する川内村では、集落は平地と山地の中腹か、平地と山地の境界に立地している。江戸から明治にかけて基幹産業は稲作であり、農家の多くは副業として養蚕か木炭を焼いて生計をたてていた。明治の中期には養蚕が村内の一大物産となり、農・工・商家の区別なく副業として蚕を飼

育し、戸数は農家の8割以上を占めた。木炭産業も盛んで、1940(昭和15)年頃には生産高が日本一となった。戦後は米・たばこ・養蚕・牧畜など様々な産業を組み合わせた複合経営型農業に変わった。1963(昭和38)年頃からは兼業農家が主流となり、農業人口が著しく減少しはじめた。2年後には村財政が極度に逼迫したことから企業誘致もはじまった。

上川内 | 村の西半部。中小山岳に囲まれた標高500~600mの地域。村役場・

川内第二小学校・上川内郵便局などがある。第二次世界大戦後大滝根山上に米軍のレーダー基地が造られ、現在は自衛隊が引き継いでいる。

下川内 | 村の東半部を占め、その半分は山岳で、北は大熊町、東は富岡町・檜葉町に接する。木戸川沿いを通る主要地方道いわき古道線は、字坂シ内为主要地方道小野富岡線を分岐する。峡谷のわずかな平地に毛戸・五枚沢の各集落がある。川内第一小学校や諏訪神社などがある。

役場

南相馬市

南相馬市役所

南相馬市原町区本町2-27
Tel. 0244-22-2111

南相馬市 小高区役所

南相馬市小高区本町2-78
Tel. 0244-44-2112

南相馬市 鹿島区役所

南相馬市鹿島区西町1-1
Tel. 0244-46-2111

浪江町

浪江町役場 二本松事務所

二本松市北トロミ573
Tel. 0243-62-0123

浪江町役場本庁舎(復興再生事務所)

双葉郡浪江町幾世橋六反田7-2
Tel. 0240-34-2111

浪江町役場 福島出張所(生活支援課)

福島市五老内町3-1
(福島市役所9階西側)
Tel. 024-535-0750

浪江町役場 桑折出張所(生活支援課)

伊達郡桑折町東大隅18
(桑折町役場2階)
Tel. 024-582-2130

浪江町役場 本宮出張所(生活支援課)

本宮市白岩堤崎494-22
(本宮市役所白沢総合支所1階)
Tel. 0243-44-1185

浪江町役場 いわき出張所

(生活支援課)
いわき市平堂根町1-4
(いわき市文化センター2階第4会議室)
Tel. 0246-24-0020

浪江町役場 南相馬出張所

(生活支援課)
南相馬市原町区青葉町2-62-2
Tel. 0244-23-1112

双葉町

双葉町役場 いわき事務所

いわき市東田町2-19-4
Tel. 0246-84-5200

双葉町役場 郡山支所

郡山市朝日1-20-2
Tel. 024-973-8090

双葉町役場 埼玉支所

埼玉県加須市騎西36-1
加須市騎西総合支所内
Tel. 0480-53-7780

双葉町役場 いわき南台連絡所

いわき市南台3-1-1
Tel. 0246-38-7450

双葉町役場 つくば連絡所

茨城県つくば市並木3-1 551棟
Tel. 029-854-7511

双葉町役場 南相馬連絡所

南相馬市原町区青葉町2-62-2
(浪江町役場南相馬出張所内2階)
Tel. 0244-32-1275

大熊町

大熊町役場 会津若松出張所

会津若松市追手町2-41
Tel. 0120-26-3844

大熊町役場 いわき出張所

いわき市好間工業団地1-43
Tel. 0120-26-5671

大熊町役場 中通り連絡事務所

郡山市希望ヶ丘11-10
Tel. 0120-24-1013

大熊町役場 大川原連絡事務所

双葉郡大熊町大川原南平1734-1
Tel. 0120-23-1095

富岡町

富岡町役場

双葉郡富岡町本岡王塚622-1
Tel. 0120-33-6466

富岡町役場 郡山事務所

郡山市大槻町西ノ宮48-5
Tel. 0120-33-6466

富岡町役場 いわき支所

いわき市平北白土宮前8
Tel. 0120-33-6466

富岡町役場 三春出張所

田村郡三春町具山泉沢100-1
Tel. 0120-33-6466

富岡町役場 大玉出張所

安達郡大玉村玉井台45-1
Tel. 0120-33-6466

富岡町役場 桑野分室(教育総務課)

郡山市桑野2-1-1
Tel. 0120-33-6466

檜葉町

檜葉町役場

双葉郡檜葉町北田鐘突堂5-6
Tel. 0240-25-2111

檜葉町役場 いわき出張所

いわき市平谷川瀬1-1-1
Tel. 0246-25-5561

檜葉町役場 会津美里出張所

大沼郡会津美里町本郷道上1
Tel. 0242-56-2155

広野町

広野町役場

双葉郡広野町下北追苗代替35
Tel. 0240-27-2111

飯館村

飯館村役場

相馬郡飯館村伊丹沢伊丹沢580-1
Tel. 0244-42-1611

飯館村役場 飯野支所

福島市飯野町後川10-2
Tel. 024-562-4258

交流センター「ふれ愛館」生涯学習課

相馬郡飯館村草野大師堂17
Tel. 0244-42-0072

いちばん館 健康福祉課

相馬郡飯館村伊丹沢伊丹沢571
Tel. 0244-42-1637

川俣町

川俣町役場

伊達郡川俣町五百田30
Tel. 024-566-2111

川俣町役場 山木屋出張所

伊達郡川俣町山木屋小塚5-8
Tel. 024-563-2021

葛尾村

葛尾村役場

双葉郡葛尾村落合落合16
Tel. 0240-29-2111

葛尾村役場 三春出張所

田村郡三春町具山井堀田287-1
Tel. 0247-61-2850

田村市

田村市役所

田村市船引町船引畑添76-2
Tel. 0247-81-2111

川内村

川内村役場

双葉郡川内村上川内早渡11-24
Tel. 0240-38-2111

救急病院

南相馬市

南相馬市立総合病院

南相馬市原町区高見町2-54-6
Tel. 0244-22-3181

小野田病院

南相馬市原町区旭町3-21
Tel. 0244-24-1111

大町病院

南相馬市原町区大町3-97
Tel. 0244-24-2333

鹿島厚生病院

南相馬市鹿島区横手川原2
Tel. 0244-46-5125

川俣町

川俣病院

伊達郡川俣町鶴沢川端2-4
Tel. 024-566-2323

郡山市

太田綜合病院附属 太田熱海病院

郡山市熱海町熱海5-240
Tel. 024-984-0088

太田綜合病院附属 太田西ノ内病院

郡山市西ノ内2-5-20
Tel. 024-925-1188

桑野協立病院

郡山市島2-9-18
Tel. 024-933-5422

寿泉堂綜合病院

郡山市駅前1-1-17
Tel. 024-932-6363

星総合病院

郡山市向河原町159-1
Tel. 024-983-5511

総合南東北病院

郡山市八山田7-115
Tel. 024-934-5322

いわき市

いわき市立総合警城共立病院

いわき市内郷御殿町久世原16
Tel. 0246-26-3151

吳羽総合病院

いわき市錦町落合1-1
Tel. 0246-63-2181

かしま病院

いわき市鹿島町下蔵持中沢目22-1
Tel. 0246-58-8010

福島労災病院

いわき市内郷綴町沼尻3
Tel. 0246-26-1111

松村総合病院

いわき市平小太郎町1-1
Tel. 0246-23-2161

常磐病院

いわき市常磐上湯長谷町上ノ台57
Tel. 0246-43-4175

二本松市

栴記念病院

二本松市住吉100
Tel. 0243-22-3100

二本松病院

二本松市成田町1-553
Tel. 0243-23-1231

福島市

大原綜合病院附属大原医療センター

福島市鎌田中江33
Tel. 024-554-2001

福島県立医科大学附属病院

福島市光が丘1
Tel. 024-547-1111

脳神経疾患研究所附属
南東北福島病院
福島市荒井北3-1-13
Tel. 024-593-5100

福島総合病院
福島市大森下原田25
Tel. 024-544-5171

あづま脳神経外科病院
福島市大森柳下16-1
Tel. 024-546-3911

大原総合病院
福島市大町6-11
Tel. 024-526-0300

わたり病院
福島市渡利中江町34
Tel. 024-521-2056

福島西部病院
福島市東中央3-15
Tel. 024-533-2121

福島赤十字病院
福島市入江町11-31
Tel. 024-534-6101

福島南循環器科病院
福島市方木田辻の内3-5
Tel. 024-546-1221

福島第一病院
福島市北沢又成出16-2
Tel. 024-557-5111

警察

南相馬市

南相馬警察署
南相馬市原町区高見町1-262
Tel. 0244-22-2191

南相馬警察署 駅前交番
南相馬市原町区旭町2-27-2
Tel. 0244-23-1711

南相馬警察署 鹿島駐在所
南相馬市鹿島区西町1-128
Tel. 0244-46-3308

南相馬警察署 上真野駐在所
南相馬市鹿島区浮田上浮田19
Tel. 0244-47-2151

南相馬警察署 北長野駐在所
南相馬市原町区北長野北原田269-2
Tel. 0244-22-1593

南相馬警察署 小高駐在所
南相馬市小高区東町1-121
Tel. 0244-44-2029

南相馬警察署 太田駐在所
南相馬市原町区益田塩釜25
Tel. 0244-22-5509

浪江町

双葉警察署 浪江分庁舎
双葉郡浪江町権現堂上蔵役目18-1
Tel. 0240-34-2141

大熊町

双葉警察署 大熊駐在所
双葉郡大熊町下野上大野797-2
Tel. 0240-32-2121

富岡町

双葉警察署
双葉郡富岡町中央2-19
Tel. 0240-22-2121

楢葉町

双葉警察署 楢葉臨時庁舎
双葉郡楢葉町山田岡大堤入22-1
Tel. 0240-25-1500

広野町

双葉警察署 広野駐在所
双葉郡広野町下北迫苗代替4-1
Tel. 0240-27-3225

飯館村

南相馬警察署 飯館駐在所
相馬郡飯館村草野大師堂74-1
Tel. 0244-42-0110

川俣町

福島警察署 川俣分庁舎
伊達郡川俣町鶴沢下中島20-2
Tel. 024-566-3121

福島警察署 山木屋駐在所

伊達郡川俣町山木屋大清水3-2
Tel. 024-563-2110

葛尾村

双葉警察署 葛尾駐在所
双葉郡葛尾村落合関下5-1
Tel. 0240-29-2121

田村市

田村警察署 船引幹部交番
田村市船引町船引南町通160
Tel. 0247-82-1506

田村警察署 栗田駐在所
田村市船引町栗田栗田18-2
Tel. 0247-62-2164

田村警察署 常葉駐在所
田村市常葉町常葉平館57
Tel. 0247-77-2121

田村警察署 瀬川駐在所
田村市船引町新館軽井沢730-1
Tel. 0247-84-2121

田村警察署 七郷駐在所
田村市船引町門沢宮ノ平189-1
Tel. 0247-85-2121

田村警察署 大越駐在所
田村市大越町上大越蟹沢98-1
Tel. 0247-79-2211

田村警察署 移駐在所
田村市船引町上移根岸38-4
Tel. 0247-86-2121

田村警察署 滝根駐在所
田村市滝根町神俣梵天川255-1
Tel. 0247-78-2121

田村警察署 都路駐在所
田村市都路町古道遠下前93
Tel. 0247-75-2121

川内村

双葉警察署 川内駐在所
双葉郡川内村上川内町分174-1
Tel. 0240-38-2022

消防

南相馬市

相馬地方広域消防本部
南相馬市原町区高見町1-272
Tel. 0244-22-4164

南相馬消防署

南相馬市原町区高見町1-272
Tel. 0244-22-2186

小高分署

南相馬市小高区本町2-78
Tel. 0244-44-2212

鹿島分署

南相馬市鹿島区西町1-2
Tel. 0244-46-5118

浪江町

浪江臨時庁舎
双葉郡浪江町幾世橋芋頭5-2
(サンシャイン浪江)
Tel. 0240-34-7360

富岡町

富岡消防署 臨時拠点
双葉郡富岡町中央2-86
Tel. 0240-23-6951

楢葉町

双葉地方広域市町村圏組合 消防本部
双葉郡楢葉町山田岡仲丸1-110
Tel. 0240-25-8523

飯館村

南相馬消防署 飯館分署
相馬郡飯館村草野大師堂14
Tel. 0244-42-0119

川俣町

伊達地方消防組合 中央消防署南分署
伊達郡川俣町五百田31
Tel. 024-566-2145

葛尾村

浪江消防署 葛尾出張所
双葉郡葛尾村落合落合11
Tel. 0240-29-2119

田村市

田村消防署
田村市船引町船引中島70
Tel. 0247-82-1200

田村消防署 大越分遣所
田村市大越町下大越中田140-2
Tel. 0247-68-3899

田村消防署 常葉分署
田村市常葉町常葉古御門61
Tel. 0247-77-2271

田村消防署 移分駐所
田村市船引町上移後田52
Tel. 0247-86-2950

田村消防署 滝根分署
田村市滝根町菅谷入水257-1
Tel. 0247-78-2511

田村消防署 都路分署
田村市都路町古道戸屋79
Tel. 0247-75-3000

川内村

富岡消防署 川内出張
双葉郡川内村上川内早渡11-4
Tel. 0240-38-2119

その他

仕事に関する相談窓口

ふくしま就職応援センター 南相馬窓口
南相馬市原町区南町1-1 松本ビル2階
Tel. 0244-23-1239

移住に関する相談窓口

南相馬市ふるさと帰郷支援センター
南相馬市原町区高見町2-30-1
道の駅南相馬 観光交流館内
Tel. 0244-24-5555

一時立入り休憩施設

双葉町コミュニティセンター
双葉郡双葉町長塚町西39-22
ステーションプラザふたば
Tel. 0240-23-0051

双葉町ふれあい広場
双葉郡双葉町中野地内
(前田・奥村・田中JV 双葉町作業所
相談窓口)
Tel. 0240-26-0508



その他の詳細な施設情報は
「帰郷支援アプリ」をご活用下さい。

避難地域と避難者の受け入れや
自主避難者の多い市町村の住民の方へ、
帰郷を支援する情報やふるさとの情報を
伝えるアプリを提供しています。

福島アトラス 011 FUKUSHIMA ATLAS

福島県福島12市町村の復興をきそための地図集
Recovery Maps for 12 Municipalities from Evacuation

2017年2月30日発行

発行所
福島県復興財団
福島復興財団 復興まちづくりセンター
〒963-8085 福島県郡山市津島4-10-27
TEL.024-955-6835

発行者
福島復興財団
福島復興財団 復興まちづくりセンター

責任者
青野謙次(復興まちづくり推進部長)
田沼浩幸(復興まちづくり推進部長)

編集
川崎大介

デザイン
中野智也、水谷正太郎(中野智也、水谷正太郎)

編集協力
東北復興財団 復興まちづくりセンター
(021-576-5100) 復興まちづくりセンター(024-955-6835)
若谷謙徳、高田大輔、田沼浩幸、大西浩司
(024-955-6835)

印刷会社
株式会社カネテ
(03-6746-4929, 29381-3771, 27351-5959)

印刷
株式会社カネテ
但本大会記号印刷部印刷部

※本冊は福島県復興財団が委託した株式会社カネテが印刷したもので、福島県復興財団(県内)が委託した印刷業者(県外)の印刷に補助金が充てられているものと見られます。

